

神奈川県・鎌倉市

甘縄神社遺跡群発掘調査報告書

鎌倉消防署・長谷出張所
改築に伴う緊急調査報告書
— 鎌倉市長谷一丁目271番10 —

平成7年7月

甘縄神社遺跡群発掘調査団・編集
鎌倉市教育委員会・発行



△ 調査地点上空から市街地を望む

写真下方右端が調査地点。左側に甘縄神社島居
右側に見える道路が国道134号線（長谷小路）



▽ 1区3面全景

△ 3面柱穴検出状況



例 言

1. 本書は、鎌倉市長谷一丁目271番10に於ける鎌倉消防署・長谷出張所改築に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土品の整理・本書の編集は、鎌倉市より委託を受けた「甘縄神社遺跡群発掘調査団（団長 大三輪龍彦）」が行った。
3. 発掘調査は、平成4年12月7日から平成5年3月31日まで実施し、整理作業は平成5年6月1日から平成6年3月31日まで実施した。調査対象面積は約160㎡である。
4. 発掘調査団構成及び整理作業参加者は本頁下段に示した。発掘調査及び整理作業にあたっては多くの方々から御教示・御指導をいただいた。あわせて本頁下段に記名させていただいた。
5. 本書の執筆・編集はおもに木村が行い、第三章第4節 銭を橋場君男が、第四章第2節 中世以前の遺物を佐藤仁彦が執筆した。遺物の実測・図版作成は木村・佐藤の他、小西さつき・小林重子・須佐直子が分担した。本書に使用した写真は、口絵1・PL1・2のラジコンヘリによる空撮をシン技術コンサルに依頼し、その他の写真は全て木村が撮影した。各面の全景写真は自作のリモコン式高所撮影装置（ボール撮影装置）を用いて撮影した。
6. 出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

調査団の構成

団 長	大三輪龍彦	（鶴見大学教授）
主任調査員	木村美代治	（鎌倉考古学研究所）
調 査 員	福田 誠・菊川 泉	（鎌倉考古学研究所）
調査補助員	菊地正明・山縣好学・小西さつき 岩野裕巳・本城 裕・木村春美	
調査協力者	成田初枝・河盛ミサエ 福本寿夫・萱野輝男・松崎靖弘	（高齢者事業団）

整理参加者

木村美代治・小西さつき・佐藤仁彦・小林重子・須佐直子・橋場君男・岡部静香
高齢者事業団

御教示・御指導を頂いた方々（敬称略）

手塚直樹・河野眞知郎・斉木秀雄・馬淵和雄・宮田 真・宗豪秀明・大河内勉
田代郁夫・原 廣志・継 実・瀬田哲夫・菊川英政・汐見一夫・清水素穂
東国歴史考古学研究所・鎌倉市教育委員会

目 次

本 文 目 次

第一章 調査地点の位置と環境	1
第二章 調査の経過と層序	6
第1節 調査の経過	6
第2節 層序と遺構面	8
第三章 検出された遺構と遺物	10
第1節 1面の遺構と遺物	10
礎石	12
土壌	12
1面出土の遺物	14
第2節 2面の遺構と遺物	16
建物・掘立柱建物	18
土壌	27
2面出土の遺物	33
2面土丹地業層出土の遺物	38
第3節 3面の遺構と遺物	40
建物・掘立柱建物	42
方形竪穴建物	73
木組遺構	74
土壌	75
3面出土の遺物	80
第4節 銭	92
第四章 中世以前の調査	97
第1節 中世以前のトレンチ	97
第2節 中世以前の遺物	100
第五章 まとめ	115

挿 図 目 次

図 1 鎌倉市内図	1	図33 建物13	59
図 2 調査地点周辺図	2	図34 建物14	61
図 3 グリッド配置図	7	図35 建物15	63
図 4 土層模式図	9	図36 建物16	64
図 5 1面遺構全測図	11	図37 建物17	65
図 6 1面土壌	12	図38 建物18	66
図 7 1面出土の遺物(1)	14	図39 建物19	67
図 8 1面出土の遺物(2)	15	図40 建物20	68
図 9 2面礎板接合図	16	図41 その他の柱穴列	69
図10 2面遺構全測図	17	図42 3面柱穴出土の遺物	71
図11 建物 1	19	図43 方形堅穴建物	73
図12 建物 2	23	図44 方形堅穴建物出土の遺物	74
図13 建物 3	25	図45 木組遺構	75
図14 建物 4	26	図46 3面土壌	76
図15 2面土壌	28	図47 3面土壌19・20出土の遺物	77
図16 2面土壌 8 出土の遺物	30	図48 3面土壌21出土の遺物	78
図17 2面土壌・柱穴出土の遺物	31	図49 3面出土の遺物(1)	81
図18 2面出土の遺物(1)	34	図50 3面出土の遺物(2)	83
図19 2面出土の遺物(2)	35	図51 3面出土の遺物(3)	85
図20 2面出土の遺物(3)	36	図52 3面出土の遺物(4)	86
図21 2面土丹地葉層出土の遺物	39	図53 3面出土の遺物(5)	87
図22 調査区南北土層断面図	40	図54 3面出土の遺物(6)	88
図23 3面遺構全測図	41	図55 3面出土の遺物(7)	90
図24 3面礎板接合図	42	図56 礎板実測図	91
図25 建物 5	43	図57 銭拓影(1)	94
図26 建物 6	45	図58 銭拓影(2)	95
図27 建物 7	47	図59 銭拓影(3)	96
図28 建物 8	49	図60 トレンチ配置図	98
図29 建物 9	51	図61 トレンチ実測図	99
図30 建物10	53	図62 中世以前の遺物(土師器)	102
図31 建物11	55	図63 中世以前の遺物(土師器)	105
図32 建物12	57	図64 中世以前の遺物(須恵器)	108

図65 中世以前の遺物（灰釉陶器他）	110	図67 建物配置図	117
図66 建物変遷図	116	図68 柱穴土層断面模式図	119

表 目 次

表1 1面かわらけ計測表	15	表16 建物14柱穴観察表	60
表2 建物1柱穴観察表	18	表17 建物15柱穴観察表	63
表3 建物2柱穴観察表	22	表18 建物16柱穴観察表	64
表4 建物3柱穴観察表	25	表19 建物17柱穴観察表	65
表5 建物4柱穴観察表	27	表20 建物18柱穴観察表	66
表6 2面かわらけ計測表	37	表21 建物19柱穴観察表	67
表7 建物5柱穴観察表	43	表22 建物20柱穴観察表	69
表8 建物6柱穴観察表	44	表23 その他の柱穴列柱穴観察表	70
表9 建物7柱穴観察表	46	表24 3面かわらけ計測表（1）	72
表10 建物8柱穴観察表	48	表25 3面かわらけ計測表（2）	89
表11 建物9柱穴観察表	50	表26 銭出土枚数一覧表	92
表12 建物10柱穴観察表	52	表27 出土銭一覧表	93
表13 建物11柱穴観察表	54	表28 中世以前の遺物出土割合一覧表	100
表14 建物12柱穴観察表	56	表29 建物一覧表	115
表15 建物13柱穴観察表	58		

写 真 目 次

PL. 1 A. 調査地点遠景	B. 調査地点全景
PL. 2 A. ラジコンヘリによる撮影風景	B. 調査地点上空より市街地を望む
PL. 3 A. 1区1面全景（南より）	B. 2区1面全景（東より）
PL. 4 A. 礎石検出状況（1区・1面）	B. 常滑甕出土状況（1区・1面）
C. かわらけ出土状況（1区・1面）	D. かわらけ出土状況（2区・1面）
PL. 5 A. 1区2面全景（南より）	B. 2区2面全景（東より）
PL. 6 A. 建物1柱穴15検出状況	B. 建物1柱穴10検出状況
C. 建物1柱穴3土層断面	D. 建物1柱穴10土層断面
E. 建物1柱穴5土層断面	

- PL. 7 A. 建物2柱穴13土層断面
C. 建物2柱穴11～13間土層断面
E. 土壇9土層断面
- PL. 8 A. 1区3面全景（南より）
B. 1区3面全景（東より）
- PL. 9 A. 柱穴検出状況（2区）
B. 土壇21（北より）
C. 2区3面全景（東より）
- PL.10 A. 礎板検出状況（C-4グリット付近）
B. 柱穴土層断面
C. 柱穴土層断面
D. 2区東壁土層断面
- PL.11 A. 方形堅穴建物（西より）
B. 方形堅穴建物土層断面
C. 方形堅穴建物横木部分
- PL.12 A. 方形堅穴建物横木部分
B. 方形堅穴建物木組部分
C. 木組遺構1（南より）
D. 木組遺構西面
- PL.13 A. トレンチ1北壁
B. トレンチ2（南より）
C. トレンチ2・3（南より）
D. トレンチ2東壁
- PL.14 A. トレンチ3（西より）
B. トレンチ3東壁
C. トレンチ3北壁
- PL.15 青磁・白磁
- PL.16 青白磁・瀬戸・山茶碗・白かわらけ・黒縁皿
銅釜・伊勢系土鍋・瓦器・吉備系土師質土器
- PL.17 魚住・山茶碗・常滑壺・磨減陶片・羽口・とりべ
- PL.18 常滑甕・常滑鉢
- PL.19 常滑鉢・山茶碗窯系鉢・手焙り
- PL.20 かわらけ（1面、土壇8・9・15）
- PL.21 かわらけ（2面）
- PL.22 かわらけ（2面、2面土丹地薬層）
- PL.23 かわらけ（3面柱穴、方形堅穴建物、土壇21、3面）
- PL.24 かわらけ（3面）
- PL.25 土鍾・土丹製品・硯・砥石・滑石製品
- PL.26 土師器（坏）
- PL.27 土師器（壺・甕）・墨書土器
- PL.28 須恵器・灰釉陶器

第一章 調査地点の位置と環境

本調査地点は、鎌倉市長谷一丁目271番10に所在している。若宮大路の下馬交差点から西へ走る国道134号線が長谷寺前の交差点に突き当たる150m程手前、甘縄神明神社（甘縄神社）に至る参道の西側に位置し、国道に面している。長谷寺前の交差点から西へ参道を150m程進むと長谷寺、北へ400m程進むと高德院（大仏）、さらに西へ折れながら300m程進むと新大仏隧道があり、その北東側の尾根筋に大仏坂切通がある。これを越えると常盤である。交差点から300m程南へ進み海岸へ出る手前を西に折れ350m程行くと極楽寺坂である。本調査地点は現在は大半が暗渠になっているが稲瀬川と美奈ノ瀬川に挟まれた地点に位置している。稲瀬川は大仏の東の谷（大谷戸）、西の谷（小谷戸）の支流が大仏前で合流して長谷寺前の交差点付近を南下し、東へやや蛇行しながら由比ヶ浜に注いでいる。美奈ノ瀬川は本調査地点から200m程東にある長楽寺谷から発すると考えられ、稲瀬川河口のすぐ東に注いでいる。現在は埋め立てによって河口は二つに分かれているが、本来河口付近は一つの川であり、その名前は万葉集にもみることができる。



図1 鎌倉市内図

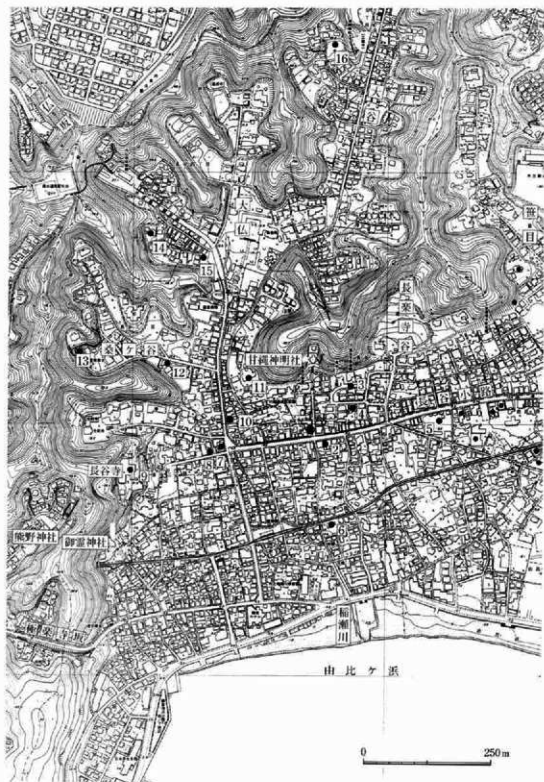


図2 調査地点周辺図

本調査地点周辺は甘縄神社遺跡群(神奈川県遺跡台帳 №177)と呼ばれ、国道134号線の北側、甘縄神社参道の両側東西250m、南北100m程の範囲をさしている。本遺跡群を包み込むように本遺跡群の東西両側と国道を挟んで南側一体は長谷小路周辺遺跡群(同 №236)と呼ばれている。本遺跡群に冠された甘縄神社は調査地点の北側丘陵の中腹に鎮座し、坂ノ下・御霊神社、材木座・由比若宮(元八幡)とならんで鎌倉幕府開府以前から鎮座するといわれている古い社である。勧請年月は未詳であるが『相州鎌倉郡御山甘縄寺神明宮縁起略』によれば和銅3年(710)8月行基の創設と伝えており、また『吾妻鏡』では「伊勢別宮」としている。甘縄神社は安達氏が守護にあたり、社殿近くに安達氏の屋敷があったとされている。古来から御霊神社・甘縄神社・由比若宮を結ぶ道筋は稲村ヶ崎から鎌倉に入り逗子・三浦方面へ通じる交通の要所であったと考えられている。

『吾妻鏡』に記された甘縄神明神社関連の記事を抜粋してみると

- 文治2年(1186)正月2日 「及暮雪、二品并御臺所御参甘縄神明宮、以御還向使路入御藤九郎盛長家²⁾。」
- 10月24日 「甘縄神明寶殿被加修理、今日立四面荒垣并鳥居、藤九郎盛長沙汰之、二品監臨給 … 」
- 文治5年(1189)10月17日 「御臺所御参鶴岳宮并甘縄神明、是報賽御神拜²⁾。」
- 建久5年(1194)正月4日 「甘縄宮御霊社御奉幣、知家爲御使」
- 6月26日 「未明、將軍家御参甘縄宮、是伊勢別宮也」
- 同8月22日 「將軍家参甘縄宮、伊勢別宮、以還向之時入御藤九郎盛長家²⁾。」
- 建保3年(1215)4月2日 「今詣甘縄神宮并日吉別宮等給、以御還路之次、入御于安達右衛門尉景盛家²⁾。」

調査地点一覧

1. 本調査地点		
2. 長谷二丁目252番1地点	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7	(1991)
3. 長谷一丁目227番地点(伝安達泰盛邸跡)	鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1	(1983)
4. 長谷一丁目236番1地点		
5. 由比・浜三丁目202番2外地点	長谷小路南遺跡発掘調査報告書	(1992)
6. 由比・浜南遺跡		
7. 長谷三丁目39番4外地点	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11	(1995)
8. 長谷三丁目41番イ地点	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10	(1994)
9. 長谷寺境内遺跡	海光山慈照院長谷寺観音堂改築工事に関わる埋蔵文化財の調査報告書	(1985)
10. 長谷一丁目284番1地点	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4	(1988)
11. 長谷一丁目290番1地点	高德院周辺遺跡(同地点)発掘調査報告書	(1989)
12. 長谷三丁目630番1、17地点	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7	(1991)
13. 長谷三丁目629番20外地点		
14. 長谷四丁目541番1外地点		
15. 長谷四丁目548番4外地点	高德院周辺遺跡(同地点)発掘調査報告書	(1995)
16. 高德院周辺遺跡(長谷五丁目やぐら)		

とあり、源頼朝をはじめ北条政子や源実朝が何度か参詣している。また文治2年10月24日には社殿を修理し、四面に荒垣及び鳥居を建てていることがわかる。

このほか「甘縄」という地名は『吾妻鏡』をはじめいくつかの史料に度々みられる。少し長くなるがこれらを抜粋しておこう。

『吾妻鏡』

- 治承4年(1180)12月20日 「… 今日御行始之儀、入御藤九郎盛長甘縄之家 …」
- 養和2年(1182)正月3日 「武衛御行始、渡御于藤九郎盛長甘縄家 …」
- 寿永元年(1182)12月7日 「夜深人定之後、武衛御参鶴岳 … 武衛御感之餘、召出御前、賜甘縄邊田一丁」
- 文治元年(1185)12月28日 「甘縄邊土民^{平次^四三^五}、去夜於因上乍立頓死、人舉見之、家中之輩語群集者云、及半更、即戸有喚此男之名字者 …」
- 文治2年(1186)6月10日 「晩頭甚雷雨鳴、今日、丹後内侍於甘縄家病惱、二品爲令訪其林給、潛渡御彼所、朝光嵐額外無候于御供之者^二。」
- 建久2年(1191)3月4日 「陰、南風烈、丑刻小町大路邊失火、 … 寅刻入御藤九郎盛長甘縄宅、依炎上事也」
- 7月28日 「寢殿對屋御殿等過車之間、今日御移徙之儀也、及亥刻、自藤九郎盛長甘縄家入御新御亭 …」
- 建久3年(1192)11月5日 「卯刻、新凝若公御行始也、入御藤九郎盛長甘縄家、被用御興 …」
- 建久4年(1193)7月2日 「… 而今日聞可被泉首之由、出甘縄邊、念佛讀誦之後自殺^二。」 …」
- 建久5年(1194)正月8日 「將軍家入御藤九郎盛長甘縄家」
- 12月1日 「將軍家入御藤九郎盛長甘縄家、被奉行上野國中寺社 …」
- 建久6年(1195)正月4日 「將軍家入御藤九郎盛長甘縄家、三浦介義澄以下令供奉^二。」
- 12月22日 「將軍家入御藤九郎盛長甘縄家、今夜御止宿^二。」
- 正治元年(1199)8月19日 「… 及晚小笠原揚旗、赴藤九郎入道蓮西之甘縄宅、至此時、鎌倉中壯士等爭鋒競集、依之尼御臺所俄以渡御于盛長宅 …」
- 正治2年(1200)8月21日 「… 午刻宮城首途、出甘縄宅参御所 …」
- 建曆3年(1213)2月15日 「… 爲望合力之率、向彼司馬甘縄家處、依存忠直召進之^二。」 …」
- 5月3日 「… 廣元爲御願書取筆、其奥以御自筆被加二首歌、即以公氏、被奉彼御願書於鶴岳、當時時、大學助義清自甘縄入龜谷、經寢堂前路次欲参旅御所之處、於若宮赤橋之邊流矢之所犯、義清之命 …」
- 貞応3年(1224)3月19日 「… 丑刻、甘縄山麓以南三町餘燒亡、千葉介胤綱家在其中」
- 寛喜元年(1229)12月25日 「今夜寢堂下邊燒亡、于時風烈餘燭如飛、至于若宮大路甘縄等之人屋」
- 寛喜3年(1231)正月25日 「鶺、未刻名越邊失火、越後四郎時幸、町野加賀守康俊宿所等災、

同時甘繩邊人家五十餘宇燒失、放火^ニ。」

10月19日 「雨頗降、改二階堂御堂之地、甘繩城太郎南、千葉介之北、被點定西山之傍、兩國司亦巡檢給 …」

寛喜4年(1232) 2月14日 「甘繩邊民居燒亡」

文暦2年(1235) 正月21日 「御願五大堂建立事、相州武州度々巡狩鎌倉中、(檢被撰鎌倉中之)被選勝地、去年雖被定城太郎甘繩地、猶^モ意不相叶、頗思食煩之處、相當于幕府鬼門方有此地、毛利藏人大夫入道西阿領也 …」

嘉禎4年(1238) 正月20日 「… 午刻將軍家依可有御上洛、爲御出門入御于秋田城介義景甘繩家、被召御輿、御立烏帽子、御直垂也 …」

仁治2年(1241) 3月17日 「天霽、丑刻災風烈、自濱邊人居失火起、限甘繩山麓、數百宇災、千葉介舊宅、秋田城介、伯耆前司等家在其中^ニ。」

仁治4年(1243) 正月5日 「天霽、將軍家入御秋田城介甘繩家、被用御車 …」

寛元2年(1244) 6月13日 「… 今日有御行始之儀、入御于秋田城介義景甘繩之家 …」

寛元4年(1246) 5月22日 「天晴、寅刻秋田城介義景家中并甘繩邊騒動、緯已及廣々」

宝治元年(1247) 4月4日 「今日秋田城介入道覺地^{即有某所、自}自高野下着、在甘繩本家^ニ。」

5月18日 「今夕有光物、自西方亘東天、其光暫不消、于時秋田城介義景甘繩家白獸一流出現、人觀之^ニ。」

6月5日 「… 曾莫期後日者、依之城九郎泰盛、大曾禰左衛門尉長泰、武藤左衛門尉景賴、橘薩摩十郎公義以下一味之族引率軍士、馳出甘繩之館、同門前小路東行、到若宮大路中下馬橋切北、打該鶴岡宮寺赤橋相構、盛阿歸參以前、出神護寺門外作時聲 …」

建長3年(1251) 正月5日 「天霽、二位殿并二棟御方等御行始、秋田城介義景甘繩第入御」

2月10日 「天晴、甘繩邊燒亡、從火地相法橋之宅起、自戌刻到子之一點不止、東若宮大路、南由比々濱、北中下馬橋、西佐々目谷也 …」

5月1日 「天霽、相州室家產所^{即甘繩邊}、被始御祈禱等行^ニ。」

建長5年(1253) 9月14日 「雨降、雷鳴數聲、城介入道百々日佛事、於甘繩舊宅行之、導師若宮僧正隆弁」

正嘉2年(1258) 正月17日 「霽、丑刻秋田城介泰盛甘繩宅失火、南風頗扇、越藥師堂後山到壽福寺、惣門、佛殿、庫裡、方丈已下郭內不殘一字、餘炎新清水寺、圓堂并其邊民屋、若宮寶藏、同別當坊等燒災」

弘長元年(1261) 4月23日 「雨降、相模太郎殿^{十一}、御嫁娶^内、女房自甘繩亭御出之時、掃部助範元候御身固、為此御祈、自去廿二日天曹地府、咒詛、靈氣等祭動行之^ニ。」

弘長3年(1263) 8月25日 「… 亥刻甘繩有火災、正室邊民居多以災^ニ。」

『見聞私記』

永仁5年(1297)閏10月7日 「自佐々日谷口火出来、甘縄等大焼亡」

『朽木家文書』

延慶2年(1309)12月1日 「譲与 高井兵衛次郎跡甘縄地 一部主 三十四文」

元享2年(1322)11月26日 「甘縄之地一戸主」

嘉暦3年(1328)6月11日 「鎌倉甘縄魚町東頼地一門」

さらに『吾妻鏡』の治承4年10月11日の条には、「御臺所入御鎌倉、景義奉迎之、去夜自伊豆國阿波戸郷、雖令到着給、依日次不宜、止宿稲瀬河邊民居給」とあり、政子が鎌倉に入る時、日次が良くないと言うことから稲瀬川辺の民屋に止宿したという。また暦仁元年5月18日の条には「相模國深沢里大仏御頭奉幸之間八丈」とあり、大仏周辺が深沢の一部であったとされている。本調査地点も含まれているであろう甘縄神社のあたりは大庭御厨の飛地ではなかったかと考えられている。鎌倉市史をはじめ中世の甘縄の範囲は現在の甘縄神社周辺とする説があるが、一方で甘縄の中心はもっと東であると考え、その西辺に佐々目が含まれており、現在の甘縄神社周辺は含まれていないとする説(註1)もある。いずれにしても本調査地点は稲瀬川の東岸に位置し、中世においていわば鎌倉の西のはずれにあたる場所に位置しているといえるであろう。

周辺の調査はごく近いところでは国道を挟んだ調査地点2と東側の調査地点3・4があげられる。調査地点2は約60mと狭いトレンチ調査で遺構の平面的な広がりや性格については不明であるが、土丹(破碎泥岩)を用いた地表面など2時期の生活面が検出され、柱穴などが確認されている。調査地点3は伝安達泰盛邸跡といわれ、木組の溝や塀などが検出されている。調査地点4は2時期の生活面が検出され5間×4間の掘立柱建物や井戸、小規模な溝による区画などが検出されている。また250m程東の調査地点5は砂丘上に位置し方形堅穴建物や井戸、土城が検出され、骨製品・同未製品、鋳造関係の遺物など生産活動を行っていたことを示す遺物が多く検出されている。同地点以東のいわゆる前浜と呼ばれる砂丘上に位置する地域では街中とは大きく異なる様相を呈している。また中世以前の遺物や住居跡なども確認されている。

註1 齊木明美 「第一章 遺跡の位置と環境」『千葉地誌』1982年

玉林美男 長谷小路周辺遺跡 長谷一丁目284番1地点「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4」

吾妻鏡の抜粋は「古川本 吾妻鏡」 名著刊行会 昭和51年9月15日発行を用いた。

第二章 調査の経過と暦序

第1節 調査の経過

本調査は、鎌倉消防署長谷出張所改築に伴う事前調査として実施された。平成3年7月23～24日に鎌倉市教育委員会が試掘調査を実施し、地表下1.8mまで掘り下げた結果、地表下40cm程で中世の遺物包含層と遺構面が確認された。このため本調査を実施することになり大三輪龍彦(鶴見大学

教授)を団長とする「甘縄神社遺跡群発掘調査団」を編成し、本調査を実施した。

建設予定地の敷地面積は約180㎡であるが、建設に伴う調査対象面積は約160㎡である。調査地の東及び南側は道路に面しているが、西及び北側は隣家と接し、特に西側は家屋ときわめて近く崩落防止のため山留めを行うこととした。しかしながら本敷地南東隅にある井戸は地表下3m程のところから岩盤を削り貫いて6.6m程の深さがあり、さらに井戸底から三方にはほぼ水平に横穴が掘られ、最も長いところで9m程続いている。この井戸は現在も湧水量が豊富で、絶えず投入口から数十センチ程のところまで水をたたえている。山留めに際してはこの地下坑を壊さないことを前提にしたため横穴の無い北、西側と東側の北半は日鋼を打ち込んだが、東側の南半と南側は山留めを行えずオープンカットとし、崩落防止のために法面を設けたため調査面積を若干狭めている。表土及び調査中に発生する残土は場外搬出することを前提としたが一時的に残土を置く場所を確保するため調査範囲を二分し、北側約90㎡を1区、南側約40㎡を2区として1区から調査を実施した。

平成4年12月1日から山留めの杭打ちを開始し、これと並行して外柵設置や事務所の搬入等の準

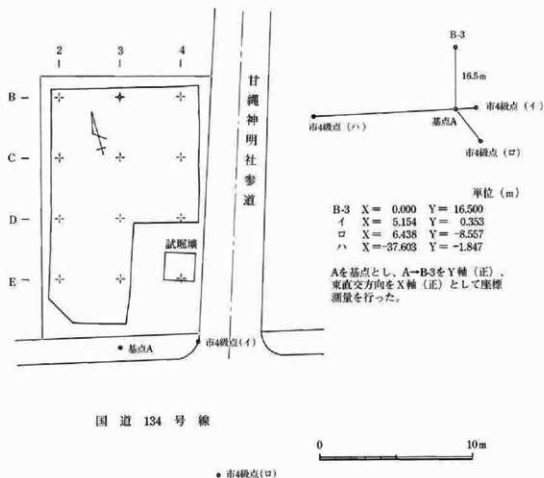


図3 グリッド配置図

備を行い、12月11日から大型重機を使い1区の表土掘削を開始した。1区北東側から表土掘削を行ったところ当初予想したレベルより浅いところで土丹（破碎泥岩）を用いた地業層上に薄く締まりの良い粘土を貼った生活面を検出した。平面的にこの地業層の広がりを確認しこれを1面とした。1面の調査終了後人力で掘り下げ、きわめて堅固な土丹地業層を検出し、これを2面とした。2面の遺構確認は土丹地業層上面で行ったが、正月休みを挟んでしまうため遺構を保護する目的で個々の遺構の掘り上げは休み明けに行うことにした。平成5年1月4日から調査を再開し2面の調査終了後中世基盤層まで掘り下げこれを3面とした。2面から3面にかけは多くの柱穴が検出され、20棟にのぼる掘立柱建物が復元された。2月23日に3面の遺構検出状況で調査地点の遠景及び全景の写真撮影をラジコンヘリコプター（シン技術コンサルに委託）で行った。3面（中世基盤層）の調査終了後、事前のボーリング調査の結果や井戸壁面の観察から岩盤まで1.2m程と予想されたので調査区の3カ所にトレンチを設定し、岩盤まで掘り下げ中世基盤層以下の堆積状況を確認した。

1区調査終了後、1区の半分程を埋め戻し、道路側の2区の調査を3月1日から行った。1区で検出した遺構面の広がりを確認し、遺構の検出を行った。さらに調査区南端にトレンチを設定して岩盤まで掘り下げ中世基盤層以下の土層の堆積状況を確認した。3月27日に現地の調査を終了し、調査器材の搬出と埋め戻し等を行い3月31日に全ての調査を終了した。

調査に於ける基準線は、調査区に合わせ任意に南北軸を設定し、調査区内に4m間隔に基準杭を設定し、南北方向にアルファベット（B・C・D・E）、東西方向に算用数字（2・3・4）をあて、グリットの名称は北西の杭名をもって呼ぶことにした。南北軸は磁北より14度程東に振れているが報告書では便宜上南北軸の北を用いている。本来であれば国土座標にのせた基準線を用いるべきであるが、現在の鎌倉市内の調査では共通する基準線は設定されておらず便宜的に付近の鎌倉市道路管理課が設置した4級基準点3点と任意に設定したグリットの位置関係を光波測定機を用いて座標測定した後の参考にした。遺物の採り上げは遺構単位もしくは層単位を基本としたが、後述するように2～3面にかけはごく薄い整地層が確認され、これを掘り込み面とする柱穴が確認された。これら全てを分層して層位的に遺物を採り上げることは難しく、また分層して採り上げた遺物のうち3面（中世基盤層）直上から出土した遺物と接合するものも認められた。このため報告書では2面構成土（土丹地業層）より下層の遺物を一括して3面出土の遺物として報告している。

第二節 層所と遺構面（図4）

本調査地点の現地表の海拔は約5.7m程で、ほぼ平坦面をなしている。現地表から30～50cm程は近・現代の堆積土（1・2層）で敷地中央は建物の解体時に攪乱されやや窪んでいる。表土層下に暗褐色土（遺物包含層、3・4層）が堆積するが1区中央から東にかけては関東大震災の後片づけの時のものと思われる攪乱が深く掘られており遺物包含層及び1面構成土の一部が失われていた。調査区南側の遺物包含層の厚さは20cm程であった。検出された中世の遺構面は大別して3面であり、検出順に1・2・3面と称した。

1面は海拔5.1~5.2m程のところで検出された。調査区北端で人頭~拳大の土丹(破砕泥岩)を用いた地業層上面に締まりのある粘土を数センチの厚さで貼り付けた面が確認されたが、その主要な範囲は調査区外北及び東側に広がると思われ、調査区内では面的な広がりは確認できなかった。

1面構成土は人頭~拳大の土丹を広い範囲でブロック状に混入する暗茶褐色粘質土(5・6層)から成り、調査区南側にかけは土丹の混入が粗になり、高まる傾向が認められた。5・6層中に混入する土丹が遺構の覆土になる可能性も考えられ、土層断面を観察しながら掘り下げたが遺構としてのプランは確認されず、調査区北半では土丹が2面直上付近から不規則に堆積し1面を構成していた。また南半では部分的に暗茶褐色粘質土層上層に積み増された土丹層が認められた。

1面構成土を30~40cm程掘り下げるときわめて堅固な土丹地業層(a層)が海拔4.7~4.9m程のところで検出され、これを2面とした。この土丹地業層は1区中央から北西にかけてはあまり厚くないが、平均十数センチ程の厚さで調査区全域にわたって確認され、さらに調査区外へ広がっていると思われる。土丹地業層は人頭~拳大の土丹層とこの上部を覆うように指頭大の土丹を築き固めた層に分層でき、さらに場所によってはこの上に拳大の土丹を積んでいるところもある。2区南半では指頭大の土丹地業層の上面に数センチ程の厚さで一様に砂(b層)が敷きつめられ、薄く間層を挟んで炭化物(c層)の堆積が確認された場所もある。

2面から3面にかけては薄く混入物の少ない粘土層や、ややきめの粗い砂層(18~20)が堆積し、これらの上面から掘り込まれた柱穴が確認された。一時期の生活面(遺構構築面)の存在が考えられたが、天候不良や検出面が湧水レベルより低いこともあり、調査区の外周に排水用の溝を設けるなどの対策を講じたが、遺構面の維持がきわめて困難であった。このため土層断面の観察や部分的な確認にとどまり調査区全体にわたってこれらを確認することはできなかった。これらの層を段階的に掘り下げながら中世基盤層(海拔約4.3m)まで掘り下げこれを3面とした。

3面(中世基盤層)以下の堆積層は調査区南北で若干異なり、北側では茶褐色砂質土(21)及び褐色粘土(22)が堆積し、その下層には同層に砂・粘土・有機質腐植土等をブロック状もしくは薄く挟むような堆積層(22~24)がみられ、岩盤直上では破砕した貝殻粒を多く混入している。調査区南側では粘土層が薄く砂を多く混入する層(26)がすぐに確認され、岩盤上に青灰色砂の堆積が厚くみられた。岩盤上のレベルは海拔3.1m程である。

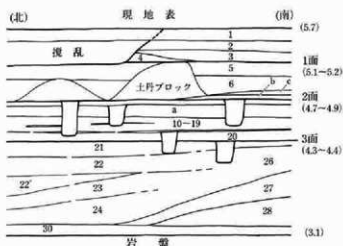


図4 土層模式図

第三章 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構面は大別して3面であるが、1面は大きく擾乱を受けており遺構密度はきわめて低い。2面から3面にかけては大きな時間差は感じられないものの、何時期かにわたって繰り返し遺構の構築がなされている。検出された遺構は柱穴、方形竪穴建物、木組遺構、土壌などであるが、その大半は柱穴が占めている。柱穴は掘立柱建物として復元可能なものもあるが規則性のつかめないものも多い。掘立柱建物は調査時に検討した柱穴の規則性や確認レベル・覆土の違い、柱穴内の礎板の接合状況などを検討して建物を復元している。調査時には遺構番号を検出順に付していたが報告書では煩雑さをさけるため報告順に番号を付け直している。

第1節 1面の遺構と遺物

擾乱

1面は近・現代の擾乱が多く、検出された遺構は、礎石2基、柱穴55穴、土壌6基と多くはない。擾乱は、前消防庁舎に関連すると思われるコンクリート基礎の掘り方及び解体時の擾乱(1a)、1aの北側に接して柱根を伴う柱穴(1b)、柱穴(1b)の北側3m程にある布掘り状の掘り方の柱穴(2)、関東大震災の後片づけのものと考えられるゴミ穴(3~7)などである。このうち3~7は1面を壊し2面直上まで達しているものもあり、さらに1と2は部分的に中世基盤層に達している。1bでは現地表から70cm程のところで横材を釘で打ちつけた60×50cm程の礎板が確認され、さらに現地表から1.8m程掘り込まれており底部に30×20cm角、長さは調査区外へ続くため確認できなかったが1.3mを超える大きな角材が水平に平行して2本据えられていた。2では布掘り状の西端に柱根(荒掘り中に破損、紛失したため規模は不明であるが、底部の圧痕から丸柱と思われる)、東端に70×40cm程の礎板、布掘りの中央あたりから鎌倉石の切り石が確認された。2つの柱穴状の擾乱とも覆土からガラス片などを含む遺物が若干出土した。両柱穴とも塀や一般的な建物より規模の大きな何らかの構築物の基礎と考えられる。当初は甘縄神明社の現参道脇に位置する事から島屋など神社に係る可能性も考えられたが、この付近を写したと思われる古写真(註1)には島屋は写っておらず道路脇に梯子状の火の見やぐら風の構築物が写っている。今回検出された柱穴及び木製の基礎はおそらく写真に写っている火の見やぐら風の構築物の基礎ではないだろう。

註1 『かまくら』 大森金五郎著 村田書店発行 大正14年7月25日発行 昭和51年6月20日再版発行
撮影場所が4はっきりしないが29頁掲載の『御興盛』の写真に「甘縄神明」の石碑とその奥に梯子状の火の見やぐら風の構築物が写っている。現在甘縄神社参道と国道の角付近には石碑は無く木製の標注が建てられているが、右側の参道がほぼ平らに続いていて石段などが写っていないこと、背後の山並みが左端で途切れていることなどからおそらく本調査地点に当たる参道の入り口付近を写したものであろうと思われる。

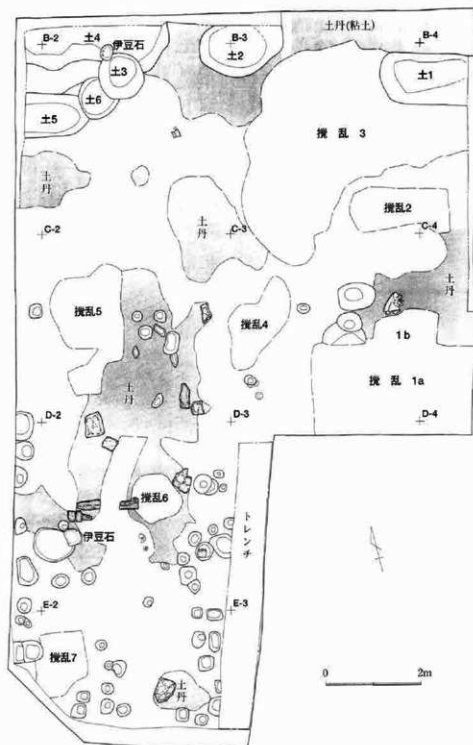


図5 1面遺構全測図

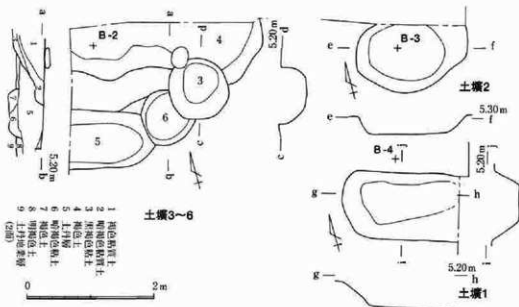


図6 1面土壌

礎石 (P.L. 4-A)

礎石はいずれも安山岩 (伊豆石) で B-2 グリット及び D-2 グリットで一石ずつ検出された。B-2 グリットの礎石は土壌 3 及び 4 を埋めた上に据えられている。長径 35cm、短径 25cm の楕円形を呈し、厚さは 10cm 程である。礎石上面の海拔は約 5.35m でほぼ水平に据えられている。D-2 グリットの礎石は一辺 40cm 程の三角形に近い方形を呈し、厚さは 30cm 程である。やはり上面はほぼ水平に据えられ、上面の海拔は約 5.3m である。両礎石は芯々で 10.3m 離れている。これ以外には礎石や礎石の抜き取り痕などは確認されなかった。検出された 2 つの礎石だけで建物を考えるのは不可能であるが、2 石とも面上に水平に据えられ本来の位置を動いていないと思われ、礎石を用いた建物もしくは構築物があった可能性は高いと考えられる。

土 壌 (図 6)

土壌は 6 基検出された。いずれも調査区北側で検出され、土壌 1 と 2 は単独で、土壌 3・4・5・6 は調査区北西隅で切り合って検出された。

土壌 1

B-4 グリットで検出された。上部は擾乱 3 によって削平されており深さ 40cm 程が確認された。南北 1m、東西 2m 程が検出されたが東端は調査区外へ続いている。覆土上層は小土丹を多く含む暗褐色土であるが湧水が多いこともあって締まりが弱い。下層は薄い軟弱な粘土層と有機質腐植土の堆積が認められた。出土した遺物は少なく図示できる遺物はない。

覆乱3によって広く削平され範囲ははっきりしないが土壌1から土壌2にかへは土丹地業層上面に数センチ程の厚さで纏まりが良く混入物をほとんど含まない粘土が貼られている。この範囲はさらに調査区外の北及び東へ続いていると思われる。

土壌2

B-3グリットで検出された土壌である。北辺の一部が調査区外へ続くが南北1m、東西1.8m程の楕円形を呈し、深さは30cm程である。図示できた遺物は図7-26のかわらけ1点だけである。

土壌3

調査区北西隅で4つの土壌が切りあって検出されたうちの1穴である。直径1m程の円形の土壌で深さは45cm程である。覆土は暗茶褐色でやや粘性の強い土ではほぼ一気に埋められている。土壌4より新しく、礎石より古い。遺物はほとんど出土していない。

土壌4

土壌3の北側に切りあって検出された南北1m以上、東西3m以上の土壌で北及び西側は調査区外に広がっている。深さは50cm程で、南側は1面を構成する拳大の土丹層を掘り込んで緩やかな斜面を呈している。覆土は1面構成土である暗茶褐色粘質土に似た褐色粘質土で一気に埋められており、底部付近に薄く黒褐色粘土の堆積が認められた。図示できた遺物は図7-27のかわらけ1点だけである。

土壌5

土壌4の南に検出された土壌で西側は調査区外へ続いている。南北1m、東西1.3m以上の細長い楕円形を呈している。深さは30cm程で土壌4より古い。

土壌6

土壌3と土壌5に挟まれるように検出された土壌である。土層観察では1面構成土に完全に覆われており2面直上に堆積する明褐色土層上面から掘り込まれている。1面造成途中に掘り込まれたものと思われる。土壌5を検出した際に切り合い部分の壁の確認が不十分で一緒に掘り上げてしまったためプランが判然としなくなってしまった遺構である。

柱 穴

1面で検出された柱穴は55穴であるが、その多くは2区（調査区南側）に集中し、調査区北半ではほとんど検出されなかった。また検出された柱穴のうちE-3付近の方形の掘り方を呈する柱穴群は覆土の様子から近世もしくは近代の可能性が高いと思われる。

1 面出土の遺物 (図7・8・表1)

図示した遺物のうち、かわらけ(図7-8-12)は1区南(D-3グリット付近)から、常滑の
 甕口縁(図8-1)はB-2グリット、常滑の甕胴部(図8-3)はC-4グリットからそれぞれ
 1面直上に貼り付くように出土した。図7-1~5は瀬戸。いずれも鉢であるが1~4は小片のため
 口径等は不明。5は口縁部を欠失するが1/3程を遺存する個体である。底部に3条の同心円の
 沈線がみられる。6は羽釜。小片のため口径等は不明。胎土は砂を多く混入する。7は土製の駒
 であろう。8~27は甕罐成形のかわらけ。小型(8~21・26)は口径が7~8cm、器高は2cm強のや
 や深めのものと1.5cm程の浅めのものがみられる。大型(10~25)は口径13~14cm程で側面観はや
 や丸味がある。26は土壇2出土。27は口径12cmの中型に属する製品である。土壇4出土。

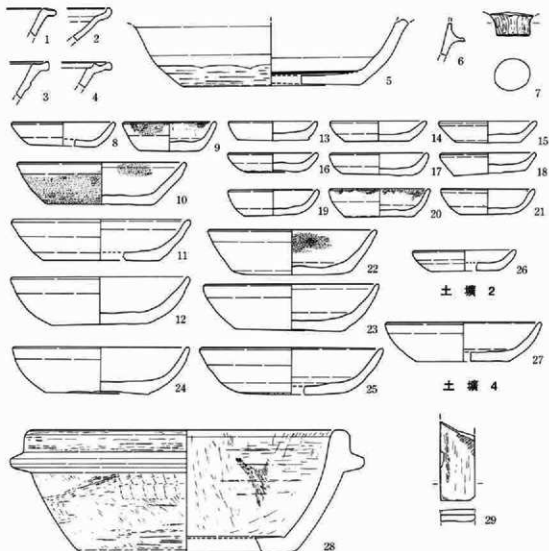


図7 1面出土の遺物(1)

28は滑石鍋。1/2程を遺存する個体である。器表はさすがに多量に付着し磨滅しているため整形痕は不明瞭である。29は砥石。

図8-1~3は常滑の甕。1・2は口縁部片で縁部が5cm程と幅広く、2は縁部が頸部に密着している。いずれも口径等は不明。3は小形の甕の胴部下半の破片で1/5程遺存している破片である。復元率は低いが底径は17cm、胴部径は51cm程である。

4は摺り鉢。8本の条線が認められる。5は手埴り。小さな菊花のスタンプが捺され、珠文が貼り付けられている。いずれも小片のため口径等は不明。

図7	口径	底径	器高	図7	口径	底径	器高	図7	口径	底径	器高
8	8.0	5.2	1.9	15	7.5	5.1	1.7	22	13.1	7.6	3.6
9	7.1	4.8	2.4	16	6.9	4.0	1.5	23	13.6	8.4	3.6
10	13.1	8.3	3.3	17	7.5	5.4	1.7	24	13.7	8.2	3.7
11	13.7	9.2	3.3	18	7.3	5.6	1.6	25	14.1	8.4	3.8
12	13.8	7.4	3.7	19	6.8	4.1	2.1	26	7.9	5.3	1.6
13	6.8	5.5	1.5	20	7.7	5.3	2.2	27	12.0	7.2	3.1
14	7.3	5.0	1.6	21	7.1	4.1	2.0				

表1 1面かわりけ計測表

(単位 cm)

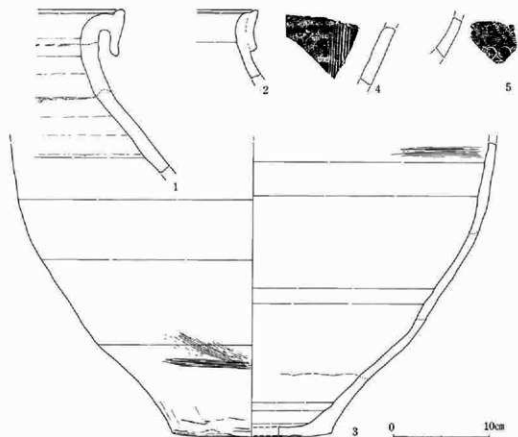


図8 1面出土の遺物(2)

第2節 2面の遺構と遺物

30～40cm程の1面構成土を取り除くと炭化物を多く含む暗褐色土～褐色土の間層が薄く堆積し、この下から土丹（硬砕泥岩）を用いた厚さ10～20cm程のきわめて堅固な地業面が検出された。1区中央付近は1面構成土である土丹層が2面直上まで達しており、北西隅にかけては2面の土丹地業層は薄くなるが、ほぼ調査区全域にわたって確認され、さらに調査区外へ広く広がっているようである。土丹地業層は下層に人頭～拳大の土丹を大まかに敷きならし、その上に指頭大の土丹を築き固めきわめて堅固な地業面を形成している。さらに部分的にはこの上に拳大の土丹を積み増しているところもある。地業層は何層かに細分できる場所もあったが間層をほとんど挟まず、細分した1層ごとに面的な広がりを確認することは難しく、部分的な確認や土層断面の観察にとどまざるを得なかった。この土丹地業層上面で確認された遺構を2面の遺構としている。2面で検出された遺構は、

柱穴128穴、土竈12基である。

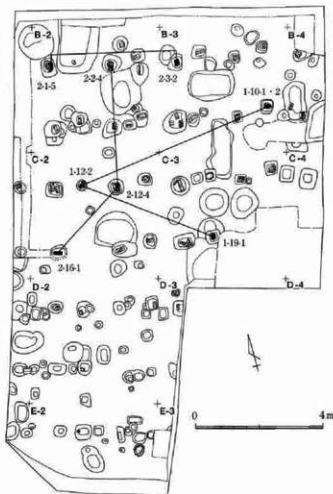


図9 2面礎板接合図

柱 穴

検出された柱穴128穴のうち礎板もしくは礎石が検出されたものは44穴、柱根を遺存するものは2穴である。なかには1つの柱穴内に6枚の礎板が重ねられているものもある。

2面の柱穴の検出状況は、土丹地業層上面ではほぼ掘り方のプランが確認できる柱穴と、地業層上面では立ち腐れたような柱痕程度の小さなプランしか確認できず、土丹地業層を半截して初めて掘り方のプランが確認できる柱穴とがある。このことは土丹による地業、あるいは積み増しが柱を埋め込むようになされているものと考えられる。このような柱穴は柱痕状のプランが確認された段階で細いトレンチを設定し掘り方のプランを確認し、土丹による地業を掘りぬいて掘り方を掘り上げている。全測図は柱穴を完掘した状況である。

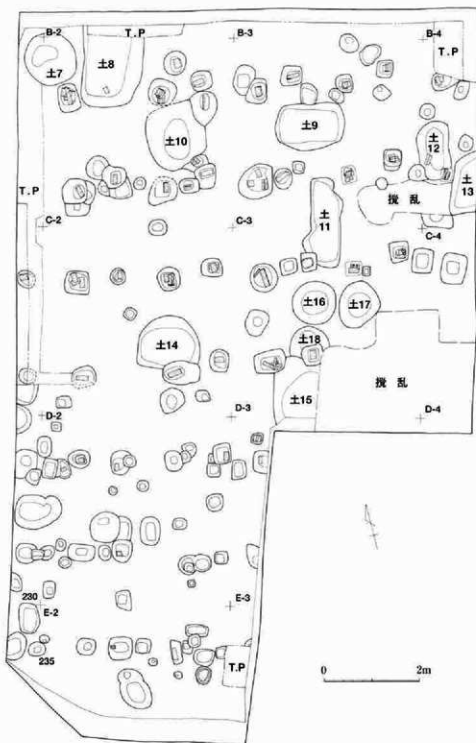


図10 2面遺構全測図

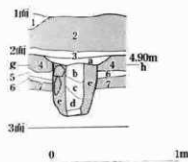
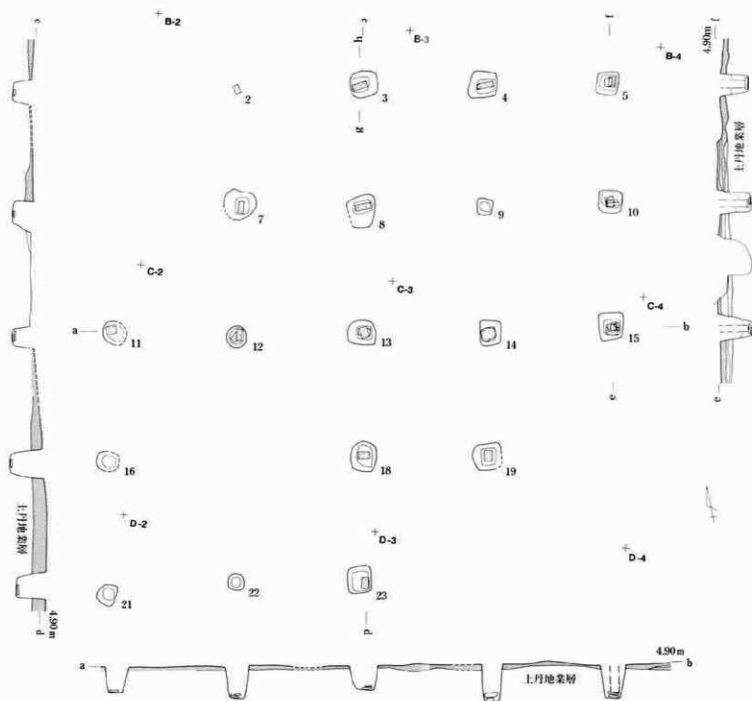
建 物

2面で検出された柱穴のうち4割程にあたる48穴について規則性を認め、大小4棟の建物を復元したが、調査範囲が狭く建物の規模等については限界が確認できるものが少なく不明な点が多い。順に各建物について述べていくが、記述の煩雑さをさけるため復元した建物の番号は3面まで通し番号とし、各建物ごとに柱穴番号を付している。柱穴番号は各建物を総柱建物として規模を想定し、北西隅の柱穴から東へ順に1から通し番号を付し、「建物（番号）－柱穴（番号）」と表記する。また礎板が遺存する柱穴には礎板についても上から順に礎板番号を付し「建物（番号）－柱穴（番号）－礎板（番号）」と表記することにする。建物の復元に際しては調査時に確認した規則性や切り合い

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	不明					調査区外
2	不詳	4.34	1	10.8×10.0× 4.0	4.45	土壇 8 と重複
3	45×42	4.52	1	27.0×10.5× 4.5	4.57	
4	43×42	4.42	1	26.5× 7.5× 4.7	4.48	
5	35×38	4.36	1	17.0×10.0× 6.0	4.44	柱痕 10×11
6	不明					調査区外
7	51×45	4.29	1	19.0× 7.0× 2.0	4.31	
8	43×50	4.50	1	25.0× 9.3× 4.5	4.54	
9	25×25		ナシ			
10	38×38	4.33	1	20.0× 5.8× 2.5	4.42	柱痕 11×11
			2	20.0× 6.8× 3.0	4.41	
			3	15.0×11.0× 4.5	4.48	
11	不詳	4.25	1	17.5×12.0× 2.7	4.52	
12	32×35	4.42	1	16.5× 9.0× 2.7	4.45	
			2	18.5×12.3× 2.8	4.42	
13	45×39	4.49	1	18.0×12.0× 2.5	4.55	
			2	17.5×12.5× 3.0	4.53	
14	33×39	4.26	1		4.43	土丹
			2	15.5× 8.2× 8.7	4.36	
15	38×43	4.34	1	17.5×12.5× 3.0	4.42	直上に常滑焼小片 柱痕 9×9
			2	20.8×11.5× 2.7	4.41	
16	不詳		ナシ			
17	未検出					
18	42×48	4.20	1	18.0×12.5× 3.0	4.47	
19	45×43	4.32	1	17.0×12.5× 2.6	4.38	
20	不明					攪乱 1 と重複
21	27×33	4.65	ナシ			
22	26×27	4.34	ナシ			
23	37×43	4.50	1	18.0×11.0× 3.0	4.56	
24	不明					調査区外
25	不明					調査区外

表2 建物1 柱穴観察表

(単位：cm レベル：m)



- 1 暗茶褐色粘土
- 2 小土丹地素層
- 3 暗褐色土
- 4 暗灰褐色粘土 (小土丹多く含む)
- 5 暗褐色土
- 6 炭化物層
- 7 小土丹地素層
- a 灰褐色粘土
- b 茶灰褐色粘土 (小土丹含む)
- c 茶灰褐色粘土 (緩りなし)
- d 灰褐色土
- e 小土丹層

柱穴3土層断面図



図11 建物1

の他、検出した礎板を全て採り上げ接合関係を確認した。2面の礎板の接合関係は図9に示した。

建物1 (図11・表2)

確認規模	東西4間×南北4間	礎板接合状況
柱間間隔	東西2m 南北1.95m	10-2←割れ→10-1←切断→12-2←切断→
南北軸方位	N-10.5°-E	19-1

建物1は調査区北半(B-2〜D-3グリッド)で検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから4穴、4穴、5穴、3穴、3穴の19穴が確認された。建物の南限は調査区内で確認されたが東辺、西辺及び北辺はさらに調査区外へ続いている可能性があり建物の規模は明らかではない。少なくとも東西4間、南北4間の建物と考えられる。建物1に伴う柱穴は、土地表層上面でほぼ掘り方のプランが確認された。隅丸方形もしくは円形を呈し、深さは概ね50cm程であるが、浅いもので30cm、深いもので60cm程の柱穴もある。19穴のうち15穴に礎板が検出され、柱穴14には厚さ9cm程の礎板上に高さあわせのため一辺21cm、厚さ6cm程の土丹(破砕泥岩)が掘り方いっばいに据えられていた。柱穴2は土壌8の覆土中に掘り込まれ掘り方のプランは判然としなかったが、礎板が遺存しており部分的な土層断面の観察で柱穴の存在を確認した。また柱穴17の位置には柱穴が確認されず、柱穴11・13・21・23で囲まれた2間四方の空間が考えられる。柱根を遺存する柱穴はないが柱穴3、5、10、15では覆土の違いから柱の太さが推測できた。これによれば概ね10cm前後のほぼ方形に近い柱が使われていたと考えられる。柱間間隔は柱痕の認められた南北方向の柱穴5〜10間で1.9m、10〜15間で2.0mと若干のバラツキがみられるが、平均柱間間隔は東西2m、南北1.95m程である。同一柱穴内で礎板10-1と10-2が割れ口の形状が一致し、さらにこれと12-2及び19-1の切断面の形状が一致し、同一材を切断して礎板として用いている。

建物2 (図12・表3)

確認規模	東西4間×南北3間	礎板接合状況
柱間間隔	東西2m、南北2m	1-5←切断→3-2
南北軸方位	N-11°-E	2-4←切断→12-4←同一→16-1

建物2は建物1とはほぼ重複し東西方向に半間程ずれて検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから5穴、5穴、5穴、3穴の18穴が確認された。建物1と同じく南辺は調査区内で限界が確認されたが、他の3辺は調査区外へ続いている可能性がある。確認規模は東西4間、南北3間で建物1に比べ南北柱間が1間少ないが建物全体が1間分北にずれているとも考えられ、建物1と同規模の建物と考えたい。平均柱間間隔は東西南北とも2m程であるが南北柱通りの東から2列目と3列目の間が1.9mと狭まっている。建物2に伴う柱穴は1区西半では土地表層が薄く掘り方が確認できたものもあるが、1区東半の土地表層が厚いところでは建物1と異なり掘り方は土地表層上面では全く確認できず柱痕状の小さなプランが確認されたにすぎない。土層断面の観察では掘り方

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	43×60	4.31	1	38.0×7.5×4.0	4.52	一部炭化
			2	18.5×9.6×3.0	4.48	
			3	13.3×12.3×4.0	4.47	
			4	17.5×12.0×3.3	4.44	
			5	21.0×13.8×3.8	4.38	
			6	23.0×9.0×2.6	4.35	
2	60×(60)	4.37	1	18.5×8.8×4.3	4.54	
			2	16.5×10.0×6.5	4.52	
			3	19.5×10.2×4.8	4.45	
			4	31.0×10.5×4.5	4.41	
3	(43)×53	4.42	1	22.5×13.0×4.5	4.45	
			2	20.5×13.7×4.7	4.39	
4	38×38	4.41	1	16.5×10.5×3.0	4.42	柱痕 10.5×11
5	(58×40)	4.31	1	18.0×8.0×1.7	4.38	
			2	18.0×10.5×2.5	4.38	
6	52×52	4.24	1	22.0×9.0×3.0	4.26	
7	60×(53)	4.37	1	21.0×10.3×6.5	4.45	
8	72×73	4.32	1	22.0×11.5×2.3	4.43	複数の柱穴の切り合いか
			2	13.0×9.0×4.0	4.41	
			3	13.5×11.7×2.6	4.35	
9	(42×35) 不詳	4.35	1	18.0×12.0×4.0	4.49	柱痕 10×10
			2	20.0×7.0×3.0	4.48	
			3	19.5×10.5×8.5	4.45	
10	(42×41) 不詳	4.30	1	19.5×10.0×2.0	4.44	
			2	7.7×8.4×7.2	4.46	
			3	14.5×5.5×3.0	4.40	
11	52×49	4.31	1	23.0×11.5×3.2	4.40	
			2	21.0×12.0×4.0	4.37	
			3	21.5×10.0×2.0	4.33	
12	47×50	4.32	1	17.0×10.7×2.2	4.47	
			2	24.5×11.0×3.0	4.47	
			3	24.5×11.0×3.5	4.43	
			4	27.0×10.5×4.5	4.42	
13	57×60	4.27	1	37.0×12.0×3.0	4.41	柱痕 一辺10
14	(44×43) 不詳	4.43	1	18.0×9.0×2.9	4.58	柱痕 10×11
			2	13.0×6.8×1.8	4.53	
			3	18.0×10.5×2.5	4.51	
15	52×56	4.31	ナシ			
16	51×(43)	4.37	1	25.5×10.5×3.5	4.41	
17	(60)×50	4.39	1	19.0×9.5×1.8	4.50	
18	68×48	4.36	1	20.0×5.0×3.0	4.59	腐食著しい
			2	19.0×8.5×4.0	4.46	
			3	21.5×7.2×3.5	4.43	
			4	15.8×10.5×2.5	4.40	
19	不明					調査区外
20	不明					調査区外

表3 建物2柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

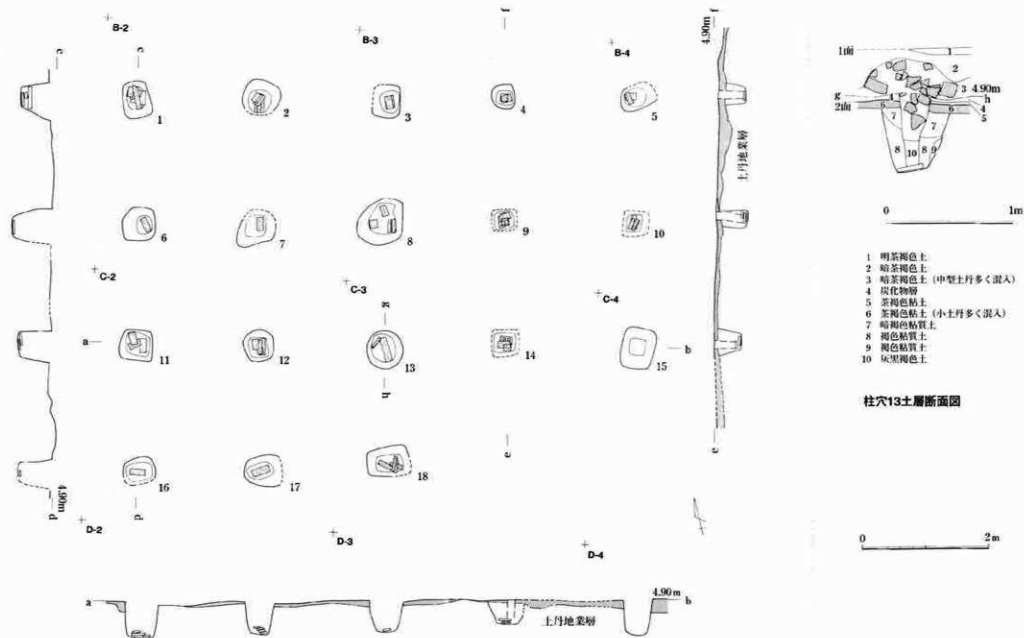


図12 建物2

を土丹地業層が完全に覆っており柱だけが土丹地業層上面へ突き出している様子が確認されたものもある。柱穴の掘り方は隅丸方形を呈するものが多く深さは60cm程である。18穴のうち17穴の柱穴に礎板が検出され、複数の礎板が据えられているものが多く最も多い柱穴で6枚の礎板が重ねられているものもあった。礎板の大きさは建物1に比べ一回り大きな材が用いられている。礎板1-5と3-2及び、2-4と12-4が切断面の形状が一致しそれぞれ同一の材を切断して用いている。

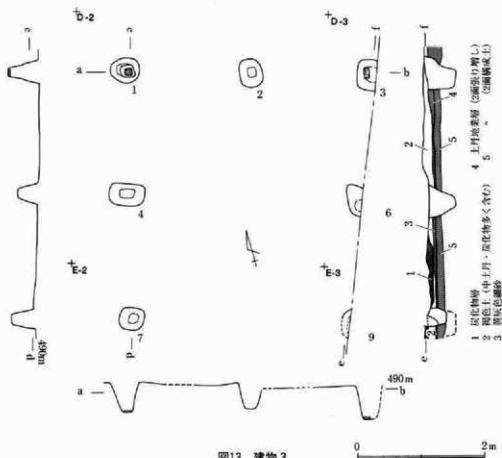


図13 建物3

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	45×40	4.57	1	10.0×13.0×2.0	4.60	
2	35×45	4.64	ナシ			
3	(30)×48	4.60	1	15.8×8.0×2.0	4.64	
4	56×36	4.65	ナシ			
5	未検出					
6	不詳	4.58	ナシ			
7	40×35	4.64	ナシ			
8	未検出					
9	不詳	4.70				

表4 建物3柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

また16-1は2-4、12-4と似た材で同一材の可能性が高い。柱穴4、9、13、14、では覆土の違いから柱の太さが想像でき建物1と同じく10cm前後のはば方形の柱が使われていたと考えられる。

建物3 (図13・表4)

確認規模 東西2間×南北2間

柱間間隔 東西2m、南北1.9m

南北軸方位 N-13.5°-E

建物3は2区(D-2~E-3グリット)で検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから3穴、2穴、2穴の7穴が確認された。南北中央列の柱穴5及び8の位置の柱穴が確認されず、また柱穴9は調査区東壁際に僅かにプランが確認されたにすぎず建物とするには疑問が残る。2区は調査区が狭く最大でも東西2間程度しか確認できないため検出された柱穴の規則性等は確認しにくい、5穴以上の柱穴について規則性の考えられるものを建物としている。確認された7穴のうち2穴に礎板が検出されたが遺存状況は悪く繊維質がからうじて確認できる状態であった。土層断面の観察では2面の土丹地葉層上に堆積する炭化物を多く含む褐色土層上面から掘り込まれており2面でも新しい時期に相当するものと思われる。平均柱間間隔は南北2m、東西1.9m程である。

建物4 (図14・表5)

確認規模 東西1間×南北2間

柱間間隔 東西2m、南北1.9m

南北軸方位 N-14.5°-E

建物4は2区(D-2~E-2グリット)で検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから2穴、2穴、2穴の6穴が確認された。北側及び東側には対応する柱穴は確認されず東側及び南側に広がっている可能性がある。6穴のうち2穴に柱根が遺存し、1穴に礎板が確認された。平均柱間間隔は南北1.9m、東西2m程である。遺存する柱根の太さは柱穴4が10×10cm角、柱穴6が10×7cm角で、礎板の大きさ、柱の太さとも建物1、2と比べひとまわり小さい。

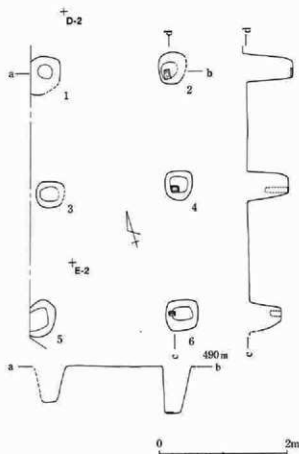


図14 建物4

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	(45)×60	4.44	ナシ			
2	45×50	—	1	15.0×10.0× 2.5	4.20	
3	45×45	4.65	ナシ			
4	43×48	4.34				柱遺存
5	(40)×60	4.64	ナシ			
6	50×48	4.47				柱遺存

表5 建物4 柱穴観察表 (単位: cm レベル: m)

柱穴出土の遺物 (図17-1～16・表6)

2面から3面にかけては多くの柱穴が重複して確認されたが、2面で検出した柱穴が下層の柱穴の覆土に掘り込まれているものもあり、壁の認識の甘さから下層の柱穴の遺物が混入してしまった可能性があるものもある。柱穴から出土した遺物は小片が多く図示できるものは少ない。

図17-1は青磁。蓮弁文碗の口縁部。小片のため口径等は不明。幅の広い蓮弁を有するタイプで釉は緑灰色を呈し、やや厚く施されている。2区柱穴235出土。2は白磁。口元皿の底部。釉は青白濁色を呈し、体部外面下半は露胎である。復元底径は6.3cm。2区柱穴230出土。

3～14はかわらけ。いずれも轆轤成形の製品である。小型は3が口径6.6cmとやや小ぶりであり、4～10は口径7～7.6cm、中型は11cm弱、大型は13cm弱である。9は器高が2.2cmとやや高く口唇部に油煙が付着している。図示したかわらけのうち6・7は建物2の柱穴3、10は建物2の柱穴13、14は建物2の柱穴7から出土している。

15は常滑。鉢の口縁部。小片のため口径等は不明。建物1の柱穴19出土。16は山茶碗窯系押鉢。底部の1/4程を遺存する個体。復元高台径は11cm。建物2の柱穴 出土。

土 壌

2面で検出した柱穴(掘立柱建物)以外の遺構は土壌が12基である。いずれの土壌も1区で検出されたが土壌の性格を示すような遺物や遺構は認められず性格は不明であるといわざるを得ない。また出土した遺物も土壌8からは小片を含めるとある程度まとまった量が出土したが他の土壌は小片を含めてもその量はわずかである。

土壌7 (図15)

調査区の北西隅(B-2グリッド)で検出された直径1.1m、深さ45cm程の円形の土壌である。湧水が激しく底部の形状が不明瞭で若干掘り過ぎたかもしれないが、壁の立ち上がりやや緩やかな斜面を呈した、いわゆる掘鉢状を呈している。この付近は2面を構成する土丹地菜層が薄く、掘り込み面は判然としなかったが2面に伴う土壌と考えられる。かわらけの小片など若干の遺物が出土したが図示できるものはない。

土壌 8 (図15・16・表6)

土壌7のすぐ東側で検出された東西1.3m、南北1.7m以上の方形を呈した土壌であるが、土壌の北辺は調査区外へ続いたため全容は不明である。土壌の東側では2面を構成する準大の土丹層上面から掘り込まれているのが確認された。深さは70cm程で底部は箱形を呈している。覆土上層は準大の

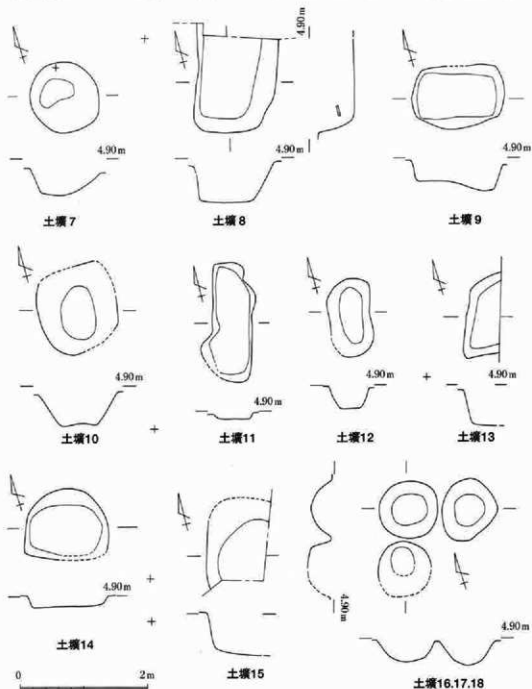


図15 2面土壌

土丹を含む軟弱な褐色粘土が堆積し、覆土下層は木製品を含む有機質腐植土の堆積が認められた。

図16-1～8はかわらけ。いずれも轆轤成形の製品で、小型（1・2）は口径7.4～7.5cm、中型（3・4）は10.7～11.8cm、大型（5～8）は12.3～13.0cm程で肉厚はやや厚く側面視は丸味があるものが多い。5・6には油煙の付着が認められる。

9は常滑の甕。口縁部の破片。緑帯部は4cmと幅が広い。10～13は常滑の鉢。10と11は同一個体と思われ、直接的な接合関係は認められないが口縁部、片口部及び底部の破片が3片出土している。復元口径35.7cm、底径13cm、器高は14.5cm程であろう。内面は良く磨減し、紅と思われる赤色物質が多量に付着している。12と13も同一個体の可能性が高い。復元底径16cm程であろう。

14～17は木製品。14・15は円板。14は直径21cm程のほぼ正円に加工され、外周部に直径1cm程の穿孔が7ヶ所施されている。穿孔はほぼ正三角形の頂点の位置に2個ずつ対をなすように配され、1個は1つの頂点の対角の位置に単独で穿孔されている。15は1/2程を欠失するが直径14.5cm程である。16は箱状の組み物の部材である。長辺18cm、短辺5cm程で長辺の1辺は山形に削り込まれ、この1辺を除く3辺に外周部に木釘痕が8ヶ所（木釘を遺存するものは各辺に1ヶ所）、長辺側面に3ヶ所認められる。17は刀子もしくはこれに類する製品の柄である。一木で作られ目釘穴が穿孔されている。

土壇9（図15・17・表6）

B-3グリット中央付近で検出された東西1.5m、南北1m程の方形を呈した土壇で底部はほぼ平坦である。深さは40cm程である。覆土は20～30cmの人頭大の土丹を多量に含む暗褐色粘質土で一氣に埋められており、長い時間開口していなかったようである。

図示できた遺物は図17-19～23のかわらけが5点だけである。いずれも轆轤成形の製品で、小型（19～21）は口径7.2cm～7.7cm、大型（22・23）は口径12.7cm。19・22・23は底部から直線的に立ち上がり、20は体部下半底部近くに強いくびれがみられる。

土壇10（図15・17・表6）

土壇8の西、B-2グリットで検出された東西1.3m、南北1.5m程の不整形を呈した土壇で、深さは50cm程である。建物2の柱穴2と切り合っており建物2より古いと思われる。

図示できた遺物は図17-28・29・30のかわらけ2点と常滑だけである。かわらけは轆轤成形の製品で、28は口径7.5cm、口唇部に油煙の付着が認められる。29は口径11.8cm。

30は常滑。甕の口縁部小片。緑帯部は4.8cmと幅が広い。

土壇11（図15）

B-3～C-3グリットにかけて検出されたごく浅い掘り込みの南北に細長い土壇である。東西60cm、南北2m程で深さは10cm程である。2面を構成する土丹地層の最上層にあたる小土丹層が

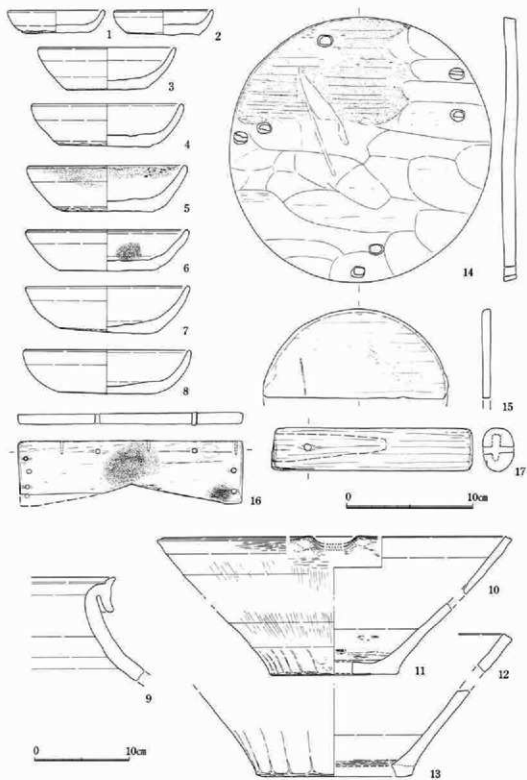


図16 2面土壇8出土の遺物

失われて、底面に下層の拳大の土丹が露出している様な状況であった。土壇というよりは建物1の柱穴9～14の柱通りに沿って掘られており、何らかの施設に伴う掘え方などの可能性が考えられるかもしれない。遺物は1点も出土しなかった。

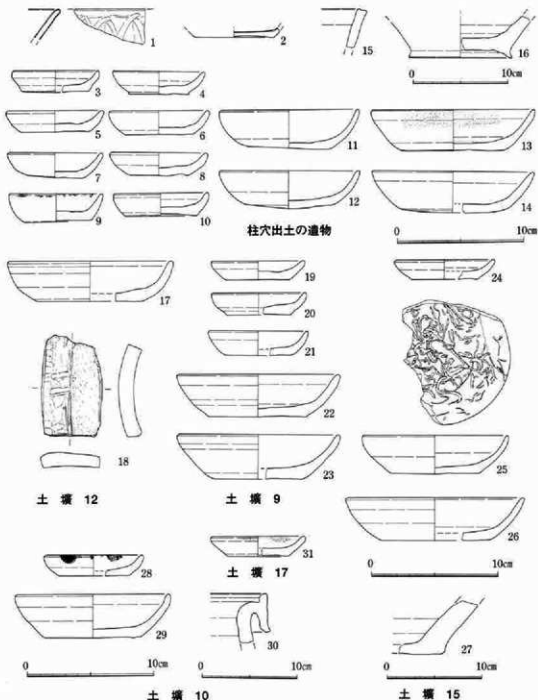


図17 2面柱穴・土壇出土の遺物

土壌12 (図15・17・表6)

B-4グリットで検出された東西65cm、南北1.2m、の楕円形を呈した土壌で、深さは35cm程である。

図示できた遺物は2点である。図17-17は轆轤成形のかわけ。復元実測であるが大型に属するものの口径は12.8cmとやや小さく、底径8.3cm、器高3.3cm。肉厚で側面観は丸味が強い。

18は滑石鍋の再加工作品。鍋の口縁部を長辺8cm、短辺5cm程の略方形に切り取り、鋳を削り落としている。穿孔は認められないが温石であろう。

土壌13 (図15)

B-4グリット南側で調査区の壁際に検出された土壌である。土壌の東側は調査区外へ続くため全容は不明であるが、東西50cm以上、南北1.3m程のほぼ方形に近い土壌である。深さは50cm程が確認された。覆土下層は砂を多量に含む褐色粘質土で湧水が激しく調査区壁際であったため底部の確認は十分に行えずもう少し深い遺構かもしれない。

土壌14 (図15)

C-2グリット南東側で検出された土壌で東西1.3m、南北1.5m程の不整形を呈し、深さは20cm程である。

土壌15 (図15・17・表6)

C-3グリットの南側で検出された土壌である。東側は攪乱1によって大部分が削平されているが攪乱の底部でわずかに土壌の底部付近のプランが認められた。また土壌の南側はさらに調査区外へ続いている。覆土は1面構成土に似た締まりの良い茶褐色土で一気に埋められており土丹を多く混入している。

遺物はほとんど混入しておらず図示した遺物は5点にすぎない。図17-24～26は轆轤成形のかわけ。24は口径7.7cm。25は口径11.3cmの中型に属する製品で、文様の輪郭は不明瞭であるが内面全体にヘラ用の工具で唐草風の文様を描いている。26は口径13.9cm。いずれも側面観は丸味がある。

27は常滑。甕の底部小片。小片のため底径等は不明。

土壌16・17・18 (図15・17・表6)

C-3グリット中央付近で検出された。直径90cm、深さ40cm程の円形の土壌で3基がL字状に並んでいる。南に位置する土壌18は建物1の柱穴19及び土壌15と切り合っていて柱穴19より古い。土壌15との新旧は不明である。覆土はいずれも灰褐色砂質土で締まりがなく混入物も少ない。壁の立ち上がりは緩やかでいわゆる描鉢状を呈している。建物1、2に関連した据え臺の据え方の可能性も考えられる。

出土した遺物は少なく図示した遺物は土壌17から出土したかわらけの1点だけである。図17-31はかわらけ。轆轤成形の製品で口径7.1cm。底部から直線的に立ち上がり、口縁部にわずかに油煙の付着が認められる。

2 面出土の遺物 (図18~20)

図18-1・2は青磁。1は蓮弁文の碗である。幅の広い蓮弁を有するタイプであるが小片のため口径等は不明。釉は淡い緑灰色。2は縁折れの鉢。釉は青緑色を呈し、内外面とも厚く施されている。内面に不明瞭であるが劃花文が認められる。復元口径は18.5cm程である。3は白磁。口元皿。底部の半分程を遺存する破片。釉は濁白色を呈し、底部まで施されている。底径5.5cm。

4~10は瀬戸。4~6はおろし皿。4は二次焼成のためか釉がほとんど剝離してしまっている。体部から口縁部の1/4程を遺存する破片。復元口径は15.3cm。5・6は底部の小片で、5はおろし目が弱く釉がおろし目に流れ込みほとんど用をなしていないように思われる。7は灰釉碗。ごく小片のため口径等は不明。釉は緑灰色を呈している。8・9は入子。8は2/3程を遺存する破片。体部内面に灰釉が認められる。口径3.7cm、底径2.4cm、器高1.1cm。9は口縁から体部下半の破片。復元口径は7.7cm。10は縁折れの鉢。体部下半から底部にかけての破片で1/5程を遺存する破片。復元底径は15cm程である。全面にごく薄く灰釉が施されている。

11・12は白かわらけ。11は肉厚の手捏ね成形の製品で底部は丸味が強い。口径8.4cm、器高1.3cm。口唇部は焼成前にヘラ状の工具を用いて調整されている。12は轆轤成形の白かわらけの底部片。体部から強く外反気味に立ち上がっている。底径4.4cm。胎土は精良である。

13は黒縁皿。1/5を遺存する破片。復元口径10.1cm、復元底径5.6cm、器高2.5cmである。

14は東播系の鉢。体部上半から口縁にかけての破片で1/3程を遺存する破片。片口部を遺存する破片のため復元口径は不安が残るが15.2cmで鉢というより碗に近い小型の製品である。口縁は上方へ引き上げられ縁部は丸味が強い。

15~17は常滑。15・16は壺。15は壺の口縁部。小片からの復元であるが口径は10.7cm程である。16は壺の肩部から底部下半にかけての破片で1/4程を遺存する破片。器表は内外面とも二次焼成のためかなり荒れ淡赤灰色を呈している。肩部と胴部中程に3条の沈線が認められる。17は磨減痕のあるいわゆるスリ常滑。長辺7.5cm、短辺5cm程の二等辺三角形を呈し、短辺の割れ口の部分が著しく磨減している。ごく薄手の甕の胴部片を用いている。

18~23は石製品。18は硯。1/2程を遺存する破片であるが縁部や陸部は剝離している部分が多い。外形は長方形を呈し縁部内側は四葉状に削られている。黒色の粘板岩質である。19・20は砥石。19は断面正方形を呈し中央部分が著しく磨減し、割れ口以外の全ての面が使用されている。20は小片であるが断面長方形を呈し2面が使用され片面には細い条線が多く認められた。21・22は滑石鍋。小片のため口径等は不明。23は滑石のスタンプ。鍋の鐙を含む破片を用いてススキ様の植物を描いている。24・25はフィゴの羽口。25は直径7cm程である。

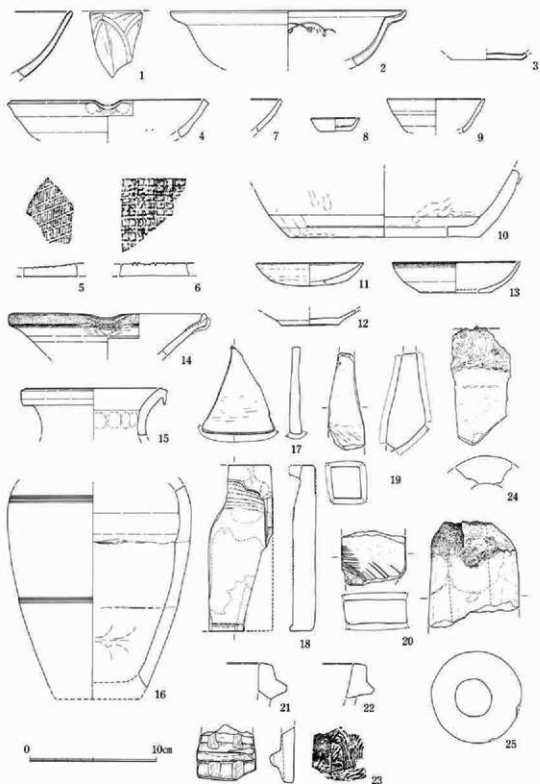


図18 2面出土の遺物(1)

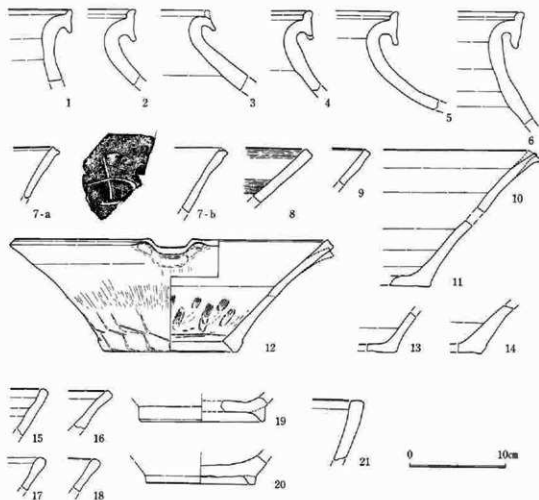


図19 2面出土の遺物(2)

図19-1～6は常滑の甕。口縁部の破片である。常滑の甕の破片の出土量は少なくないが器形を復元できる個体はなかった。また口縁部も口径を復元できる個体はなく断面図のみ示した。縁帯部は2.5～4cm程でやや幅広い。縁帯部が頸部に密着してしまう器形のはみられない。

7～14は常滑の鉢。いずれも口唇部は撫でにより平らもしくは沈線状を呈している。7aと7bは同一個体で、7bの内面にはヘラ描きがみられる。10と11は同一個体と思われるが直接接合しない。口縁部は片口を遺存する破片のため口径は復元していない。12は1/5程を遺存する破片で4片の破片が接合し、他に5片の同一個体の破片が出土している。多くの破片がB-2～C-2グリットにかけて出土している。復元口径32.7cm、復元底径14.0cm、器高12.0cm。内面下半には成形時の指頭痕が多く認められ、良く磨滅し赤色物質により赤く変色している。

15～20は山茶碗窯系捏鉢。小片が多く器形を復元できる個体はない。19は復元底径12.6cm、20は底径11.3cmである。

21は手埴り。小片のため口径等は不明。輪花形の手埴りである。

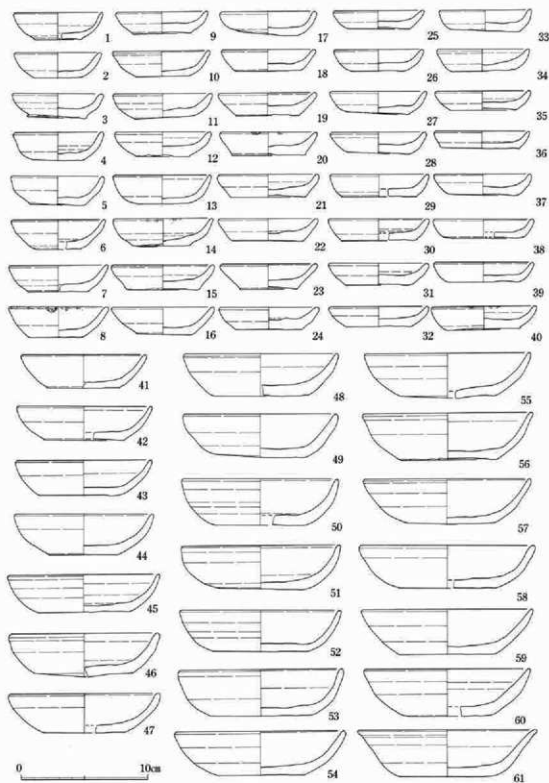


図20 2面出土の遺物 (3)

土壌・柱穴

番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高	番号	口径	底径	器高
図16 土壌8				22	12.7	7.7	3.4	図17 柱穴			
1	7.4	5.3	1.8	23	12.7	7.1	3.6	3	6.6	5.3	1.7
2	7.5	5.7	1.9	図17 土壌10				4	7.1	4.8	1.8
3	10.7	6.3	3.3	28	7.5	5.5	1.7	5	7.4	5.4	1.7
4	11.8	7.3	3.3	29	11.8	7.6	3.5	6	7.6	5.4	1.9
5	12.3	7.3	3.7	図17 土壌12				7	7.3	4.3	2.0
6	12.6	7.6	3.3	17	12.8	8.3	3.5	8	7.5	4.7	1.8
7	12.7	7.4	3.7	図17 土壌15				9	7.3	5.3	2.2
8	13.0	7.9	3.6	24	7.7	5.2	1.5	10	7.4	5.7	1.9
図17 土壌9				25	11.3	7.0	3.1	11	10.8	6.5	3.0
19	7.2	5.0	1.5	26	13.9	8.6	3.4	12	10.9	7.0	3.1
20	7.3	5.1	1.8	図17 土壌17				13	12.8	8.1	3.2
21	7.7	5.3	1.9	31	7.1	4.8	1.6	14	12.7	8.3	3.3

2 面

図20	口径	底径	器高	図20	口径	底径	器高	図20	口径	底径	器高
1	6.8	3.7	2.2	22	7.5	5.6	1.8	43	10.5	6.0	2.8
2	6.6	3.7	2.0	23	7.4	4.5	2.0	44	10.8	5.5	3.2
3	6.9	4.6	1.9	24	7.6	5.2	1.8	45	11.8	7.3	3.0
4	6.8	3.9	2.2	25	7.0	4.9	1.5	46	11.5	7.8	3.5
5	7.2	4.2	2.3	26	6.9	4.2	1.7	47	11.7	6.4	3.2
6	7.2	3.5	2.4	27	7.4	4.8	1.8	48	11.9	7.4	3.4
7	7.6	4.7	2.1	28	7.3	4.9	1.7	49	11.9	7.2	3.5
8	7.6	4.6	2.5	29	7.5	5.9	1.8	50	12.2	7.1	3.7
9	7.0	4.6	1.7	30	7.7	5.9	1.8	51	12.4	6.6	3.5
10	7.5	4.2	2.0	31	7.7	4.9	1.8	52	12.5	7.5	3.3
11	7.6	4.4	1.9	32	7.6	5.1	1.6	53	12.3	8.0	3.8
12	7.4	4.1	2.0	33	7.1	5.3	1.6	54	13.2	6.8	3.5
13	7.6	4.0	2.3	34	7.1	4.9	1.7	55	12.9	7.5	3.6
14	7.6	4.5	2.2	35	7.3	5.1	1.5	56	13.2	7.6	3.8
15	7.8	5.6	2.0	36	7.3	6.2	1.4	57	13.1	6.8	3.6
16	7.9	4.3	2.2	37	7.4	5.2	1.7	58	13.6	7.5	3.5
17	7.3	4.6	1.8	38	7.7	5.0	1.6	59	13.4	7.6	3.6
18	7.2	5.2	1.7	39	7.6	5.5	1.6	60	13.0	6.6	3.8
19	7.4	4.9	1.8	40	8.0	5.7	1.9	61	14.0	7.4	3.8
20	7.4	5.8	1.8	41	9.6	5.7	2.7				
21	7.6	5.9	1.8	42	10.4	6.3	2.8				

2 面土丹地葉層

図21	口径	底径	器高	図21	口径	底径	器高	図21	口径	底径	器高
6	7.4	5.8	1.5	11	7.6	4.5	1.5	16	12.0	7.4	3.4
7	7.1	5.1	1.7	12	7.6	6.1	1.8	17	12.1	7.1	3.4
8	7.1	4.8	1.5	13	7.3	5.5	1.6	18	12.6	8.1	2.8
9	7.6	5.3	1.6	14	7.0	5.4	1.7	19	12.7	8.3	3.2
10	7.1	5.5	1.8	15	7.4	5.0	2.0	20	13.0	7.7	3.5

表 6 2 面かわりけ計測表

(単位: cm)

図20はかわらけ。全て轆轤成形の製品である。小型（1～40）は口径6.6～8.0cmとバラツキがみられるが、器高が2.0～2.5cm程の深めで側面観が丸味が強い製品、器高が1.8～2.0cm程で底部から直線的に開き気味に立ち上がる製品、器高が1.5～1.8cm程で内彎気味に立ち上がる製品がみられる。中型と大型の境ははっきりしないが口径9.6～11.7cm程のものが中型（41～47）、12.0～14.0cm程のものが大型（48～61）に分けられそうである。中型は肉厚が薄く底部からやや開き気味に立ち上がり体部中程で内彎気味になる。大型は口径12cm大のものは側面観が丸味が強く内彎して立ち上がり、13cm大のものは直線的で体部中程に稜がみられるものが多い。

2 面土丹地葉層出土の遺物（図21・表6）

図21は2面を構成する土丹地葉層中から出土した遺物である。

1は青磁。蓮弁文碗。幅の狭い蓮弁文を有するタイプで軸は淡青緑色を呈している。小片のため口径等は不明。2は白磁。薄手の碗の底部片。内底面に印花文がわずかに認められる。軸はやや青味を帯びた乳白色を呈し、薄く高台内部にまで施されている。復元高台径は5.8cm。3は青白磁。小型の華瓶。花の部分を露胎にした貼付文がある。

4は瀬戸。入子。復元口径9.3cm。内面に紅のような赤色物質の付着が認められる。

5は山茶碗。口縁部の小片。胎土が精良な製品である。小片のため口径等は不明。

6～20はかわらけ。小型（6～15）は口径7.0～7.6cm。器高は1.5～1.8cm程で浅く底部から開き気味に立ち上がる。大型（16～20）は口径12.0～13.0cmで、16～19は器高が2.8～3.5cmで肉厚はやや厚く側面観は丸味が強い。22は底部から外反気味に立ち上がり、体部上半は内彎気味になる。6・7・10・17・18には油煙の付着が認められる。

21・22は常滑。21は壺の口縁部片。小片からの復元のため口径は不正確であるが19.5cm程であろう。口縁端部は外側へ折り返し頸部に密着させ、軽く撫でている。22は磨減痕のあるいわゆるスリ常滑。要胴部の破片を用いている。破片のため全容は不明であるが遺存する側面と外面に磨減痕が認められる。

23は砥石。断面長方形の薄い仕上げ砥である。両端を欠く小片であるが、両面が使用され遺存する面の中央付近が窪んでいる。24は滑石鍋。口縁から胴の下までの破片で復元口径は22cm程である。全体に成形痕は不明瞭である。

25～28は常滑。25・26は壺の口縁。いずれも小片のため口径等は不明。25は縁带上部がわずかに上方に引き上げられている。26は縁帯部がかなり押しつぶされ頸部に接する様になっている。27は壺の底部。復元底径23cm程である。28は常滑の鉢。口縁端部の破片で復元口径は27cm程である。

29～34は山茶碗蓋系埴鉢。29～33は口縁部の破片で口径等は不明。いずれも口縁端部は丸く納められている。34は底部から体部下半にかけての破片で1/4程を遺存する破片。体部下半は横方向のヘラ調整が施され、貧弱な高台が貼り付けられている。復元高台径は13cm程である。

35は手埴り。瓦質の手埴りであるが器表は剝離が著しい。小片のため口径等は不明である。

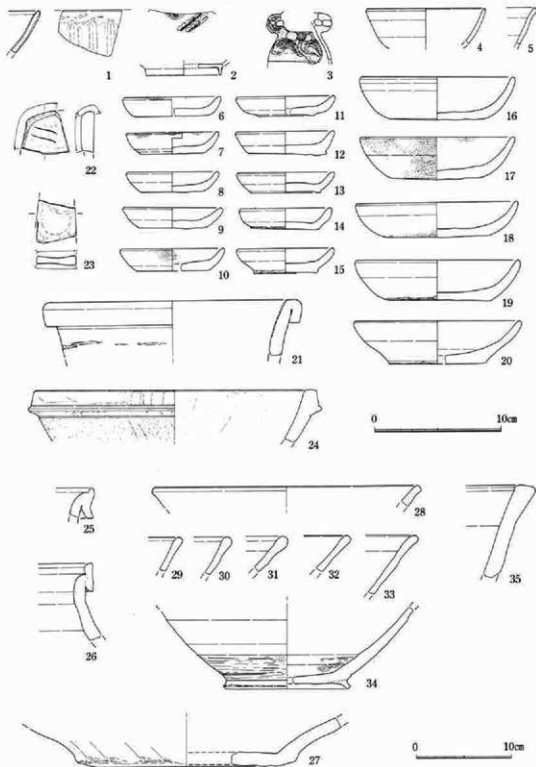


図21 2面土丹地業層出土の遺物

第3節 3面の遺構と遺物

2面の調査終了後、2面土丹地業層以下の堆積状況や柱穴等の切り合い関係などを確認するため建物1・2の柱通りに東西2本、南北4本のセクションベルトを設定し、これらの状況を確認しながら段階的に掘り下げた。土丹地業層を取り除くと中世基盤層までの間には炭化物や小土丹を多く混入する褐色土層の外、場所によって厚さは異なるが褐色粘土層、黄灰色粘土層、黄灰色粗砂層、小土丹層などが焼土や炭化物あるいは炭化物を多く混入する間層と互層をなしているのが確認された。これらの粘土層や粗砂層、小土丹層は厚いところでも数センチ程の厚さであるが、これらの上面から掘り込まれた柱穴が確認され、ある時期の生活面（遺構構築面）として存在していたと考えられる。しかしながら前述のごとく各層が薄く、また湧水や降雨によって遺構面の維持が困難な

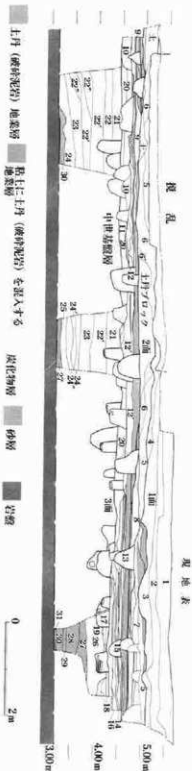


图22 調查区南北土層断面图

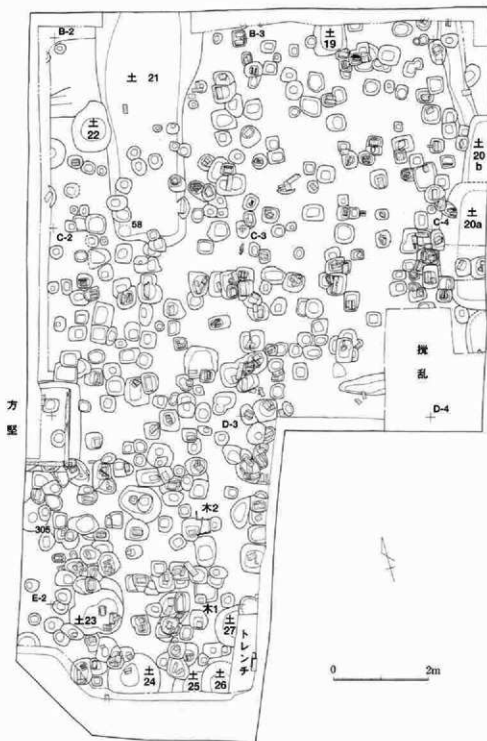


図23 3面遺構全測図

ため、面的に広がりを確認できず土層観察や部分的な確認にとどまらざるを得なかった。

3面で報告する遺構は2面土丹地業層下層から中世基盤層までをまとめている。3面で検出された遺構は、柱穴は礎板のみが確認されたものを含め423穴、土塼10基、溝状遺構1条、方形堅穴建物1棟、木組遺構2基である。溝状遺構は調査区北東隅に2m程にわたって検出されたが、本調査地点の地割りを示す遺構とはいいがなく、建物等に伴う地割りに関する資料は得られなかった。

建 物

3面で検出された柱穴は423穴を数え、礎板が検出された柱穴は180穴にのぼる。このうち何らかの規則性が認められる柱穴は全体の約1/3にあたる141穴で、大小16棟の建物が復元された。2面と同じくおもに2区に検出された柱穴はその規則性に疑問が残るものがあるが、可能性のあるものについては最大限復元している。また複数の柱穴が切り合っていてそれぞれに礎板が検出された柱

穴や、全く同じ位置に重複して柱穴が掘られレベル差をもって礎板が検出された柱穴もある。このような柱穴については平面的な切り合い関係の外、土層断面の観察や礎板の接合状況などを参考にできる限り帰属する柱穴の確認を行った。

3面で検出した礎板の接合関係は図24に示したとおりである。竃食が進み切断面や半截面の遺存状態が悪く明らかでないものも多いが、礎板の接合状況をみると同一柱穴内で接合したものを含め34ヶ所・39枚の礎板が接合した。また複数の柱穴が切り合って一ヶ所に10枚以上の礎板が検出され、上位の礎板と下位の礎板が20cm程のレベル差がありながら接合したものもある。本来の構築時の礎板の状況とは異なり、その建物の廃絶時の抜き取りや後の攪乱による結果と考えられる。調査時には判然としなかったが礎板の接合によって同時性が確認された柱穴もある。

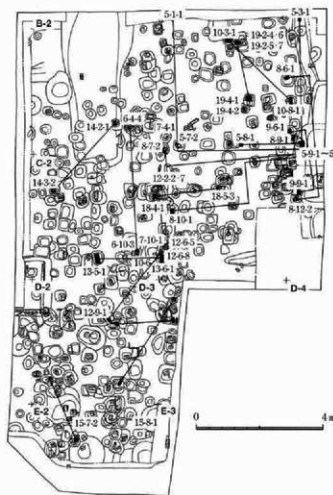


図24 3面礎板接合図

建物5 (図25・表7)

確認規模 東西2間×南北2間

柱間隔 東西2m、南北2m

南北軸方位 N-12°-E

礎板接合状況

1-1←切断→7-2←切断→9-1←切断→

8-1←切断→9-2←割れ→9-3←切断→

9-4←切断→9-5←切断→3-1

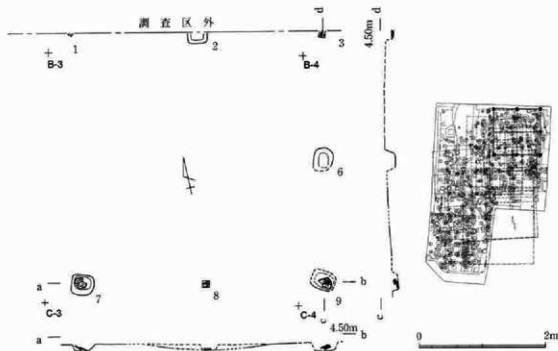


図25 建物5

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	不詳		1	14.2×10.5×3.5	4.38	北壁際に検出
2	30×-	4.29	ナシ			
3	不詳		1	12.3×9.0×2.5	4.32	北壁際に検出
4	未検出					
5	未検出					
6	30×(40)	4.27	ナシ			
7	46×46	4.10	1	11.2×9.2×1.5	4.43	
			2	12.7×10.2×2.1	4.34	
8	不詳		1	12.8×10.0×2.0	4.38	礎板のみ検出
9	(40×30) 不詳	4.10	1	11.5×10.2×1.8	4.33	
			2	12.7×4.5×1.8	4.27	
			3	12.7×5.3×2.0	-	
			4	12.5×9.0×2.0	-	
			5	12.8×9.0×2.8	4.30	

表7 建物5柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

建物5は調査区北東、B-3～4グリッドにかけて検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから3穴、1穴、3穴の7穴が確認された。調査時には中央部分にあたる柱穴4、5が確認されず、コの字状にしか柱穴が検出されなかったため建物とするには疑問も残ったが、礎板の接合状況からこれらの柱穴の同時性が確認されたため建物と考えたい。確認した柱穴はいずれも浅く、柱穴8は礎板のみが検出された。柱穴4、5は見逃してしまった可能性がある。調査区北壁際に確認された柱穴1～3の土層観察では掘り込み面は2面土丹地菜層直下の茶褐色粘土層であることが確認され、3面の中でも2面に近い時期の建物である。柱穴3は溝状遺構より新しく、柱穴9は建物8の柱穴9より新しいと思われる。柱穴1・3・7・8・9で検出された礎板は腐食して表面はかなり荒れているものもあるがいずれも厚さは2cm程で、それぞれ1枚、1枚、2枚、1枚、5枚検出された。切断面の形状などから礎板1-1・7-2・9-1・8-1・9-2・9-3・9-4・9-5・3-1のように順に接合し、長さ1m程、幅9～10cm程の板に復元された。この板を長さ12cm程に切断して礎板として用いている。また7-1も同一材と思われる。

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	不詳	4.48	1	24.0×7.5×5.5	4.66	礎板のみ検出
			2	15.0×9.5×2.5	4.57	
			3	16.0×9.5×3.2	4.45	
2	38×40	4.55	ナシ			
3	36×35	4.13	ナシ			
4	(50)×34	4.25	1	15.5×8.0×2.7	4.47	
			2	19.5×3.3×1.6	4.31	
			3	不明	4.29	
			4	20.7×13.3×3.0	4.30	
5	不詳	4.10	1	31.0×9.2×6.3	4.46	礎板のみ検出
			2	21.5×13.0×7.0	4.39	
			3	30.0×5.7×0.8	4.34	
			4	23.5×5.4×1.0	4.21	
6	37×40	4.14	1	26.0×13.5×3.8	4.20	
7	40×53	4.10	1	29.5×6.5×3.2	4.33	
			2	38.4×7.0×6.0	4.27	
8	46×42	4.00	1	11.2×6.6×3.0	4.31	
			2	22.0×10.8×2.2	4.29	
			3	23.0×5.5×2.5	4.28	
			4	11.5×9.3×2.9	4.27	
9	未検出					
10	32×28	4.12	1	19.5×12.0×3.0	4.35	
			2	12.0×13.0×3.8	4.25	
			3	12.7×12.5×4.0	4.25	
11	31×36	4.18	ナシ			
12	不明					攪乱1と重複

表8 建物6柱穴観察表

(単位:cm レベル:m)

建物 6 (図26 表 8)

確認規模	東西2間×南北3間	礎板接合状況
柱間間隔	東西2m、南北2m	4-4←同→10-3
南北軸方位	N-11.5°-E	

建物6は1区中央付近、B-2～C-3グリッドにかけて検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから3穴、3穴、2穴、2穴の10穴が確認された。検出された柱穴は浅いものも多く、柱穴1及び5の掘り方は確認できなかった。また柱穴9の位置にはこの建物に対応するような柱穴は確認されず、柱穴12は攪乱1に崩平され存在は不明である。建物の北辺は調査区外へ続いている可能性が考えられ判然としないが東、西及び南側の3辺はこれ以上対応するような柱穴は確認されず東西

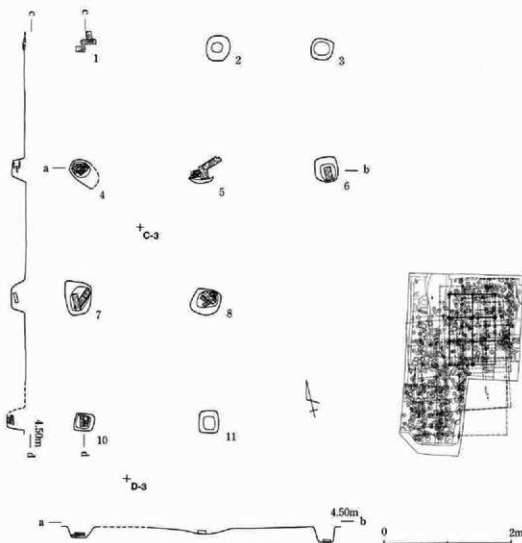


図26 建物 6

2間、南北3間程度のやや規模の小さな建物と考えられる。柱穴の掘り方は概ね隅丸方形を呈し、確認された深さは深いもので20cm程である。確認された柱穴のうち柱穴1・4・5・6・7・8・10に礎板が検出され、礎板4-4と10-3が直接的な接合関係は認められないがきわめて良く似た材を用いていた。建物6の礎板は厚さ3～4cm、幅9～12cm程のものもあるが、柱穴4・5・7・8などでは2×5～3×6cm程の細い角材を10～20cm程に切断したものを礎板として用いている。柱穴4は建物17の柱穴3の礎板を削るよう掘られており建物17より新しい建物と考えられる。柱穴の深さもバラツキがあり判然としないが検出状況や礎板のレベル等から考えて建物5と同じように2面に近い時期の建物と考えたい。

建物7（図27 表9）

確認規模	東西2間×南北5間	礎板接合状況
柱間間隔	東西2m、南北1.95m	4-1-同一か→10-1
南北軸方位	N-10°-E	

建物7は調査区中央（3ライン）付近から東側にかけて検出された建物で、北辺東西柱通りから3穴、3穴、3穴、1穴、1穴、1穴の12穴が確認された。1区南側から2区にかけての3穴は調査区東壁際に1列しか柱通りが確認されず、また他の柱穴と切り合っていて掘り方が判然としない

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	50×(43)	4.16	1	22.0×10.7×2.5	4.36	
2	45×43	4.17	ナシ			
3	26×35	4.21	ナシ			
4	不詳	4.12	1	35.0×10.5×8.0	4.42	
5	40×35	4.09	ナシ			
6	29×28	4.16	ナシ			
7	不詳		1	20.8×10.3×2.3	4.22	
8	(35)×40		1	21.7×11.5×6.8	4.17	
9	50×45		1	19.2×5.5×3.9	4.46	
			2	19.8×12.0×4.2	4.36	
			3	不明	4.44	
10	不詳		1	36.0×11.0×8.0	4.27	
11	不明					攪乱1と重複
12	不明					攪乱1と重複
13	(45×40)		1	22.3×9.0×2.5	4.22	
14	不明					調査区外
15	不明					調査区外
16	(60×60)		1	16.0×11.5×3.2	4.20	
17	不明					調査区外
18	不明					調査区外

表9 建物7柱穴観察表（単位：cm レベル：m）

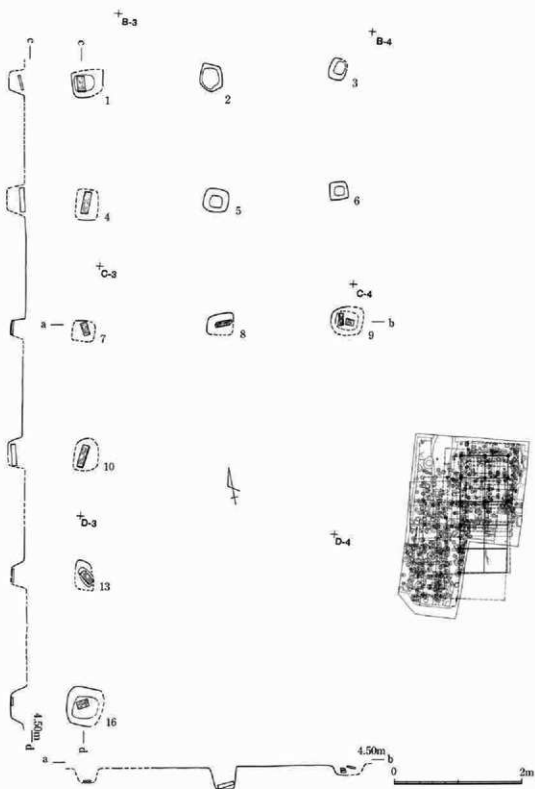


图27 建物7

ためこの建物に伴うかどうか疑問が残るが、柱穴の検出状況及び礎板4-1と10-1は8×11cm程の角材を35cm程の長さで礎板として用いており両者は良く似た材であること、柱間間隔等から同一建物の柱穴と考えたい。西側へはこれ以上対応するような柱穴は確認されず、建物7の西限は柱穴1～16の南北柱通りであると考えられるが、北、南及び東側の3辺は調査区外へ続いている可能性があり、建物の規模は明らかではない。少なくとも東西2間以上、南北5間の規模の大きな建物と考えられる。建物7の柱穴の検出状況は、柱穴4・7・8・9・10・13・16はそれぞれ同一位置に古い柱穴(建物12-2・3・4・6、13-2・6・10・14、17-9、18-6)が存在し、その覆土を掘り込んで礎板が据えられている。特に柱穴7・10・13などは複数の柱穴と切り合っており建物7の柱穴として単独で掘り方を特定することは不可能であった。建物7の礎板は厚さ2cm、幅10cm程の板材もみられるが、厚さ6cm～8cm、幅11～12cm程の角材を20～40cm程に切断したものを多く礎板として用いている。平面的な切り合い関係や土層断面の観察は十分に行えなかったが検出状況などから建物7は建物12、13、17、18より新しい建物と考えられる。

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	30×35	4.30	1	17.5×4.6×1.7	4.41	
			2	17.8×7.3×2.2	4.36	
			3	16.5×9.3×2.3	4.33	
2	不明					土壌19と重複
3	30×一	4.34	1	15.5×13.3×2.0	4.37	北壁際に検出
4	43×47	4.61	1	14.3×10.5×6.0	4.27	
5	40×45	4.24	ナシ			
6	40×40	4.22	1	14.5×9.0×2.0	4.34	
7	26×38	4.28	1	18.5×10.0×3.0	4.34	
			2	16.0×11.5×4.0	4.33	
8	28×(34)	4.23	1	15.0×4.8×1.5	4.35	
			2	17.0×8.8×7.2	4.33	
9	24×(33)	4.19	1	16.3×11.8×4.0	4.26	
10	46×(40)	4.10	1	20.5×11.5×3.5	4.28	
			2	17.5×9.0×3.0	4.26	
11	33×43	4.19	1	16.5×12.5×2.0	4.31	
			2	18.0×12.0×2.3	4.38	
			3	18.0×13.0×2.1	4.37	
12	35×30	4.10	1	17.5×11.0×2.0	4.17	
			2	17.7×7.5×2.0	4.12	
			3	12.5×9.3×2.7	4.11	
13	50×47	4.28	1	11.8×6.7×1.8	4.34	
			2	19.0×14.3×2.3	4.23	
			3	19.5×14.5×2.1	4.21	
14	不詳		1	17.5×6.5×1.7	4.21	攪乱1と重複
15	不明					攪乱1と重複

表10 建物8柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

建物 8 (図28 表10)

確認規模 東西2間×南北4間

礎板接合状況

柱間間隔 東西2m、南北2m

6-1←切断→12-2

南北軸方位 N-10°-E

7-2←切断→9-1←切断→10-1

建物 8 は 1 区中央 (3 ライン) から東にかけて検出された掘立柱建物で、北辺柱通りから 2 穴、

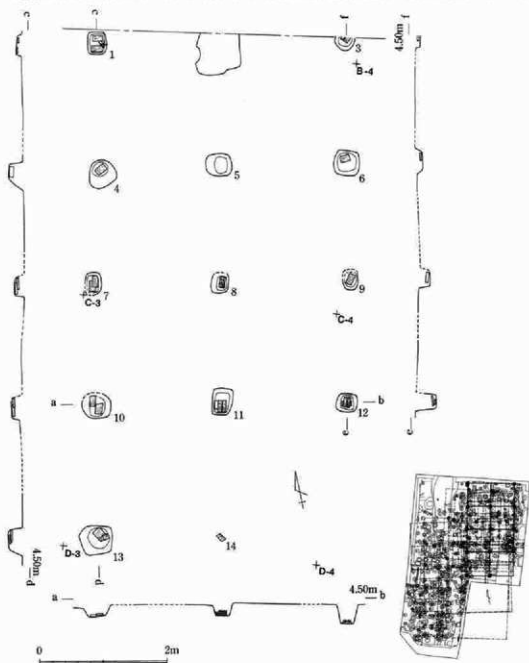


図28 建物 8

3 穴、3 穴、3 穴、2 穴の13穴が確認された。柱穴の掘り方は概ね隅丸方形を呈し、確認された深さは15～30cm程とバテツキがみられるが概ね浅く、柱穴3の土層断面の観察では建物5と同じように2面土丹地葉層下層の粘土層あたりから掘り込まれており2面に近い時期の建物であると考えられる。柱穴2は土壌19と重複し存在は不明であり、柱穴14及び15は攪乱1によって大きく削平され柱穴14は礎板のみが検出されたが柱穴15の存在は不明である。柱穴1～13の南北柱通り以西にはこの建物に対応するような柱穴は確認されずこの柱通りが建物の西限と考えられるが、北、南及び東側の3辺は調査区外へ続いている可能性があり建物の規模は明らかでない。少なくとも東西2間以上、南北4間以上の建物と考えられる。柱穴5を除き1～3枚の礎板がほぼ水平に検出され、礎板は本来の位置を保っていると思われる。礎板は幅が9～14cm程で厚さが1.5～2cm程のものもみられるが、幅が10cm程のものの中には角材を2～4cm程の厚さに縦に割り裂き割れ口を下にしてそのまま用いているものや、礎板4-1などは10.5×6cm角の角材を長さ14cm程に切断したものそのまま用いている。礎板6-1と12-2及び礎板7-2と9-1と10-1はそれぞれ切断面の形状が一致し、同一の材を切断して礎板として用いている。平均柱間隔は東西、南北とも2m程であるが、東西柱通りの北から2列目と3列目の間が1.8m程に狭まっているようである。調査時は柱間隔の違いから別の建物の可能性も考えられたが、礎板6-1と12-2が接合し同一の材を礎板として用いていることから柱穴の同時性が確認され、同一の建物に伴う柱穴と判断した。柱穴6・9・10・12は建物9の柱穴5・6・7・9とそれぞれ切り合っており、それぞれの切り合い関係から建物9より新しい建物と考えられる。

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	37×48	4.18	ナシ			
2	35×30	4.16	1	23.0×17.0× 3.0	4.37	
			2	24.5× 9.0× 3.5	4.37	
			3	不明	4.21	
3	38×30	4.20	1	18.3×11.0× 3.5	4.33	
4	30×35	4.31	1	9.0× 3.3× 1.0	4.35	
			2	7.0× 6.5× 2.5	4.33	
			3	不明	—	
5	25×25	4.49	ナシ			
6	45×40	4.14	1	24.0×12.5× 3.4	4.22	
7	40×(35)	3.99	1	不明	4.39	
8	未検出					
9	(35×30)	4.23	1	23.5×12.0× 3.2	4.29	
10	不詳	4.26	1	16.0× 8.4× 2.3	4.35	礎板のみ検出
			2	14.5× 8.5× 2.5	4.35	
			3	12.5× 7.5× 2.3	4.31	
11	不明					攪乱1と重複
12	不明					攪乱1と重複

表11 建物9 柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

建物9 (図29 表11)

確認規模 東西2間×南北3間

礎板接合状況

柱間間隔 東西2m、南北2m

6-1←切断→9-1

南北軸方位 N-10.3°-E

建物9は建物8とはほぼ同じ位置で30cm(柱穴1つ分)程北側にずれて検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから3穴、3穴、2穴、1穴の9穴が確認された。確認された柱穴は建物8のなかで述べたが建物8の柱穴と切り合っているものが多く、切り合い関係から建物9が建物8より古いと考えられる。柱穴10は1区と2区の調査区の境目で検出されたため柱穴の掘り方は確認できず、柱穴8は検出されなかった。建物の西の限界は建物8と同じく柱穴1～10の南北柱通りと考えられるが、北、南及び東側3辺は調査区外へ続いている可能性があり東西2間以上、南北3間以上の建

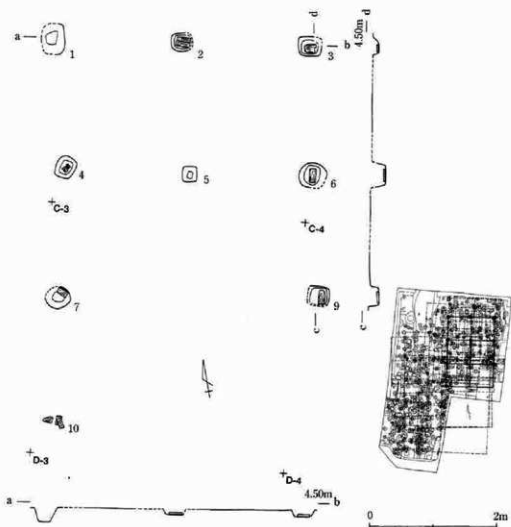


図29 建物9

物では建物8と同規模の建物と考えられる。柱穴の掘り方は概ね隅丸方形を呈し、確認した深さは10～20cm程と浅く柱穴2、3、6、9ではほぼ水平に礎板が検出された。柱穴4の礎板は小さな木片で本来の礎板というよりは抜き取り時に混入したような感じである。柱穴7の礎板は掘り方のごく上の方で検出されやはり攪乱を受けているものと考えられる。礎板6-1と9-1は幅12cm、厚さ3cm程の角材で6-1は一部炭化している。両者は切断面の形状が一致し同一の材を切断して礎板として用いている。また礎板2-1には一端に断面円形の軸部縁の加工がなされ、3-1には柄状に欠き込みがみられる。建物の廃材を転用しているであろう。

建物10 (図30 表12)

確認規模	東西3間×南北3間	礎板接合状況
柱間間隔	東西2m、南北2m	3-1←切断→8-1
南北軸方位	N-13°-E	

建物10は1区中央、B-2～D-4グリッドにかけて検出された独立柱建物で、北辺東西柱通りから3穴、3穴、3穴、2穴の11穴が確認された。柱穴16は攪乱1に削平され存在は不明であり、柱穴6・11の位置には対応するような柱穴は確認されなかった。また柱穴1は土壌21と重複し存在は不明であり、柱穴13の位置にも柱穴が確認されなかったため復元した建物10の南北柱通り西端列までを建物として含められるか疑問も残るが最大規模で考えておきたい。柱穴7は礎板のみが検出

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	不明					土壌21と重複
2	24×(30)	4.33	1	17.0×9.0×2.8	4.39	
			2	19.7×12.0×3.0	4.34	
3	30×27	4.30	1	20.5×10.5×3.5	4.36	
4	35×50	4.16	1	14.7×11.0×3.5	4.10	
			2	21.8×10.5×2.5	4.18	
5	30×35	4.03	ナシ			
6	未検出					
7	不詳		1	19.7×10.7×3.2	4.45	礎板のみ検出
			2	13.2×8.3×5.5	4.43	
8	32×30	4.09	1	22.8×10.3×3.5	4.18	
9	37×(30)	4.08	ナシ			
10	23×30		ナシ			
11	未検出					
12	(35)×45	4.16	1	20.0×11.5×3.8		
13	未検出					
14	(35)×45	4.29	1	18.5×7.0×2.3		
15	42×(32)		ナシ			
16	不明					攪乱1と重複

表12 建物10柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

され、掘り方は確認できなかった。柱穴の掘り方は一辺30～40cm程の隅丸方形を呈し、確認した深さは10～40cmとバラツキがある。確認された柱穴のうち7穴に礎板が検出された。柱穴2・3・7はそれぞれ建物11の柱穴1・2・5と切り合っており建物10が建物11より新しいと考えられる。西及び南側へは対応しそうな柱穴は調査区内で確認されず建物の限界と考えられるが、北及び東側へは調査区外へ続いている可能性があり、東西3間以上、南北3以上の建物であろう。礎板3-1と8-1は幅10cm、厚さ3.5cm、長さ20cm程で両者は切断面の形状が一致し同一の材を切断して礎板として用いている。

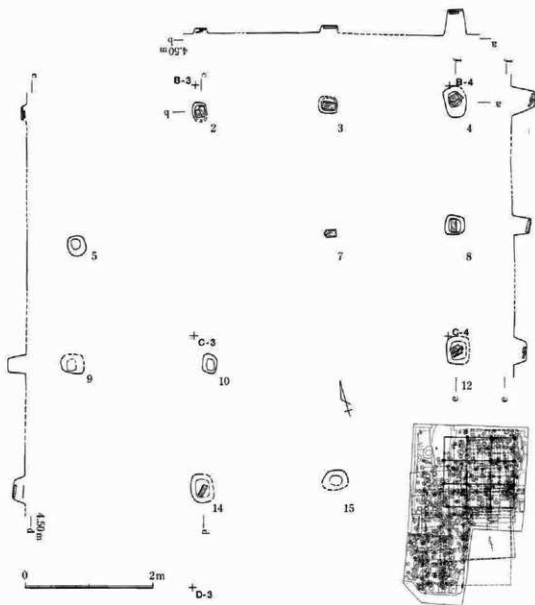


図30 建物10

建物11 (図31 表13)

確認規模 東西2間×南北3間 礎板接合状況

柱間間隔 東西2m、南北2m

南北軸方位 N-11°-E

建物11は建物8、9とはほぼ同じ位置に確認された掘立柱建物である。北辺東西柱通りから3穴、3穴、2穴、1穴の9穴が確認された。3ライン以西には対応するような柱穴は確認されず建物の西の限界は柱穴1～10の南北柱通りと考えられるが、北、南及び東側の3辺は調査区外へ続いている可能性があり建物の規模は明らかでない。東西2間以上、南北3間程度で建物8、9と同規模の建物と考えられる。柱穴の掘り方は一辺30cm程の小さな掘り方で隅丸方形を呈し、深さは40cm程で3面で確認された柱穴のなかで比較的深く規則性が確認された建物である。柱穴3は建物11の柱穴4及び溝状遺構の掘り方と切り合っておりプランは判然としなかった。柱穴6はやや南にずれるためこの建物に伴うか疑問が残る。柱穴3を除き礎板が検出されたが同建物内で接合する礎板は確認できなかった。いずれの礎板も厚さ1～2cm程、幅5～10cm程の大きさで、薄目の板材を10～20cm程に切った小さな礎板で、復元された建物のなかで比較的小さな礎板を用いている傾向が認められた。建物の廃絶時の抜き取りのためか乱れた状態の礎板が多く認められた。柱穴1、2、5は建物10の柱穴2、3、7とそれぞれ切り合っており切り合い関係から建物10より古いと考えられる。

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	39×31	3.90	1	17.0×9.7×3.0	4.10	一部炭化 土丹アリ
			2	21.5×13.0×2.2	3.91	
2	27×(30)	4.15	1	18.0×6.2×2.0	4.38	土丹アリ
			2	18.5×4.3×1.7	—	
3	33×(30)	4.10	ナシ			
4	32×33	4.18	1	12.6×3.4×1.4	4.35	
			2	14.7×9.0×1.6	4.37	
			3	10.8×7.8×1.4	4.30	
5	34×37	3.96	1	不明	4.02	
			2	12.5×4.0×1.2	—	
			3	10.4×3.8×1.5	—	
6	30×27	3.97	1	19.7×8.2×1.3	4.11	
			2	21.0×5.7×0.8	3.99	
7	24×30	4.08	1	不明	4.11	
8	27×23	4.15	1	不明	4.19	
9	不明					土城20と重複
10	25×25	4.12	1	20.7×8.5×2.3	4.21	
			2	13.0×4.3×1.7	4.19	
11	未検出					
12	未検出					

表13 建物11柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

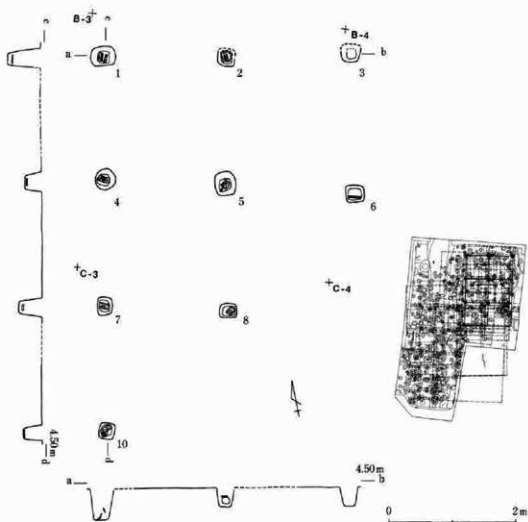


図31 建物11

建物12 (図32 表14)

確認規模	東西3間×南北3間	礎板接合状況
柱間間隔	東西2m、南北2m	2-2←割れ→2-7←切断→6-5
南北軸方位	N-8.5°-E	6-8←割り→9-1

建物12は1区南側から2区(C-2~D-3グリッド)にかけて検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから4穴、2穴、2穴、1穴の9穴が確認された。建物の南東側にあたる柱穴11・12・14・15・16は調査区外のため、柱穴9は攪乱1に削平されているためその存在は不明である。柱穴6の位置には対応するような柱穴は確認されなかった。柱穴1は建物13の柱穴1と重複していて掘り方は判然とせず礎板も検出されなかった。また柱穴2、6は他の建物の柱穴(2は建物7-7、

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	35×ー	4.05	ナシ			
2	(55×45) 不詳	4.01	1	13.0×11.5× 6.5	4.15	
			2	16.0× 6.0× 2.0	4.18	
			3	18.0× 9.5× 3.0	4.26	
			4	16.5× 9.3× 2.7	4.19	
			5	15.9× 2.8× 1.6	4.15	
			6	16.0× 6.3× 2.3	4.01	
			7	21.0×11.5× 3.0	4.15	
3	(40×35)	3.80	1	14.2×10.5× 3.5	3.84	
4	35×33	3.98	1	13.7×11.7× 2.8	4.14	
			2	19.0×12.6× 2.1	4.12	
			3	23.5×13.0× 2.0	4.13	
			4	20.5×11.0× 2.1	4.10	
			5	18.6×19.5× 2.1	4.10	
5	未検出					
6	(70×60)	4.06	1	10.5× 5.6× 1.1	ー	
			2	16.3×10.2× 4.3	4.38	
			3	14.5× 6.6× 2.0	4.30	
			4	14.5× 5.0× 2.0	4.18	
			5	15.0×12.3× 2.0	4.11	
			6	15.3× 4.8× 1.5	4.11	
			7	15.3× 5.5× 1.7	4.11	
			8	21.0×10.0× 3.7	4.11	
			9	20.6× 3.0× 3.3	ー	
7	35×55	4.17	1	14.0× 6.0× 4.5	4.24	
			2	12.0× 7.0× 4.5	4.42	
			3	13.5× 6.0× 2.3	4.37	
8	不明					攪乱1と重複
9	(40×38)	3.87	1	27.5×10.5× 4.5	3.90	
10	(ー×60) 不詳	4.07	1	25.5×11.5× 2.5	4.12	
			2	14.0×11.8× 3.5	4.15	
			3	16.5×11.0× 6.0	4.14	
11	不明					調査区外
12	不明					調査区外
13	(50)×40	4.05	1	29.7×13.5× 5.2	4.20	
			2	19.3×11.0× 2.7	4.15	
14	不明					調査区外
15	不明					調査区外
16	不明					調査区外

表14 建物12柱穴観察表

(単位:cm レベル:m)

13-2、17-6、18-4。6は7-10、13-6、17-9。と著しく切り合っており単独で建物12に伴う柱穴の掘り方としては確認できず、礎板を残しながら段階的に掘り下げ土層断面の観察や礎板の状況を確認した。柱穴2は7枚、柱穴4は5枚、柱穴6は9枚、その他の柱穴は1~3枚と多くの礎板が検出された。特に柱穴2、6は礎板の数が他の柱穴に比べ多く、複数の柱穴の存在が考えられたが、これらの礎板の接合状況は同一柱穴内で礎板2-2と2-7が割れ口の形状が一致し、さらにこれと礎板6-5が切断面の形状が一致した。また同一柱穴内の礎板6-6と6-7の割れ

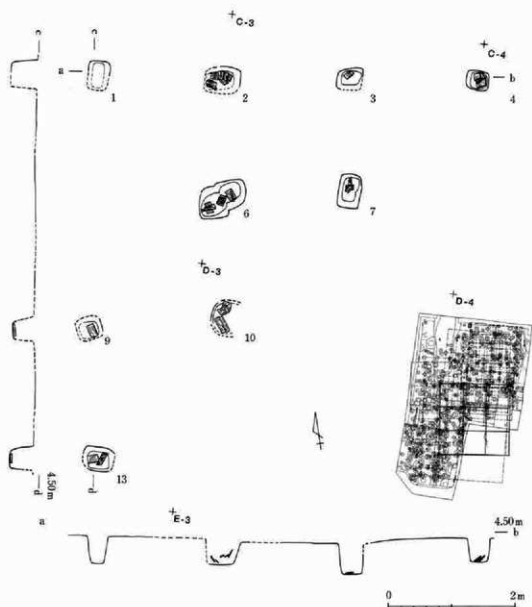


図32 建物12

口が一致し、これと礎板9-1の割れ口が一致し柱穴の同時性が確認された。さらに同一柱穴内だけではあるが礎板2-3と2-4の切断面が一致し、柱穴6-3と6-4は割れ口が一致し、また柱穴4の5枚の礎板は相互に4枚が接合し、他の1枚も同一材であるなどの複数の接合関係が確認された。柱穴6などは平面的にみれば2つの柱穴の切り合いの可能性も捨てきれないが礎板6-3と6-4は確認レベルに18cm程の差があるものが接合しており礎板の接合状況から1つの柱穴と考えておきたい。

建物13（図33 表15）

確認規模 東西3間×南北4間 礎板接合状況

柱間間隔 東西2m、南北2m 5-1←割り→6-1

南北軸方位 N-11.5°-E

建物13は1区南側から2区（C-2～C-3グリット）にかけて検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから4穴、2穴、2穴、2穴、2穴の12穴が確認された。柱穴の掘り方はやや大きく一

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	52×(47)	4.04	1	30.7×12.0× 4.3	4.14	
2	33×43	3.99	1	34.0×13.0× 5.3	4.09	
3	40×48	3.84	1	42.2×11.7× 5.3	4.05	
4	35×40	3.92	1	27.5×14.5× 7.0	4.01	
5	37×45	4.03	1	31.0×12.0× 4.0	4.08	
6	50×(40)	3.99	1	45.0×12.0× 5.5	4.05	
7	不明					攪乱1と重複
8	不明					攪乱1と重複
9	(60)×40	4.09	1	27.5×10.5× 4.5	4.11	
10	50×55	3.95	1	20.2×12.5× 3.8	4.04	
			2	34.2×13.5× 4.0	4.00	
			3	20.5×10.6× 3.8	4.03	
11	不明					調査区外
12	不明					調査区外
13	32×35	4.06	ナシ			
14	不詳	4.03	1	不明	—	
15	不明					調査区外
16	不明					調査区外
17	(35)×40	4.21	ナシ			
18	不詳	4.20	1	26.0×11.0× 4.0	4.30	
			2	26.0×12.5× 3.2	—	
			3	26.8× 8.0× 4.5	4.24	
19	不明					調査区外
20	不明					調査区外

表15 建物13柱穴観察表

（単位：cm レベル：m）

辺40～50cm程で概ね隅丸方形を呈し、深さは40～50cm程である。柱穴18は2区の堆積状況の確認と排水を兼ねて3面の調査に先行してトレンチを掘り下げてしまったため掘り方は確認できなかった。また建物南東部分の柱穴7・8は攪乱1に削平されているため、11・12・15・16・19・20は調査区外のため存在は不明であるが、少なくとも東西3間、南北4間以上の建物と考えられる。確認された柱穴のうち10穴に礎板が検出された。いずれの礎板も他の3面の建物に比べ大きく、柱穴5-1と6-1は長さがそれぞれ31cm、45cmで割れ口の形状が一致した。12×9cmの太い角材を縦に半分

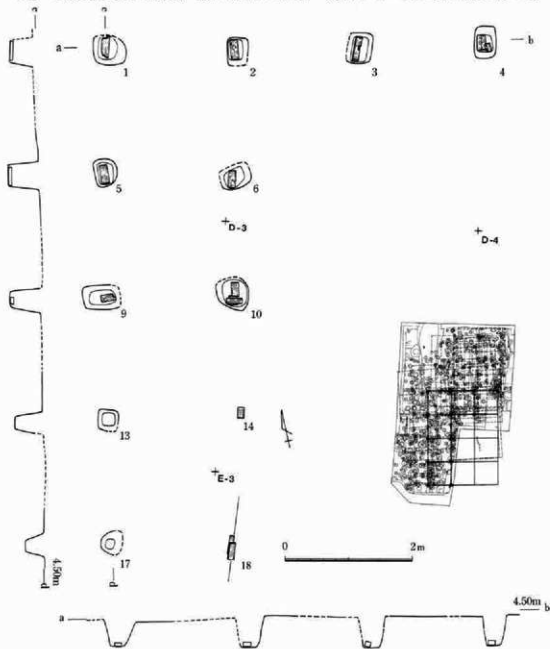


図33 建物13

に割り裂き、これを切って礎板として用いている。他の礎板も幅11～14cm、厚さ4～7cmと一回り大きく厚い材を用いている。柱穴2は建物12-2、柱穴3は建物8-10及び建物18-5、柱穴6は建物17-9などと切り合っておりいずれの建物より古いと考えられる。建物13は3面で検出した建物のなかで最も柱穴の掘り方や規則性が明らかな建物の一つである。切り合い関係等から3面のなかでも初期に建てられた建物の一つと考えられる。

建物14（図34 表16）

確認規模 東西1間×南北5間 礎板接合状況
柱間間隔 東西2m、南北2m 2-1←切断→3-2
南北軸方位 N-10°-E

建物14は1区南西から2区（B-2～B-5グリット）にかけて検出された掘立柱建物で、北辺

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	(33)×31	4.27	ナシ			
2	37×35	4.15	1	15.7×10.0×2.7	4.17	
			2	21.0×9.0×3.0	4.15	
			3	12.8×12.8×2.3	4.17	
3	33×30	3.99	1	11.0×5.0×1.6	4.03	
			2	15.0×7.5×2.3	—	
			3	18.0×3.0×2.2	4.01	
4	未検出					
5	40×37	4.16	1	21.5×6.0×2.3	4.22	
			2	21.5×5.0×2.3	4.34	
6	(35×30)	4.30	1	20.8×7.8×4.0	4.40	
7	39×(45)	3.98	1	23.0×9.0×5.0	4.26	
			2	24.5×7.5×4.0	4.14	
			3	不明	4.09	
			4	26.5×10.8×7.5	4.07	
8	45×40	4.07	1	14.0×10.7×3.5	4.05	
			2	26.3×11.5×2.7	4.15	
9	(57)×50	4.10	1	16.8×5.5×2.5	4.20	
			2	16.3×10.3×1.7	4.17	
			3	16.8×7.7×2.4	4.14	
			4	16.7×10.3×7.7	4.16	
10	45×65	3.94	ナシ			
11	(40×50)	3.94	1	11.5×8.5×3.0	4.04	
			2	19.0×9.3×3.0	4.07	
			3	20.5×6.5×1.4	4.03	
			4	20.0×12.0×3.0	4.19	
12	(47)×31	4.09	ナシ			

表16 建物14柱穴観察表

（単位：cm レベル：m）

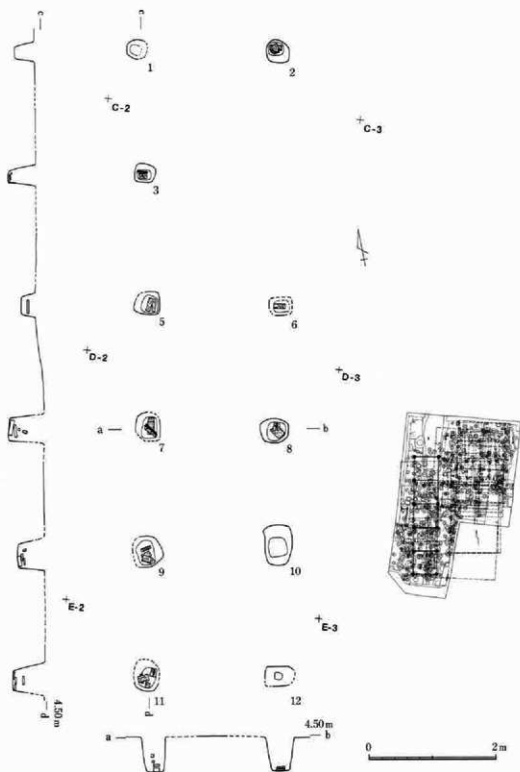


图34 建物14

東西柱通りから2穴、1穴、2穴、2穴、2穴の11穴が確認された。柱穴1・10・12を除く柱穴に礎板が2～4枚検出され、礎板2-1と3-2が切り口の形状が一致し同一材を切断して礎板として用いている。柱穴1・2・3・5・6は2面建物2の柱穴6・7・11・16・17とそれぞれ全く同じ位置に底部で15～30cm程のレベル差をもって重複して検出された。

建物15 (図35 表17)

確認規模	東西1間×南北3間	礎板接合状況
柱間間隔	東西2m、南北2m	7-2←同一か→8-1
南北軸方位	N-11°-E	

建物15は1区南西から2区(C-2～E-2グリット)にかけて確認された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから1穴、2穴、2穴、2穴の7穴が確認された。柱穴1は検出されず、また柱穴7は土壌23と切り合っていて掘り方は確認できなかった。柱穴の掘り方は概ね隅丸方形を呈し、深さは30～50cm程で、すべての柱穴に礎板が確認され、柱穴2には常滑の塼の胴部小片が礎板上に据えられていた。柱穴7-2と8-1は直接的な接合関係は確認されなかったが同一材と考えられる。東及び北側には対応するような柱穴は確認されず調査区内で確認した規模は東西1間、南北3間であるが西及び南側は調査区外へ続いている可能性がある。

建物16 (図36 表18)

確認規模	東西1間×南北2間
柱間間隔	東西2m、南北1.85m
南北軸方位	N-10°-E

建物16は2区、B-4～5グリットで検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから2穴、2穴、2穴の6穴が確認された。柱穴の掘り方は丸味を帯びるものの概ね隅丸方形を呈し、深さは40cm程ですべての柱穴に礎板が検出された。礎板は厚さ2cm、幅9～12cm程の板材を15～20cm程に切断して用いているものが多いが、柱穴4は11×6cm程の角材、柱穴6は5×9cm程の細めの角材を用いている。確認された規模は東西1間、南北2間で南北の柱間間隔が1.85mと狭く建物として復元できると疑問もあるが、2区で検出された柱穴のなかには建物として復元できないものの柱間が狭く並びそうな柱穴がいくつかありごく小さな掘立柱建物の存在を考えておきたい。

建物17 (図37 表19)

確認規模	東西2間×南北2間
柱間間隔	東西2m、南北2m
南北軸方位	N-7.5°-E

建物17は1区南西、B-3グリットで検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから2穴、2穴

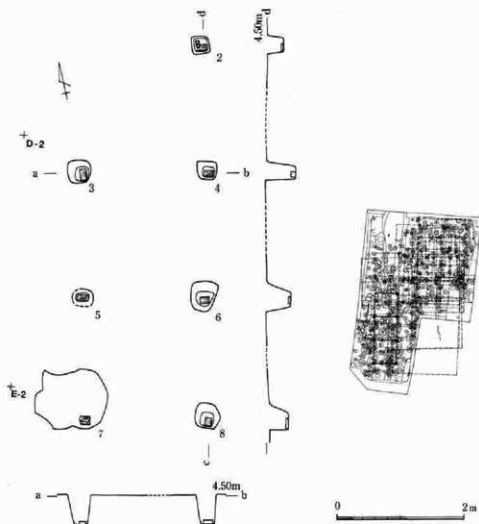


図35 建物15

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	未検出					
2	30×30	4.24	1	16.5× 8.5× 3.0	4.28	常滑焼小片
3	38×35	4.07	1	18.0×11.0× 4.0	4.10	
4	32×28	4.08	1	17.0×11.0× 6.8	4.12	
5	33×(28)	4.40	1	20.0× 7.5× 2.5	4.43	
6	40×48	4.11	1	不明	4.16	
7	不詳		1	23.5×10.5× 5.6	4.26	土填23と重複
			2	15.5×10.0× 1.6	4.23	
8	40×40	4.17	1	16.0×11.0× 3.7	4.20	

表17 建物15柱穴観察表

(単位：cm レベル：m)

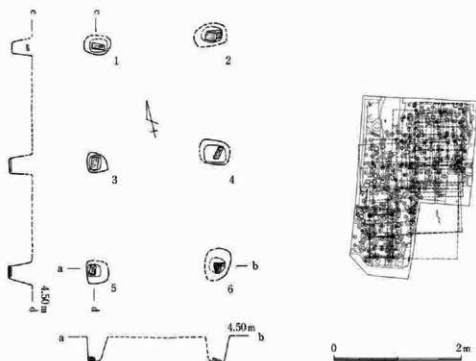


図36 建物16

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	44×(30)	4.18	1	不明	4.49	
2	(50×35)	4.09	1	14.5×11.0× 1.6	4.15	
			2	19.7×12.6× 1.5	4.14	
			3	不明	—	
3	33×33	4.16	1	19.0× 9.6× 2.2	4.15	
4	(47)×40	4.11	1	19.5×11.0× 6.3	4.20	
5	35×35	4.08	1	17.3×10.0× 2.3	4.17	
			2	19.0× 6.5× 2.7	—	
			3	10.0× 5.5× 2.0	—	
6	(40)×50	3.96	1	14.8× 2.8× 2.2	4.17	
			2	20.0× 5.8× 2.3	4.15	
			3	14.0× 3.8× 2.0	4.15	
			4	16.0× 5.0× 2.5	4.10	
			5	15.0× 8.6× 4.7	4.21	
			6	20.5× 8.5× 4.7	4.27	

表18 建物16柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

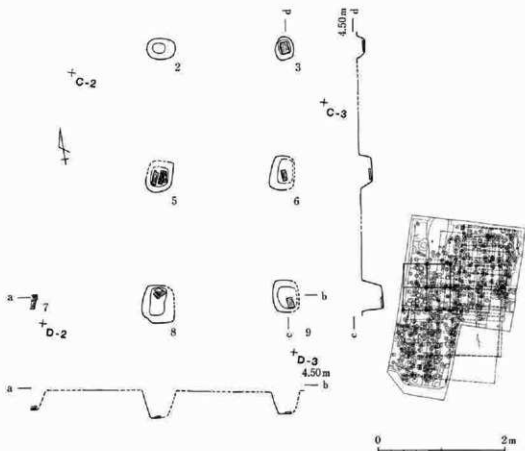


図37 建物17

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	不明					調査区外
2	45×33	4.08	ナシ			
3	30×35	4.30	1	18.5×13.0× 1.3	4.35	
4	不明					調査区外
5	(40×50)	4.14	1	不明	4.28	
			2	19.4× 3.8× 1.6	4.25	
			3	19.5× 6.0× 3.3	4.24	
			4	27.0× 6.0× 6.7	4.27	
6	(40)×53	3.97	1	16.5× 7.0× 1.5	4.25	
7	不詳	4.15	1	22.5×10.2× 3.5	4.21	方形堅穴建物と重複
			2	17.0× 5.3× 1.7	4.18	
8	50×60	3.98	1	16.3×10.6× 3.6	4.14	
			2	不明	4.07	
9	40×50	4.03	1	14.0× 8.5× 2.3	4.06	

表19 建物17柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

3穴の7穴が確認された。柱穴1・4は調査区外のため不明である。西側を除く3辺には建物に伴う柱穴は確認されず東西2間以上、南北2間の建物である。柱穴7は方形堅穴建物の覆土を掘り込んでおり方形堅穴建物より新しく、柱穴7の切り合いから建物6より古い建物と考えられる。

建物18 (図38 表20)

確認規模 東西2間×南北1間

柱間間隔 東西2m、南北2m

南北軸方位 N-6.5°-E

建物18は1区東側、C-3グリッドで検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから3穴、3穴

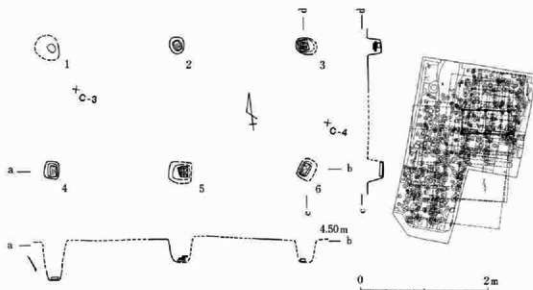


図38 建物18

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	(40×40)	4.01	ナシ			
2	24×26	4.10	1	17.0×10.7× 2.8	4.31	
3	(35)×27	4.15	1	11.3×10.5× 2.6	4.32	
			2	17.5×15.3× 2.0	4.30	
			3	21.0×13.7× 2.5	4.28	
			4	15.0×10.0× 7.2	4.00	
4	24×28	3.98	1	17.0×10.0× 5.3	4.09	
5	(36)×36	4.16	1	不明	4.31	
			2	16.0×10.5× 5.2	4.30	
			3	18.0×10.0× 5.5	4.24	
6	(26×34)	4.15	1	19.3× 9.3× 7.0	4.23	

表20 建物18柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

の6穴が確認された。柱穴の掘り方は小さく円形ないし隅丸方形を呈し、柱穴1を除き礎板が検出された。東側は判然としないが他の3辺はこの建物に対応するような柱穴は確認されず東西2間、南北1間のごく小規模な建物であろう。

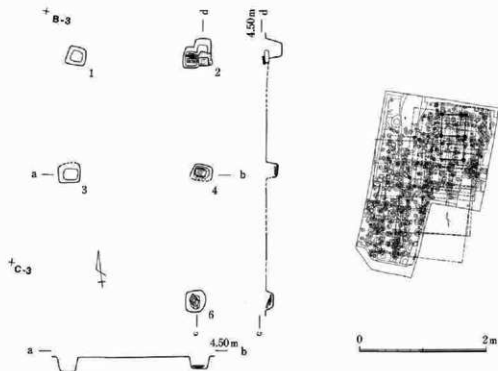


図39 建物19

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	30×30	4.27	ナシ			
2	45×45	4.20	1	13.5×11.0×1.5	4.47	別建物の礎板 土丹
			2	14.0×12.3×1.8	4.45	
			3		4.45	
			4	15.7×4.6×2.3	4.23	
			5	不明	—	
			6	15.6×5.6×2.4	4.24	
			7	18.7×5.0×2.5	4.23	
3	35×(32)	4.16	ナシ			
4	35×25	4.25	1	16.3×9.6×2.5	4.28	
			2	16.8×10.5×2.3	4.27	
5	未検出					
6	32×35	4.30	1	13.5×5.2×1.8	4.49	
			2	12.5×6.0×1.6	4.47	
			3	21.0×10.0×2.6	4.42	

表21 建物19柱穴観察表

(単位: cm レベル: m)

建物19 (図39 表21)

確認規模	東西1間×南北2間	礎板接合状況
柱間間隔	東西2m、南北1.95m	2-4←割れ→2-6←切断→4-1
南北軸方位	N-7.5°-E	2-5←割れ→2-7←切断→4-2

建物19は1区北東、B-3～C-3グリットにかけて検出された掘立柱建物で、北辺東西柱通りから2穴、2穴、1穴の5穴が確認された。柱穴5が確認されないため建物とするには疑問が残るが、北及び東側へ広がる可能性もあり建物として考えておきたい。柱穴2は柱穴上面に別の礎板が柱穴を塞ぐように検出され、土丹を挟んで検出された下層の礎板2-4と2-6、2-5と2-7の割れ口が一致し、これに礎板4-1、4-2の切断面の形状が一致しそれぞれ接合した。

建物20 (図40 表22)

確認規模	東西2間×南北1間
柱間間隔	東西2m、南北2m
南北軸方位	N-7.5°-E

建物20は1区南端から2区(D-2～3グリット)にかけて検出された掘立柱建物で、北辺柱通りから3穴、3穴の6穴が確認された。東西方向は調査区外に続いている可能性も考えられるが南北方向は対応するような柱穴は確認されず東西2間、南北1間の小さな建物であろう。確認された柱穴のうち3穴に礎板が遺存していた。柱穴の掘り方は概ね隅丸方形を呈し、深さは40～50cm程である。柱穴1は方形竪穴建物の床面から検出され、建物20は方形竪穴建物より古いと考えられる。柱間間隔は東西・南北とも2mである。

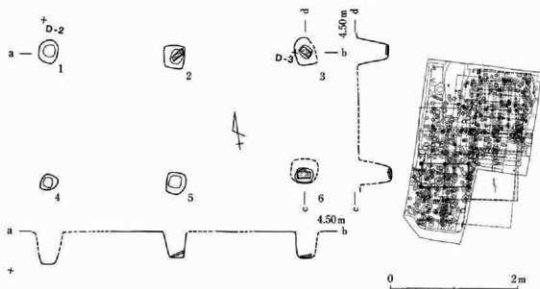


図40 建物20

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
1	37×30	3.99	ナシ			方形堅穴建物と重複
2	36×32	4.08	1	28.0×5.5×3.5	4.16	
3	(42)×33	4.08	1	不明	4.13	
4	25×27	4.11	ナシ			
5	35×31	3.99	ナシ			
6	(39)×50	3.94	1	25.0×10.3×1.5	3.99	
			2	20.0×13.5×4.2	3.97	

表22 建物20柱穴観察表

(単位：cm レベル：m)

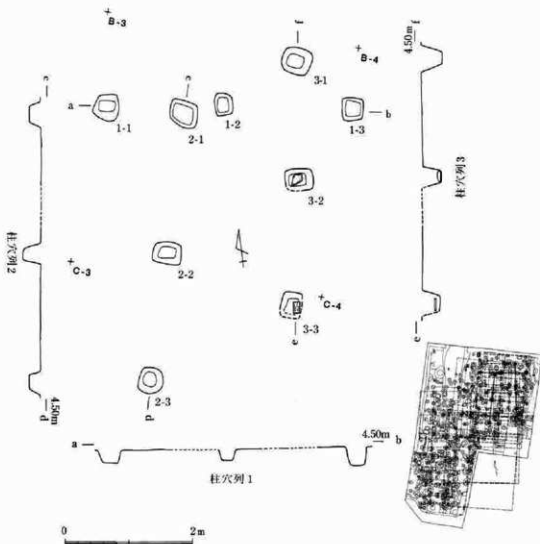


図41 その他の柱穴列

その他の柱穴列（図41 表23）

建物としては復元することができなかったが3穴の並びが認められる柱穴のうち調査時に確認したものをその他の柱穴列としている。これらの柱穴列の柱間間隔等は他の掘立柱建物と全く違いは認められず、いわゆる半間間隔に柱穴が並ぶような扉や櫓とは考えにくく、掘立柱建物になる可能性も残されていると考えられる。

柱穴列1は東西に3穴、2間が確認された。柱間間隔は2m程である。柱穴列2・3はそれぞれ南北に3穴、2間が確認された。柱間間隔は2m程である。柱穴列3-2は土丹が、3-3には礎板が検出された。柱穴の切り合い関係から柱穴列1は建物9より古いと考えられる。この他いくつかの柱穴についても等間隔に並びそうな柱穴や礎板が据えられているものの対応するような柱穴や規則性の見いだせない柱穴も多くある。これらの柱穴なども建物として調査区外へ広がる可能性が考えられ、さらに多くの建物の存在が予想される。

番号	柱穴規模	底レベル	礎板	礎板寸法	礎板レベル	備考
柱穴列1						
1	40×43	4.15	ナシ			
2	38×37	4.22	ナシ			
3	35×37	4.13	ナシ			
柱穴列2						
1	45×40	4.24	ナシ			
2	45×35	4.12	ナシ			
3	40×43	4.23	ナシ			
柱穴列3						
1	46×42	4.07	ナシ			
2	45×37	4.00	1		4.16	土丹
3	35×42	4.12	1	18.0×11.0× 2.0	4.22	

表23 その他の柱穴観察表（単位：cm レベル：m）

柱穴出土の遺物（図42）

柱穴から出土した遺物は多くが小片で、図示したものは57点である。また柱穴同士の切り合い、重複が著しい柱穴もあり採り上げ時に単独の柱穴に帰属させたものの、後の検討によって他の柱穴の覆土を掘りすぎてしまった可能性が考えられる遺物もある。

図42-1～3は青磁。いずれも幅の広い蓮弁文の碗である。1・2は小片のため口径等は不明。1の釉は暗青緑色を呈し、厚く施されている。建物17の柱穴2出土。2の釉は淡青緑色を呈している。建物11の柱穴8出土。3は口縁部から体部下半にかけての破片である。釉は緑灰色を呈している。復元口径14.6cm。柱穴305出土。4は白磁。碗の底部で高台の4/5程を遺存する破片。釉は水青色を呈し、高台内部にまで流れ込んでいる。高台径4.8cm。柱穴44出土。

5は山茶碗。口縁部片。胎土は精良で、内面に降灰がわずかに認められる。建物12の柱穴14出土。

6は常滑。壺の底部片。小片からの復元であるが底径は8.7cm程である。建物15の柱穴4出土。

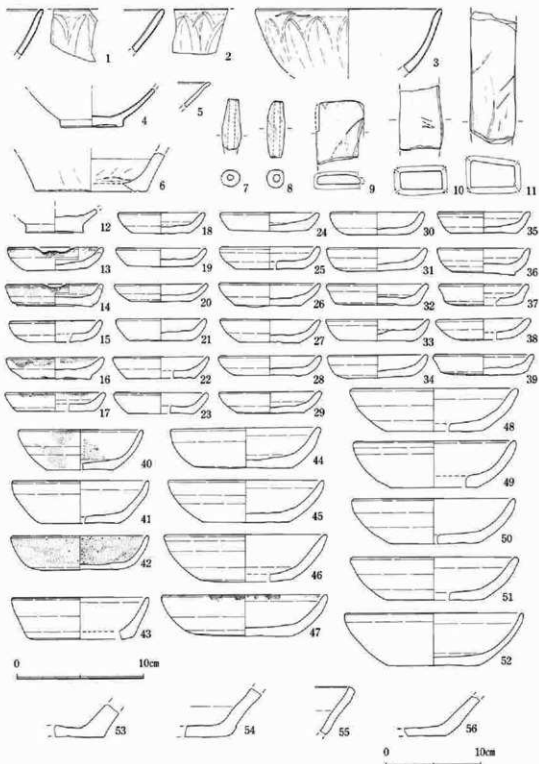


図42 3面柱穴出土の遺物

7・8は土鍾。7は一端を欠失するがほぼ8と同じ大きさと思われる。最大径1.6cm。柱穴85出土。8は長さ4.5cm、最大径1.5cm。成型時の指の圧痕がわずかに認められる。柱穴58出土。

9～11は砥石。いずれも断面長方形を呈し、9は仕上げ砥、10・11は中砥である。

12～52はかわらけ。いずれも轆轤成形の製品である。12は底部が5mm程高台状に突出する製品で器形は不明であるが体部は肉薄で開き気味に立ち上がっていると思われる。13～39の小型の製品は口径6.7～7.8cmで底部から開き気味に立ち上がるものが多くみられ、体部中程から反外気味に開くものや側面観が丸味の強いものもみられる。13～17には油煙の付着が認められ、13・14は口縁部の一部を打ち欠いて用いている。40～43の中型の製品は口径9.6～11.6cmで側面観は底部から直線的に立ち上がり体部上方で弱い稜を持つもの、丸味を持って立ち上がるもの、直線的に立ち上がるものがみられる。44～52の大型の製品は口径11.6～13.8cmとバラツキが大きい底部から直線的に立ち上がり体部上方で内彎気味になるものが多い。40・42・47には油煙の付着が認められる。

53～54は常滑。鉢の底部片。55は山茶碗窯系捏鉢の口縁部片。わずかに片口の一部が認められる。54は手埴り。底部片である。いずれも小片のため口径等は不明。

柱穴

図42	口径	底径	器高	図42	口径	底径	器高	図42	口径	底径	器高
12	—	4.5	—	28	7.8	5.3	1.8	40	9.6	5.2	3.2
13	7.3	4.7	1.8	27	7.6	4.8	1.8	41	10.6	6.1	3.4
14	7.4	6.1	1.7	28	7.8	5.6	1.6	42	10.6	5.9	2.7
15	7.0	4.3	1.7	29	7.8	5.3	1.7	43	10.6	7.2	3.3
16	7.4	5.3	1.7	30	7.2	4.7	1.8	44	11.6	7.6	3.1
17	7.6	6.0	1.5	31	7.7	5.2	1.9	45	12.1	6.8	3.4
18	6.7	4.5	1.7	32	7.8	6.2	1.7	46	12.6	6.8	3.8
19	6.9	5.2	1.5	33	7.9	5.6	1.7	47	12.8	7.4	3.3
20	7.1	4.7	1.4	34	7.6	5.3	1.9	48	12.9	6.5	3.4
21	6.9	4.7	1.7	35	7.1	5.3	1.7	49	12.6	6.8	3.7
22	7.4	5.4	1.8	36	7.1	4.9	2.0	50	12.6	6.8	3.6
23	7.1	5.2	1.7	37	6.7	5.3	1.7	51	12.8	7.6	3.4
24	7.5	6.1	1.5	38	7.1	4.6	1.7	52	13.8	7.2	4.2
25	7.6	5.4	1.8	39	7.6	5.7	1.7				

方形堅穴建物・土壇

図44	口径	底径	器高	図48	口径	底径	器高	図48	口径	底径	器高
図44 方形堅穴建物				図48 土壇21				図48 土壇21			
4	6.8	5.3	1.8	3	6.8	5.1	1.6	11	7.3	5.2	1.7
5	7.6	5.2	1.7	4	6.9	5.0	1.6	12	7.9	5.7	1.9
6	7.9	5.6	1.8	5	7.1	5.2	1.6	13	7.6	4.8	1.7
7	11.8	9.0	2.8	6	7.1	5.0	1.7	14	7.3	4.4	1.8
8	11.9	7.4	3.2	7	7.7	5.3	1.6	15	12.3	6.8	3.7
図47 土壇20				8	7.5	4.6	1.8	16	12.4	7.3	3.6
10	7.3	5.0	1.8	9	7.1	5.0	1.9	17	12.3	6.3	3.5
11	7.5	5.5	1.7	10	6.9	4.5	1.6	18	12.5	7.7	3.7

表24 3面かわらけ計測表(1)

(単位 cm)

方形竪穴建物（図43）

方形竪穴建物は2区、B-4グリット付近の調査区西壁際に検出された。確認された規模は南北1.9m、東西1.1mで、深さは40cm程である。東及び南側の床面壁際にL字に土台の横木と東側に壁体を構成する横板の痕跡が確認された。いずれも遺存状況は悪くかなり腐食していたが、東側の土台は幅10cm、厚さ4cm程の角材で、長さ1.65m程が確認され、角材のほぼ中央と南東側の角部分に間柱を受けるとと思われる枘穴の痕跡がわずかに認められた。枘穴は長辺10cm、短辺4cm程で、深さは土台の上面が腐食しているため不明であるが、角材の下面まで貫通していない。東西方向の土台の横木は南北方向の土台とほぼ同じ大きさで調査区外へさらに続いている。隅の組み方は上面が腐食しているため判然としないが、東西方向の土台の東端から8cm程の所に枘状の切り込みが認められその上に南北方向の土台が載るように検出された。壁体を成す横板は腐食のため厚さは不明であるが幅24cm、長さ1.6mが確認された。掘り方は土層断面図の14層上面から確認され、6～10層の土で埋められておりこの上の5層は水平な堆積をしている。さらにその上に2面を構成する土地葉層が10cm程堆積している。部分的な検出遺構であるため全容は不明であるが、構造や規模から横木を土台に用いた木組の方形竪穴建物の張り出し部分と考えられ、主体部は本調査地点の西側に存在

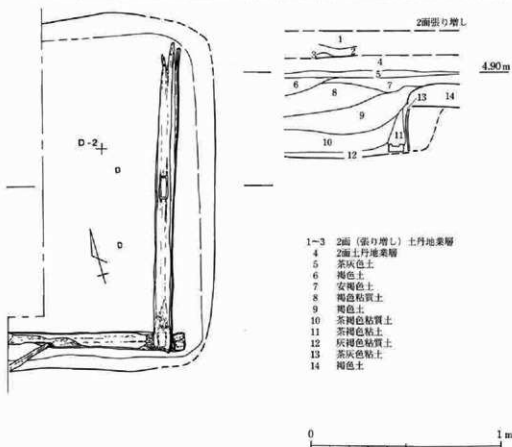


図43 方形竪穴建物

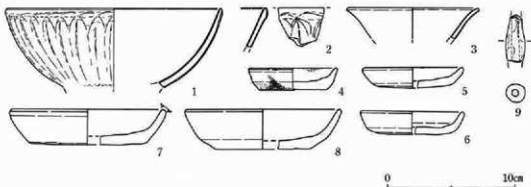


図44 方形竪穴建物出土の遺物

するものと考えられる。掘立柱建物との新旧関係は柱穴等の確認状況から建物20より新しく、建物17より古いと考えられるが、他の建物との関係は不明である。

方形竪穴建物出土の遺物（図44）

方形竪穴建物から出土した遺物は検出された遺構の面積が狭く量的にも少なく小片が多いため図示できた遺物は9点にすぎない。

図44-1・2は青磁。蓮弁文碗である。1は幅の狭い蓮弁を有するタイプで口縁から体部下半にかけて1/5程を遺存する破片である。釉は青緑色を呈し、厚く施されている。復元口径16.3cm。2は幅の広い蓮弁を有するタイプで、釉は暗緑灰色を呈している。小片のため口径等は不明。

3は白磁。口元皿。釉は白濁色を呈している。口縁は強く外反する。復元口径10.2cm。

4～8はかわらけ。小型（4～6）は口径6.7～7.9cm、大型（7・8）は11.7～11.9cmである。7は口唇部が全周にわたって削られ擦られた痕が認められる。

9は土錘。両端を欠くが3.5cm程を遺存し、最大径1.5cmである。柱穴から出土している土錘（図42-7・8）とはほぼ同じ大きさである。

木組遺構

木組の遺構は2区（B-4グリット）で2ヶ所検出された。

木組遺構1（図45-1）

木組遺構1は東西45cm、南北45cm程の大きさと深さは10cm程が確認された。遺存状態は悪く構造材はほとんど腐食し、木質部がろうじて圧痕状に検出されたにすぎない。下端をV字状に削り、上方に開くように打ち込んだ幅6～10cm程の薄い板の圧痕が東辺に3枚、北辺に4枚、南辺に3枚確認された。規模はかなり小さいが、いわゆる市街地の調査で検出されている囲炉裏と考えられる。確認レベルは2面の土丹層を取り除いたすぐ下層の炭化物を多く混入する層から確認され、3面でも新しい2面に近い時期の遺構と考えられる。どの建物に伴う遺構かは確認できなかった。

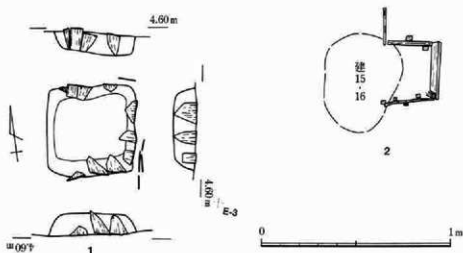


図45 木組遺構

木組遺構 2 (図45-2)

木組遺構2は中世基盤層精査中に確認した遺構で西辺は建物15の柱穴6で覆されているが、東・北・南辺に幅10cm、長さ25～30cm程の板を箱形に組み、内側と外側に細い杭を打ち込んで固定している。やはり構造材の遺存状況は悪く繊維質がわずかに痕跡をとどめているだけであった。掘り方は明瞭なプランとして確認されなかったが木組よりわずかに大きい掘り方であったと思われる。この木組と関連づけられるような建物や遺構は確認されず性格は不明である。

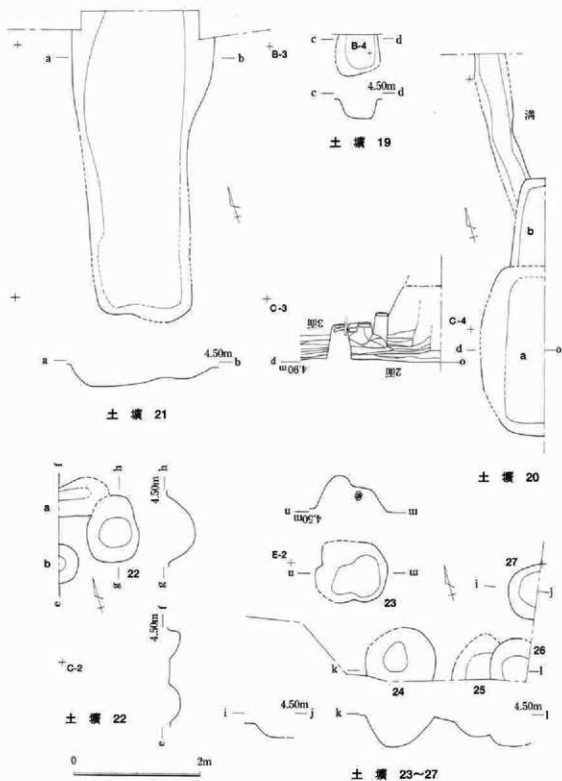
土壌 (図46)

3面では調査区北西に土壌21、1区東壁際に土壌20の規模の大きな土壌が検出されたがいずれも調査区外へ続いているため全容は不明である。また2区南端に5基の土壌23～27が検出されたがやはり調査区外へ続くものが多く全容を確認できたものはない。

土壌19 (図46・図47-1～8)

土壌19は1区北壁際、B-3グリッドで検出された。北側は調査区外へ続いているため全容は不明であるが東西35cm、南北30cm以上の小規模な土壌である。深さは30cm程が確認された。覆土は上層に褐色粘土が堆積している。湧水が多いこともあって覆土は締まりがなく下層には木製品を含む有機質腐植土が認められた。かわらけの小片など若干の遺物が出土したが図示し得たものは木製品の8点である。

図47-1は板草履。一部を欠失するがほぼ全容を知りうる個体である。長さ24.7cm、幅11.8cm、厚さ4mmで表面にわずかに繊維状の痕跡が認められた。左右それぞれの中央付近に前後に12cmの間隔で2ヶ所に直径数ミリの穿孔が施されている。この穿孔は左右の2枚を重ね合わせるとほぼ一致



する位置にある。製作工程の一部を示すものであろうか。2は長さ25cm程で上端部は細かな削りで丸味をもたせ中程から先端はやや荒く削り先端部を細めている。3は先端部を欠失するが最大径1.3cm程ではほぼ同じ形状を呈している。

4～7は箸状木製品。6・7は端部を欠失しているが、いずれも最大径6～7mm程で、長さは1が20.7cm、2が18.8cmである。削り方はいずれも荒く断面は不整多角形を呈している。

8は箱の部材と思われる板材で、厚さ4mm、幅13.5cm、高さ2.5cmの長方形を呈し、両端は高さの半分程までを左右上下違えて4mm程切り落としている。上端面を除き直径2mm程の木釘あるいは釘穴が12ヶ所認められた。

土壌20（図46・図47-9～13）

土壌20-a・bは1区調査区東壁跡、D-2～3グリットにかけて検出された。南北2.7m、東西は調査区の壁から1m程が確認されたが東側へはさらに調査区外へ続いている。土壌20-aの北側には同様の規模の土壌が切り合って検出されたが（20-b）両者の新旧関係は確認できなかった。建物2の柱穴ラインの土層観察では中世基盤層までの細かな堆積層の中程あたりから掘り込まれている。

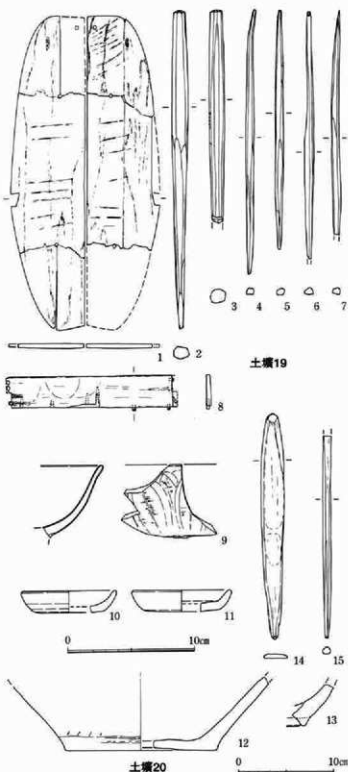


図47 3面土壌19・20出土の遺物

湧水が激しくごく部分的な土層観察のため判然としないが、確認範囲の途中でほぼ垂直に土層の違いが認められ、覆土下層に青灰色砂の堆積が確認された。井枠などの構造を示すものは確認できなかったが井戸の可能性が考えられる。北側に切り合った土壌20・bも同様な遺構と考えられる。

図47-9は青磁。蓮弁文碗。幅の広い蓮弁を有するタイプである。小片のため口径等は不明。

10・11は轆轤成形のかわらけ。小片からの復元のため口径は不確かであるが7.5cm程である。

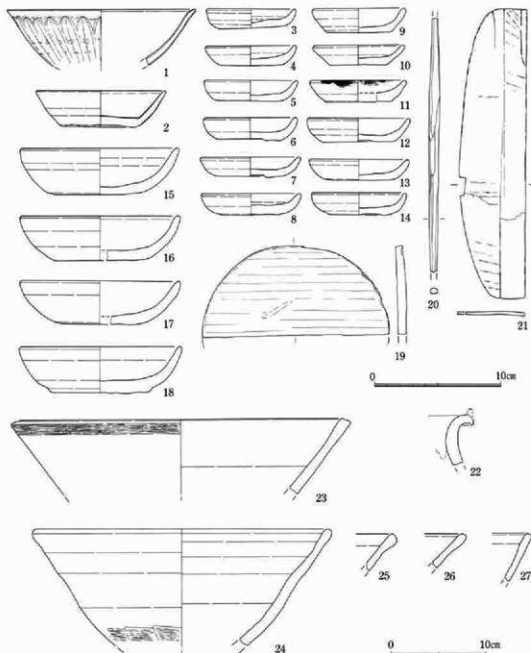


図48 3面土壌21出土の遺物

12は常滑。鉢の底部の破片で1/2程を遺存する。内面は良く磨滅している。復元底径16cm。

13は山茶碗窯系捏鉢。小片のため高台径等は不明。断面逆三角形の高台が貼り付けられている。

14・15は木製品。5は長さ18cm、幅1.9cm、厚さ3mm程で表面を丁寧に削り両端を細めたヘラ状を呈している。6は棒状の製品。一端を欠失し16cm程を遺存する。最大径7mm程である。

土壌21 (図46・図48)

土壌21は調査区北西B-2〜3グリットにかけて検出された。東西1.5〜2m、南北5m以上の細長い土壌で、北側は調査区外へ続いている。深さは30〜40cm程である。土壌の北側は2面土壌8と切り合っている。覆土上層は締まりのない褐色粘質土が堆積し、下層は有機質腐植土の堆積が認められ木製品を含む遺物が出土した。

図48-1は青磁。蓮弁文碗。口縁から体部下半の小片。釉は緑灰色を呈し、厚く施されている。小片からの復元であるが口径14.8cm程である。2は白磁。口元皿。口縁部の遺存率は低い対角状の口縁部を遺存する破片。釉は灰白色を呈している。口径10.1cm、底径5.6cm、器高2.9cm。

3〜18は轆轤成形のかわらけ。小型(3〜14)は口径6.8〜7.9cm程、大型(15〜18)は12.3〜12.6cm。7〜9が底部から直線的に立ち上がる他は側面観が丸味があり内彎気味に立ち上がる。

19〜21は木製品。19は1/2程を欠失するが直径15cm程の円板である。厚さ7mm程で曲げものの底板であろう。20は箸状木製品。両端を欠失し20cm程を遺存する。最大径8mm。21は板草履。片側のみ出土した。表面にはわずかに繊維状の圧痕が認められる。長さ23cm、幅5.3cm、厚さ3mm。通常みられる先端部の穿孔は認められなかった。

22・23は常滑。22は甕の口縁部。ごく小片のため口径等は不明。口縁内面に厚く降灰がみられる。

23は鉢。口縁から体部中程の破片である。口縁端部は平らに納められ、口縁下外面には横方向のナデ成形が施されている。復元口径33cm程である。

24〜27は山茶碗窯系捏鉢。24は口縁から体部下半の破片で直接接合しない破片を含め10片が出土している。体部下半に荒いヘラ調整が施されている。復元口径30cm程である。25〜27は小片のため口径等は不明。口縁端部は丸く納められている。

土壌22 (図46)

土壌22はB-2グリットで検出された東西75cm、南北1.2m、深さ80cm程の土壌で、東側は土壌21と一部切り合っている。覆土上層は炭化物を多く含んだ軟弱な褐色粘質土が堆積し、底部近くに20cm程の有機質腐植土の堆積がみられた。

土壌23 (図46)

土壌23は2区、B-5グリットで検出された土壌であるが、そのプランはやや変則的で覆土中から建物15を含む3群の礎板が検出された。複数の柱穴を掘り抜いてしまった可能性がある。

土壇24・25・26・27 (図46)

土壇24～27は2区南端に検出された土壇である。いずれも切り合いや調査区外へ続いているため全容は不明である。概ね直径1m程の円形ないし不整形円形を呈し、深さは30cm程である。壁の立ち上がりは緩やかでいわゆる掘鉢状を呈している。

溝

溝は調査区北東隅に2m程が検出されたにすぎず、南側は土壇20bと切り合い、北は調査区外へ続いている。幅50cm、深さ20cm程の小規模な溝である。

3面出土の遺物 (図49～55・表25)

3面は前述のごとく2面土丹地葉層下層から3面までに何枚かの遺構構築面が認められたものの面的な広がりとして確認することができなかった。遺物の採り上げに際しては途中で確認した遺構構築面ごとに採り上げた遺物もあるが、全てを明確に分けることができなかった。このため3面から出土した遺物には2面土丹地葉層下層から3面までを一括して扱っている。ただし文中では3面上から出土した遺物を3面出土、2～3面までの遺物を3層出土と表記している。

図49～1は青磁。青磁は図示したもの他、小片を含め蓮弁文の碗が大部分を占め、櫛描文、劃花文の碗は数点しか出土していない。1は櫛描文碗。小片からの復元のため不確かであるが復元口径17.4cm程である。釉は黄緑色を呈し、薄く施されている。2区3面出土。2～10は蓮弁文碗。2～7は幅の広い蓮弁を有するタイプである。口径復元した個体はいずれも小片からの復元である。2は口縁から体部下半の破片で、釉は淡青緑色を呈し、厚く施されている。復元口径16cm。1区3層出土。3は口縁部の破片。釉は淡青灰色を呈している。復元口径16.0cm。2区3層上層出土。4は口縁から体部下半の破片で、釉は暗緑色を呈し、厚く施されている。2区3層上層出土及び2面柱穴で採り上げた破片が接合した。5・6はいずれも釉は暗緑灰色を呈し、厚めに施され貫入が多い。5はB-2グリット3層及びB-2グリット3面から出土した破片が接合した。6は1区3面及び3層から出土した破片が接合した。7の釉は淡青緑色を呈している。1区3層出土。8は幅の狭い蓮弁文碗の口縁部の破片。釉が厚く施され、蓮弁文は不明瞭である。胎土は淡赤灰色、釉は黄緑色を呈している。復元口径15.4cm。1区3層出土。9・10は蓮弁文碗の底部片。9は復元高台径4.7cm。1区3面出土。10は内底面にヘラ先の先で突ついたような文様が施され、釉は高台際まで施され高台内部は露胎である。高台径4.5cm。1区3面出土。11は無文の腰折れ碗。同一個体と思われる破片が4点出土しているが直接接合しない。釉は青緑色を呈し、全体に厚く施されている。直接接合しないため不正確であるが復元口径9cm、復元高台径4.6cm。1区3層出土。

12は劃花文碗。釉は青緑色を呈し、全体に厚く施されている。内面にわずかに劃花文が認められる。2区3層上層出土。13・14は鉢。13は口縁部から高台際までの1/5程を遺存する破片である。口縁端部をわずかに外方へ引き出している。釉は青緑色を呈し、厚く施され外面にわずかに蓮弁文

が認められる。復元口径13.5cm。1区3層出土。14は縁折れの鉢。釉は暗緑色を呈し、厚く施され、内面にわずかに蓮弁文が認められる。B-3グリット3面及びD-2グリット3面から出土した破片が接合した。復元口径13.4cm。

15~23は白磁。15~17は内面に印花文を施した碗。いずれも釉は白濁色を呈し、薄く施されている。

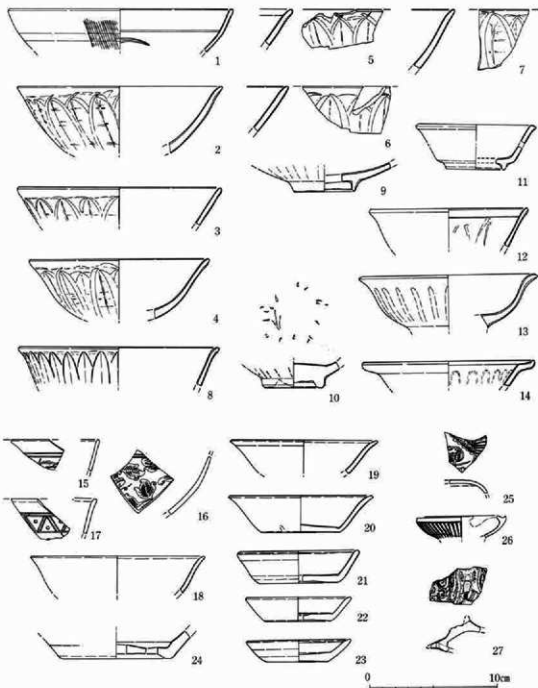


図49 3面出土の遺物(1)

る。15・18は同一個体と思われる。内面に広葉文を捺し、体部上方に2本の条線を施している。2区3層出土。17は鋸歯状の幾何学文の上下を界線で区切り中に珠文を捺している。2区3面出土。

18は口元の碗。釉は青味を帯びた白濁色を呈し、光沢がある。復元口径13.5cm。2区3面出土。

19～23は口元の皿。いずれも釉は透明感のない白濁色を呈している。19は口縁部の小片で、復元口径11.3cm。20は口縁から底部にかけて1/2程を遺存する破片である。釉は底部際まで施され口縁部は強く外反している。復元口径10.2cm。21は口縁部の遺存率は低いが底部の1/2程を遺存する破片である。厚手で直線的に立ち上がり、釉は厚く体部下半まで施され底部は露胎である。復元口径9.3cm。22は1/3程を遺存する破片である。釉は斑があり薄く、底部まで施されている。復元口径8.1cm。23は略完形の個体である。釉は薄く、底部まで施されている。口径8.1cm。19、20、23は1区3面、21は2区3面、22は1区3層出土。

24～27は青白磁。24は梅瓶の底部。復元底径8.6cm。2区3層上層出土。25は合子の蓋、26は合子の身。いずれも小片である。1区3面出土。27は菩薩像と思われる。小片のため全容は不明であるが、胸部あたりの破片で三道、要路、天衣が認められ、手の部分を欠失するが胸の前で合掌する姿を表している。外周には渦巻き状の光背が表されている。表、裏及び外周部を別々に型起こしたものを張り合わせている。釉は淡緑色を呈し、厚く施されている。1区3層出土。

図50-1～4は瀬戸。1は入子。完形品である。口径3.6cm、底径3.1cm、器高0.6cmの小品である。底部はヘラ調整が施されている。1区3層出土。2～4はおろし皿。2は細かく割れた破片が6片接合し2/3程に復元された個体である。破片は2区3層及び3面に広く散らばって出土している。口縁端部を内側に引き出し、底部はヘラ調整が認められる。口径15.3cm、底径10.0cm、器高3.7cm。3は口縁から底部付近の破片である。内底面にわずかにおろし目が認められる。口縁部は玉縁状に肥厚し体部は直立気味に立ち上がる。復元口径18.4cm。2区3層出土。4は底部片。おろし目は弱く釉は荒れている。2区3層上層出土。

5～9は粗胎の山茶碗。7aと7b及び8と9は直接接合しなかったが同一個体と思われる。いずれも砂粒を多く混入し5、6は硬質、7、8、9はやや軟質の製品で、高台には靱底が認められる。5は口径13.6cm、高台径6.7cm、器高5.8cm。2区3層出土。6は口径14.0cm、高台径5.9cm、器高5.2cm。1区3層出土。7aは口径15.8cm、7bは高台径6.5cm。いずれも2区3面出土。8は口径16.0cm、9は高台径6.3cm。いずれも1区3面出土。

10は胎土精良な山皿。1/4程遺存する破片である。口縁部に歪みが認められ復元口径は不正確であるが8.5cm程、底径6.3cm、器高1.0cm。2区3層上層。11は早島式土器。高台部の破片で丸味の強い体部に小さな高台が貼り付けられている。二次焼成のためか割れ口を含め全面が黒色になっている。高台径4.0cm。2区3層上層出土。12は瓦器。輪花形を呈し、内面に暗文がわずかに認められる。2区3層上層出土。13・14は伊勢系土鍋。口縁部の小片である。13は口縁端部の折り返しが三角形を呈している。2区3層上層出土。15はとりべと思われるかわらけの小片。溶融物が全体に付着している。2区3層上層出土。

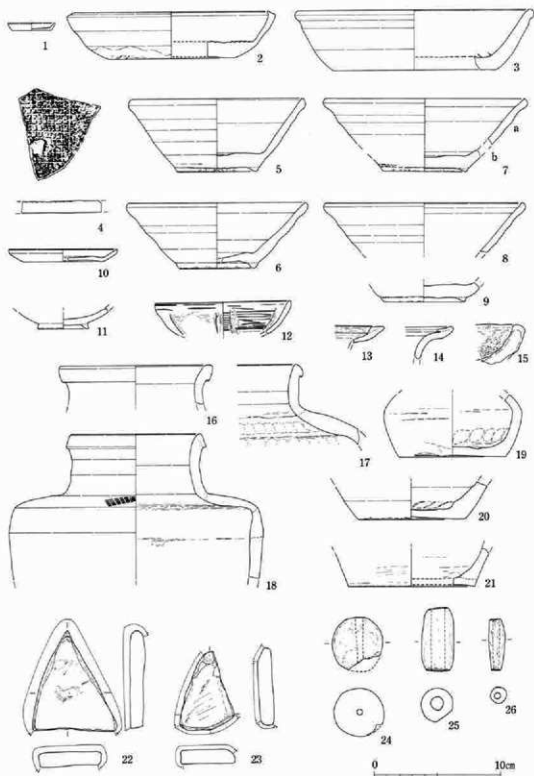


図50 3面出土の遺物(2)

16～23は常滑。16・17は壺の口縁部片。口縁端部をわずかに外方へ肥厚させている。いずれも1区3層出土。18は壺の口縁部から頸部にかけての破片で3片が接合した。頸部付け根付近に押印が認められる。復元口径10.2cm。1区3層上層から3面にかけて出土した破片が接合した。19は高口壺。頸部から口縁部にかけて欠失するが1/2程を遺存する破片。1区3層出土。20・21は壺。底部片。1区3面出土。21・22は磨減痕のあるいわゆるスリ常滑。23～25は土鍾。

図51は常滑。1～9は甕の口縁、10は底部片である。1は縁部部が幅広く頸部に密着してしまっている。1区3面出土。2は縁部部が狭く下方にわずかに引き出されている。1区3層出土。3～5は縁部部がやや幅広く上下に大きく引き出されている。3は2区3層上層、4は1区3層、5は1区3面出土。6は縁部部が狭く上方に引き出されている。1区3層出土。7は縁部部がやや狭く上下に引き出されている。1区3面出土。8は小片であるが縁部部は直立気味に上方に引き出されている。2区3層上層出土。9は唯一口径が復元できた個体である。縁部部はやや幅広く上下に引き出されている。復元口径33cm。1区3層出土。10は底部片。復元底径23cm。2区3層上層出土。

11～22は鉢。11～14は口縁部の小片である。11・12は口縁端部がやや丸味があるがほぼ平らに納められ、13・14は口縁端部のナデ成形のため上面がやや窪み外方へ張り出し気味になっている。11は2区3層上層、12は1区3層、13は2区3面、14は2片が接合している。1区3層及び3面出土。15は口縁部から体部下半の破片で1/5程を遺存する個体である。口縁端部は丸く納められ片口部を遺存している。内面には降灰が厚くかかり押印が認められる。16は15と同一個体と思われる底部片で1/2程を遺存する個体である。内面に厚く降灰がかかる。底径は16.7cmである。底部片から考えると15の口径は片口部を含む破片のため歪みがあり本来より小さく復元されていると考えられる。いずれも2区3層上層出土。17は口縁部から体部中程までの破片である。口縁端部はやや窪んでいる。復元口径25cm。1区3層出土。18は口縁部の破片。口縁端部は丸く納められている。復元口径22cm。19～22は鉢の底部。いずれも内面は良く磨減している。19は8片の破片が接合し、内面上方が一様に黒色に変色している。底径12.9cm。1区3層出土。20は復元底径14.2cm。2区3層上層出土。21は底径15.6cm。2区3層上層及び3面出土の破片が接合している。22は2区3面出土。

図52-1～12は山茶碗窯系埴鉢である。1～5は口縁部片。小片のため口径等は不明である。1は口縁端部は丸く納められ外面口縁下方のナデ成形のため口縁端部は外方へ突出気味になっている。2片が接合し1区土丹層及び2区3面から出土した破片が接合した。2は口縁端部は丸味が少なくやや平らに納められている。1区3層出土。3・4は口縁端部が丸く肥厚気味になる。いずれも1区3層出土。5は2区3層出土。6は底部片。小片のため底径等は不明。薄手で硬質な製品である。7は3片が接合し口縁から体部下半まで1/3程を遺存する破片である。口縁は丸く肥厚気味になり、口縁付近には降灰が認められ、体部下半は横方向のヘラ調整を施している。復元口径18.8cm。2区3層出土。8は口縁から高台まで遺存する破片である。口縁は体部に比べ薄く、丸く納められている。復元口径21.8cm、高台径10.2cm、器高8.9cm。2区3面出土。9は口縁から体部中程までの破片である。口縁端部は丸く納められている。B-3グリット2面土丹層中及びC-3グリット

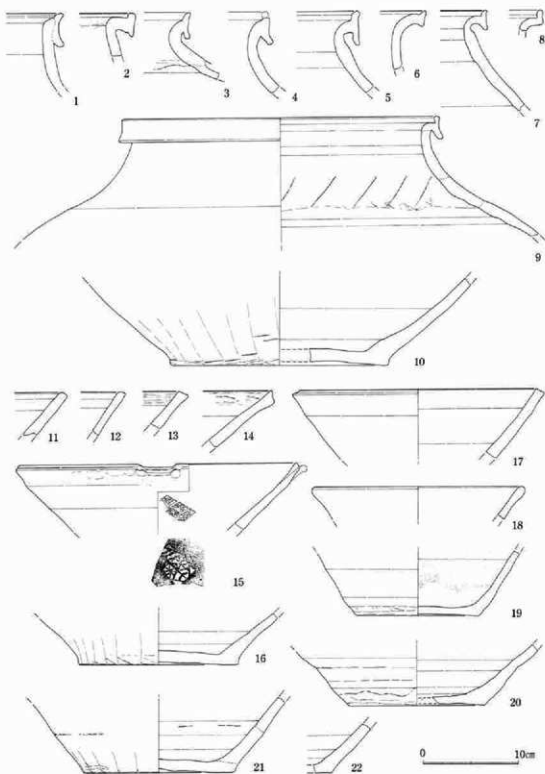


図51 3面出土の遺物（3）

3層から出土した破片が接合している。復元口径31.0cm。10は口縁部から体部下半にかけて6片が接合した。口縁から体部中程にかけて厚く降灰が認められ、釉溜まりが認められる。復元口径31.1cm。11は17片が接合し略完形に復元された個体である。接合した破片をみると3層上層から3面まで調査区内の離れたところから出土し破片が接合している。口径28.7cm、高台径12.8cm、器高12.3cmである。12は底部の破片。体部下半にはヘラ調整を施している。復元高台径13.7cm。

13～19は手焙り。手焙りの出土量は少なく口径等を復元できたものは2点にすぎない。13はかわ

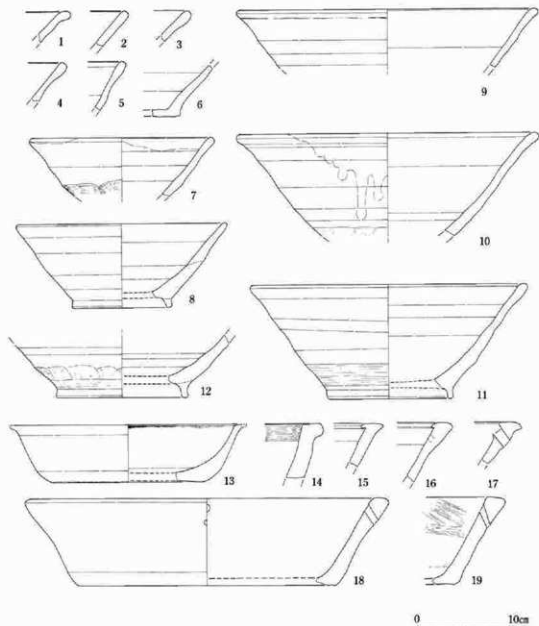


図52 3面出土の遺物(4)

らけ質の手培りである。口縁端部を欠失するが1/2程を遺存する個体である。底部からなだらかに立ち上がり口縁端部は外方に引き出されている。口縁内側は細く帯状に黒色に変色している。口縁端部を欠くが口径は25cm程である。復元口径15.9cm、器高6.2cm。1区3層出土。14~19は鉢形の手培りである。14~17は口縁部の小片のため口径等は不明。14は口縁端部を厚く外方へ張り出し内面上方は横方向のナデ成形を施している。1区3層出土。15~17は口縁端部が肥厚気味になり内側へわずかに飛び出している。15、17は1区、16は2区3面出土。18は復元口径37.1cm、底径27.0cm、器高9.3cm。1区3面出土。19は2区3面出土。

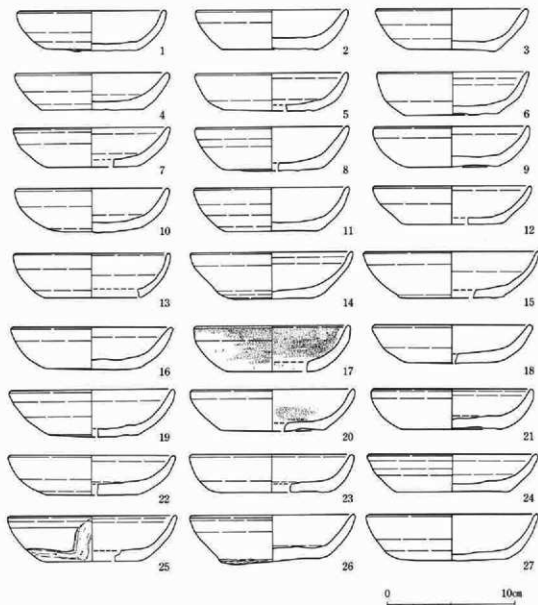


図53 3面出土の遺物 (5)

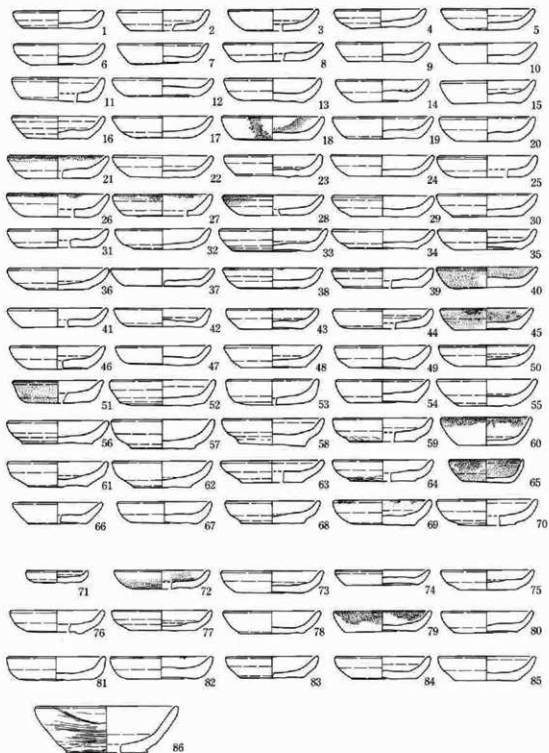


図54 3面出土の遺物 (6)

図53・54はかわらけ。全て轆轤成形の製品で手捏ね成形の製品は一点も含まれていない。小型は口径7～8cm程で器高が低く側面観が丸味のある器形のものや底部がやや高台状を呈し外反気味に立ち上がるものが多く、肉厚が薄く深い器形のもの少ない。また直立気味に立ち上がる器形ものみられない。中型の図54-86は直線的に開き異質な感じの器形である。大型は口径12～13.5cm程で器高の低いものが多く側面観は丸味があり体部中程に弱い稜がみられるものもある。

図53	口径	底径	器高	図53	口径	底径	器高	図53	口径	底径	器高
1	11.4	7.1	3.1	10	11.3	7.2	3.5	19	12.7	7.1	3.7
2	11.6	7.4	3.1	11	11.9	7.3	3.5	20	12.7	8.2	3.3
3	11.7	6.9	3.2	12	12.2	7.7	3.6	21	12.3	7.8	3.2
4	11.7	7.9	2.9	13	12.1	7.6	3.5	22	12.7	7.7	3.2
5	11.7	7.3	3.0	14	12.5	6.7	3.7	23	12.6	8.5	3.0
6	11.7	7.3	3.4	15	13.6	8.3	3.6	24	13.1	8.6	3.1
7	12.0	7.1	3.2	16	12.4	7.2	3.3	25	13.1	7.6	3.7
8	12.2	7.6	3.5	17	11.9	7.0	3.6	26	12.7	7.8	3.7
9	12.0	7.2	3.2	18	12.2	7.0	3.1	27	13.2	8.3	3.7
図54	口径	底径	器高	図54	口径	底径	器高	図54	口径	底径	器高
1	6.7	5.6	1.4	30	7.7	5.4	1.8	59	7.6	5.1	1.9
2	7.0	5.6	1.6	31	7.7	6.0	1.5	60	6.9	4.0	2.2
3	6.9	4.3	1.7	32	7.7	4.4	1.6	61	7.6	4.7	2.0
4	6.9	4.3	1.5	33	8.1	5.8	1.8	62	7.6	4.4	2.1
5	7.0	4.6	1.7	34	7.9	5.4	1.5	63	7.9	4.7	1.8
6	7.0	4.4	1.7	35	7.4	5.3	1.6	64	7.6	5.1	1.7
7	7.1	4.5	1.6	36	7.7	4.3	1.7	65	5.7	3.8	1.8
8	7.2	5.7	1.5	37	8.0	5.8	1.4	66	6.9	4.6	1.7
9	7.2	5.6	1.5	38	7.6	5.0	1.8	67	7.2	5.0	1.8
10	7.5	5.6	1.6	39	7.8	6.2	1.6	68	7.1	5.0	1.8
11	7.0	5.6	1.8	40	7.7	5.0	1.6	69	7.4	4.9	2.0
12	7.6	5.6	1.4	41	7.6	5.6	1.5	70	7.6	4.5	2.1
13	7.4	4.8	1.7	42	7.4	5.8	1.5	71	7.4	3.5	1.0
14	7.6	4.5	1.7	43	7.1	4.9	1.6	72	7.4	4.6	1.5
15	7.7	5.2	1.7	44	7.6	4.9	1.6	73	7.3	5.2	1.7
16	7.1	4.7	1.8	45	7.1	5.2	1.7	74	7.3	5.6	1.2
17	7.8	4.0	1.7	46	7.3	4.5	1.9	75	7.6	4.7	1.6
18	7.7	5.9	1.8	47	7.2	4.9	1.5	76	7.7	4.2	1.8
19	7.7	5.4	1.7	48	7.4	5.1	1.8	77	7.7	5.3	1.8
20	7.8	4.8	1.9	49	7.3	5.2	1.8	78	7.5	5.0	1.8
21	7.7	4.9	1.8	50	7.3	4.7	1.7	79	7.5	5.5	1.7
22	7.6	4.8	1.7	51	7.0	4.8	1.8	80	7.5	4.8	1.7
23	7.3	5.6	1.6	52	8.0	4.6	2.0	81	7.4	5.7	1.9
24	7.9	5.3	1.7	53	7.0	4.6	2.0	82	7.8	5.3	1.8
25	7.5	5.7	1.7	54	7.1	5.2	1.8	83	7.5	4.9	1.7
26	7.8	5.0	1.9	55	7.6	4.1	2.1	84	7.3	5.0	1.8
27	7.6	5.6	1.8	56	7.6	5.5	1.8	85	7.4	4.8	2.0
28	7.7	4.9	1.7	57	7.7	4.8	2.3	86	11.0	6.3	3.7
29	7.8	5.1	1.7	58	7.8	5.2	2.1				

表25 3面かわらけ計測表(2)

(単位: cm)

図55は石製品である。1は滑石鍋の転用品。鍋の口縁部から体部にかけて長方形に切り取り、鍋の部分を削り落として端部に8mm程の穿孔を施している。温石であろう。長さ10.7cm、幅5.4cm、厚さ1cm程で片面（鍋の内面側）に釘状の先端の尖った工具で「花押状の線刻」と「十一月廿六日」と日付が刻まれている。持ち主もしくは製作者（鍋を転用した二次加工品であり両者は同一の可能性もあるが）と製作日を記したものであろうか。2は硯。長方形の陸部のみの破片である。3～5は砥石。3は両端を欠失するが幅6cm、厚さ4.5cm程の中型の荒砥で3面に磨減痕が認められる。4・5は幅4cm、厚さ7mm程の小型の仕上げ砥である。4は2面に、5は片面を欠失し1面しか確認できないが磨減痕が認められる。6はいわゆる土丹（破砕泥岩）を円盤状に加工した製品で両面に線刻を施している。厚さ1.5cm、直径4.5cm程の円盤状に土丹を削り、片面には車輪状に八角形を描き中心から放射状に線を刻んでいる。片面はササの葉に似た弧を描いた線を3対描きその上方に文字とも模様ともつかない線を刻んでいる。用途は不明である。

礎 板

今回の調査で検出された礎板は419枚にのぼり、腐食の激しいものは調査時に確認するとどましたがそれ以外は全て採り上げ接合関係を確認した。接合関係等は遺構の項で述べたが礎板のなかには加工痕や建築部材の一部と思われるものが含まれている。建築部材の転用の際、切断や縦に



図55 3面出土の遺物（7）

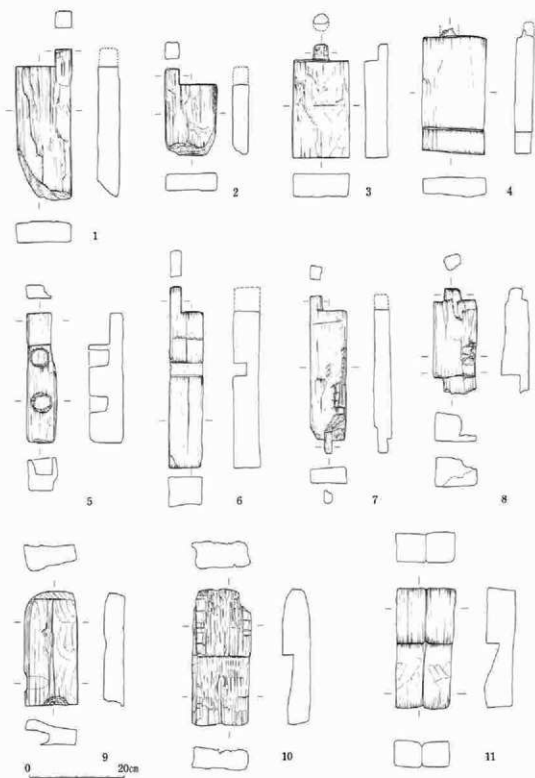


图56 石板实测图

裂かれたりして全容がはっきりしないものも多いがこれらの代表的なものを図56に示した。

1は建物13-1検出の礎板。片面は削り痕が認められるがもう片面は縦に割り裂いたままである。本来はもう少し太い材かもしれない。一端は弧を描くように削られもう一端は杓状の突出が残されている。2は建物9-3検出の礎板。やはり一端に削りがみられ一端に杓状の突出が残されている。3は建物としては復元されなかった柱穴141-2検出の礎板。半分に割り裂かれているが一端に断面円形の杓状の突出が残されている。扉の軸のような部材であろう。4も建物として復元されなかったが柱穴18-5検出の礎板。扉の軸のような杓状の突出が残されている。5は建物17-5検出の礎板。3×3cm程の角材にはほぼ円形に近い杓穴が穿たれている。6は建物6-7、7は建物としては復元されなかったが3と同じ柱穴141-1検出の礎板。8は柱穴145検出の礎板。3×4cm角の材の一端に断面円形に近い杓状の突出が残されている。9は柱穴341検出の礎板。一端に円形に近い杓穴が認められる。10は建物2-17、11は建物6-6検出の礎板。それぞれ杓状の切り取りや継ぎ手状の削りが残されている。

第4節 銭

本調査で出土した銭貨の総数は97枚である。そのうち銭種の判別可能なものは76枚、判別不能なものは21枚である。出土層位、場所及び銭種等は表27・28に示した。また銭種の判別可能なものは図57～59に示した。銭種の判別可能な76枚・23種のうち寛永通宝は1枚、唐の開元通宝は5枚、北宋銭は68枚、南宋銭は2枚である。出土状況は各面を通して鑄銭等のまとまりをみせるものではなく、皇宋通宝が12枚、元豊通宝、元祐通宝がそれぞれ10枚、開元通宝・至道元宝がそれぞれ5枚、それ以外は数枚ずつといった割合で2・3面ではほぼ同じ傾向を示している。

銭 種	1 面		2 面		3 面		他	合計	銭 種	1 面		2 面		3 面		他	合計
	面	違	縁	層	面	違				面	違	縁	層	面	違		
開元通寶		1			1	1	2	5	治平元寶				1				1
太平通寶						1		1	治平通寶	1							1
至道通寶			4		1			5	熙寧元寶			2		2			4
咸平元寶		1			1			2	元豊通寶			3	1	2	3	1	10
景德元寶					2	1		3	元祐通寶			2		2	3	1	10
祥符元寶						1		1	紹聖元寶	1			1		1		4
祥符通寶			1		1			2	龍宋元寶						1		1
天聖元寶	1			1			1	3	政和通寶			2		1			3
明道元寶		1						1	紹興元寶					1			1
皇宋通寶	1	2	1	3	2	1	2	12	嘉泰通寶					1			1
至和元寶			1					1	寛永通寶							1	1
嘉祐通寶			1					2	不 明	1		4			10	6	21
小 計	1	3	10	2	8	8	2	39	小 計	3		11	4	5	13	13	58
									合 計	4	3	21	6	13	21	15	97

表26 銭出土枚数一覧表

No.	銭種	時代	初鋳年	字体	出土層位	備考	No.	銭種	時代	初鋳年	字体	出土層位	備考
1	開元通寶	唐	621	新書	1面土4		39	嘉祐通寶	北宋	1056	篆書	3層	
2	開元通寶	唐	621	新書	2面柱穴	「・」	40	治平元寶	北宋	1064	楷書	2面柱穴	
3	開元通寶	唐	621	楷書	3層		41	治平通寶	北宋	1064	楷書	1面	
4	開元通寶	唐	621	楷書	3面柱穴		42	熙寧元寶	北宋	1068	楷書	2面孔	孔
5	開元通寶	唐	621	楷書	3面柱穴	「範」	43	熙寧元寶	北宋	1068	楷書	2面	
6	太平通寶	北宋	976	楷書	3層		44	熙寧元寶	北宋	1068	楷書	3層	范
7	至道通寶	北宋	995	行書	2層		45	熙寧元寶	北宋	1068	楷書	3層	范
8	至道通寶	北宋	995	行書	2層		46	元豐通寶	北宋	1078	行書	2層	
9	至道通寶	北宋	995	行書	2層		47	元豐通寶	北宋	1078	篆書	2層	
10	至道通寶	北宋	995	楷書	2面		48	元豐通寶	北宋	1078	行書	2面	
11	至道通寶	北宋	995	行書	2面柱穴		49	元豐通寶	北宋	1078	行書	2面	
12	咸平通寶	北宋	998	楷書	2面		50	元豐通寶	北宋	1078	行書	2面柱穴	范・周
13	咸平通寶	北宋	998	楷書	3層		51	元豐通寶	北宋	1078	篆書	2面柱穴	
14	景德元寶	北宋	1004	楷書	2面柱穴		52	元豐通寶	北宋	1078	行書	3層	
15	景德元寶	北宋	1004	楷書	2面柱穴		53	元豐通寶	北宋	1078	行書	3層	
16	景德元寶	北宋	1004	篆書	3層		54	元豐通寶	北宋	1078	行書	3層	孔
17	祥符元寶	北宋	1004	行書	表採		55	元豐通寶	北宋	1078	行書	3面	
18	祥符元寶	北宋	1008	行書	3層		56	元祐通寶	北宋	1086	篆書	2層	范
19	祥符通寶	北宋	1008	楷書	2面	范	57	元祐通寶	北宋	1086	行書	2面	
20	祥符通寶	北宋	1008	楷書	2面柱穴		58	元祐通寶	北宋	1086	行書	2面柱穴	
21	天聖元寶	北宋	1023	楷書	1面		59	元祐通寶	北宋	1086	行書	2面柱穴	
22	天聖元寶	北宋	1023	楷書	2面		60	元祐通寶	北宋	1086	行書	3層	
23	天聖元寶	北宋	1023	楷書	3面		61	元祐通寶	北宋	1086	篆書	3層	
24	明道元寶	北宋	1032	楷書	2面土塊17		62	元祐通寶	北宋	1086	行書	3層	
25	皇宋通寶	北宋	1039	楷書	1面柱穴		63	元祐通寶	北宋	1086	行書	3面	范
26	皇宋通寶	北宋	1039	行書	2面	孔・范	64	元祐通寶	北宋	1086	篆書	3面柱穴	
27	皇宋通寶	北宋	1039	楷書	2面	范	65	元祐通寶	北宋	1086	行書	3面柱穴	孔・周
28	皇宋通寶	北宋	1039	篆書	2面		66	紹聖元寶	北宋	1094	行書	1面	
29	皇宋通寶	北宋	1039	楷書	2面土塊8		67	紹聖元寶	北宋	1094	行書	2面	
30	皇宋通寶	北宋	1039	楷書	2面柱穴		68	紹聖元寶	北宋	1094	篆書	3層	
31	皇宋通寶	北宋	1039	篆書	2面柱穴		69	紹聖元寶	北宋	1094	篆書	3面柱穴	
32	皇宋通寶	北宋	1039	篆書	3層		70	聖宋元寶	北宋	1101	篆書	3層	
33	皇宋通寶	北宋	1039	篆書	3層		71	聖和通寶	北宋	1111	楷書	2面	
34	皇宋通寶	北宋	1039	篆書	3面		72	聖和通寶	北宋	1111	篆書	2面	
35	皇宋通寶	北宋	1039	篆書	3面柱穴		73	聖和通寶	北宋	1111	楷書	3層	
36	皇宋通寶	北宋	1039	楷書	3面柱穴		74	紹興元寶	南宋	1131	行書	3層	
37	至和元寶	北宋	1054	楷書	2層		75	嘉泰通寶	南宋	1205	楷書	3層	「元」・孔
38	嘉祐通寶	北宋	1066	篆書	2面		76	寬永通寶	江戸	1636	楷書	攪乱1	「波」

備考 「」：背文 范：范ズレ 孔：孔エラー 周縁：周縁スリ

表27 出土銭一覧表

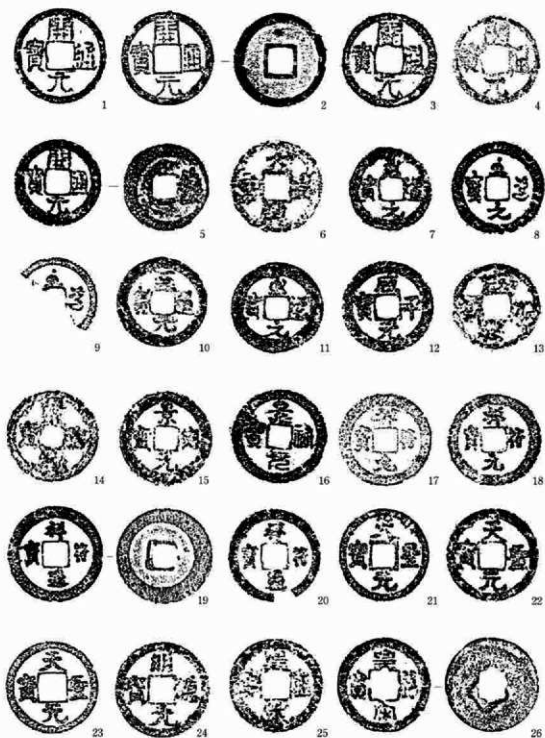


圖57 錢拓影(1)

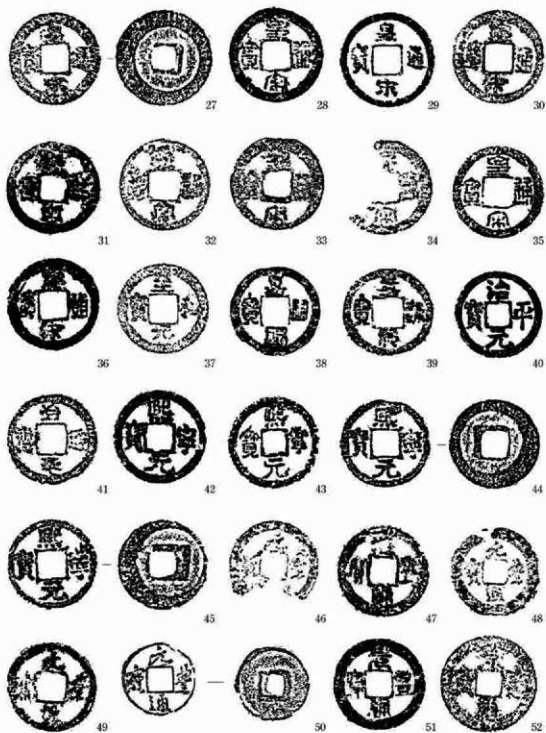


图58 钱拓影(2)

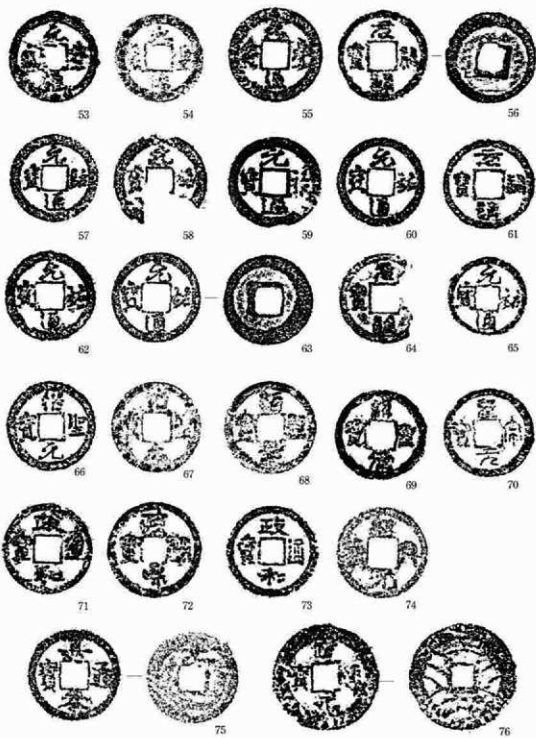


圖59 鼓拓影(3)

第四章 中世以前の遺物

第1節 トレンチ (図60・61)

3面(中世基盤層)の調査終了後、1区に3ヶ所、2区に1ヶ所のトレンチを設定した。トレンチ1はC-4グリットに、トレンチ2・3は1区中央の2区東壁の延長線上に、トレンチ4は2区東壁際南端に設定し、極力上層との関連性を確認できるように努めた。

トレンチ1は、攪乱1bで検出された木製の基礎を避けて掘り下げたため岩盤まで確認できた範囲は底部で東西50cm、南北1m程にすぎない。中世基盤層から90cm程までは攪乱を受けており遺物が採取できたのは攪乱底部から岩盤までの60cm程である。中世基盤層上面(海拔4.4m)から40cm程は締まりの良い褐色粘質土(21)が堆積し、その下層は砂と粘土がブロック状に混入した不均一な堆積層(22)が、その下層に締まりのない軟質な褐色粘土(22')が堆積している。海拔3.7mあたりから青灰色砂を多く混入する粘質土(24)が20~30cm程堆積し、その下層は2層程に細分できるが破碎した貝殻粒を多く混入した粘土層及び青灰色砂層(26)が、岩盤直上は水磨した小土丹と貝殻粒を多量に混入した青灰色砂(27)が15cm程堆積している。

トレンチ2は、東西2m、南北2.3mで設定したが耕土の関係で東西方向の幅を狭めたため底部では東西70cm、南北1.7m程を確認したにすぎない。堆積状況はトレンチ1と良く似ており締まりのある褐色粘質土(21)の下に軟質な粘土層(22・22'・22'')が堆積し、その下に青灰色砂や有機質腐植土を混入する粘土層(23)が堆積し、岩盤直上に破碎した貝殻粒を混入する砂層(30)が薄く堆積している。トレンチ1では南北方向の堆積状況が確認できなかったがトレンチ2の南北方向の砂等を混入する粘土層の堆積状況は北へ向かって流れ込んでいるようである。

トレンチ3は、東西2.3m、南北1.3mで設定し、トレンチ1の東西方向とトレンチ2の南北方向の土層の傾向を確認した。中世基盤層である締まりのある褐色粘質土(21)の堆積はやや薄く20~30cm程である。軟質の粘土層(22')はあまり変わらず東西、南北方向ともほぼ水平な堆積をしている。その下層に植物遺体など有機質や砂を多く混入する粘土層(23)が西に向かって厚くなるように堆積し、その下層は砂を多く混入する層(24)が東に向かって厚く堆積している。岩盤直上には破碎した貝殻粒を多く混入する青灰色砂(27)が10cm程堆積し、その上層に有機質腐植土を多量に混入する茶褐色粘土(25)が堆積している。

トレンチ4は2区東壁南端に東西50cm、南北1.6mのトレンチを設けたが、予想以上に砂の堆積が厚く、湧水のため道路側の壁が崩落する危険があり範囲を狭め岩盤まで掘り下げられたのは50cm四方にすぎない。中世基盤層である締まりの良い褐色粘質土の堆積は確認されず、砂を多く混入する褐色粘質土(26)が40cm程堆積し、その下層に青灰色砂(27)、黄色砂(28)、褐色砂(29)が50cm程堆積し、岩盤直上に細かな貝殻粒を混入する灰白色砂(31)を数センチ程挟んで破碎した貝殻粒を多量に含む砂(30)が堆積している。

いずれのトレンチも岩盤上の海拔は約3.1mで、ほぼ平坦面をなしている。

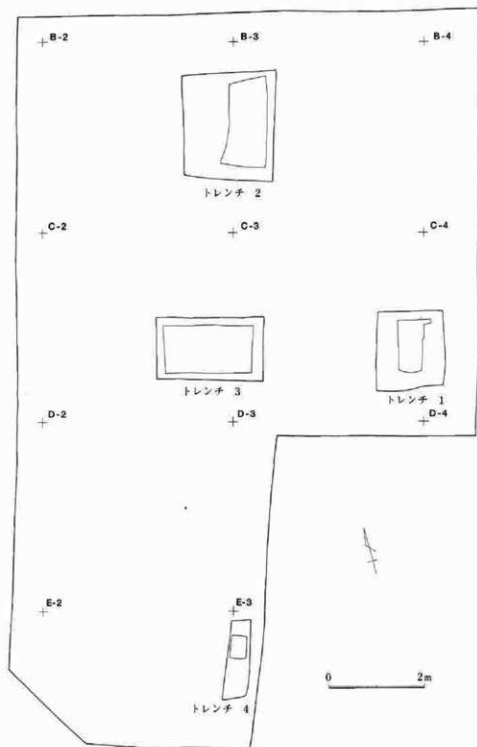


図60 トレンチ配置図

中世基盤層以下の状況を4ヶ所のトレンチで確認したがいずれのトレンチでも明確な遺構は検出されなかった。狭い範囲ながら土層の堆積状況を見ると中世基盤層以下の堆積は本調査区の南から北へ、及び東から西にかけて傾斜している傾向がみられる。住居址などが検出されている長谷小路南遺跡（調査地点5）から砂丘が稲瀬川に向かって緩やかに下っており、調査地点6では海拔約1.8m程で波蝕台岩盤上に遺物の散布が確認されている。また調査地点3、8などでは中世以前の遺構が確認されており本調査地点は砂丘の西端の稲瀬川に沿って入り江状に入り込んだ氾濫源的な後背湿地が遅くまで残されていたと考えられる。

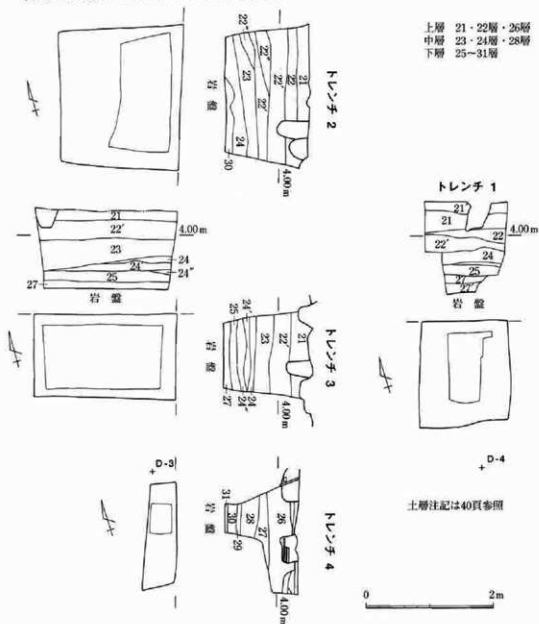


図51 トレンチ実測図

第2節 中世以前の遺物

中世以前に属する遺物は、各トレンチの他、3面検出の柱穴等から主に出土しているが、その多くは細片であった。破片総数567片の内訳は表28の通りである。トレンチ3からの出土数が卓越しており、しかも古手の遺物がやや集中している。一方、トレンチ1、2出土片は殆どが奈良・平安時代に属するものであった。しかし出土状況は層位的には良好でなく、また、様相は概観において相似していると見なされるので、図示に際してはそれらを一括してまとめ、大まかな時間軸に沿って記述する。なおトレンチの出土層位の表記は、厳密な遺物の採り上げができなかったので、概ね図61、図22に示した土層図で21・22・26を上層、23・24を中層、25・29・30・31を下層としている。

土師器環類 (図62)

1は赤彩環。底部小片。内面に放射状と思われる暗文が施されるが不明瞭である。外面はナデ。胎土は砂粒、輝粒、白針を含み、焼成は良好。彩色は明赤褐色で内面にのみ施され、素地は茶灰色を呈する。トレンチ3上層出土。

2は須恵器環身模倣の黒彩環。残存率1/8で復元に不安がある。口径11.0cm。胎土は砂粒、黒色輝粒、白針を含み、焼成は非常に良い。彩色の残りが悪く、淡橙褐色の素地があらわになる。トレンチ3岩盤直上出土。

3は黒彩の碗であろうか。残存率底部1/2。復元口径6.6cm。外面は横位ヘラケズリだが、調整痕は不明瞭。内面は多方向のヘラミガキを密に施している。胎土は砂粒、輝粒を含み、焼成は良好。素地の色調は茶灰色を呈する。トレンチ3上層出土。

4は赤彩環。残存率1/6。復元口径13.6cm。口唇内側に明瞭な沈線が巡り、つまみ上げられて断面三角形になる。胎土は砂粒、輝粒を含み、焼成は良好。素地は茶灰色で、赤褐色の彩色が底部を除くほぼ全面に施され、外底は黒色を呈する。2区1面柱穴出土。

	トレンチ1		トレンチ2		トレンチ3		そ の 他			計		
弥生後期 古墳前期			1		8		3			12		
	土師	須恵	土師	須恵	土師	須恵	土師	須恵	灰釉	土師	須恵	灰釉
古墳後期	1				30		5	1		36	1	
奈良平安 時代不明	32	13	60	9	191	10	127	47	10	410	79	10
	9		6	1	2		1			18	1	
計	42	13	67	10	231	10	136	48	10	476	81	10
	55		77		241		194			567		

*数字は単純破片数である。

「その他」には、主に3面中世遺構覆土より出土した遺物が含まれる。

土師 … 土師器、 須恵 … 須恵器、 灰釉 … 灰釉陶器

表28 中世以前の遺物出土割合一覧表

5も赤彩環。残存率1/12。復元口径12.2cmと、やや小振りになる。口縁部は外反し、口唇内側に弱い沈線が巡る。胎土は砂粒、白色粒、茶褐色粒、輝粒を含むが緻密で、焼成は非常に良い。茶灰色の素地の上に赤褐色の彩色を施す。トレンチ3上層出土。

6は残存率1/9。復元口径15.2cm。体部外面は横位ヘラケズリだが調整痕は不明瞭。内面は摩滅して滑らかになっている。胎土は砂粒、金雲母、黒色輝粒をやや多く含む。焼成は良好。色調は淡白橙色を呈する。2区3面柱穴出土。

7は残存率1/9。復元口径11.8cm。胎土は微砂粒、黒色輝粒を少量含む。焼成は良好。色調は黄橙色を呈する。トレンチ3上層出土。

8は残存率1/9。復元口径11.2cm。口縁部が強く外反し器肉は薄い。体部外面のケズリは不明瞭。胎土は小石、砂粒、黒色輝粒を含むが密で、焼成は良好。色調は淡橙褐色。トレンチ3上層出土。

9は残存率1/3。復元口径12.9cm、器高3.9cm。底部は丸底で口縁部は短く直立、口唇が外反する。体部外面は横位の、底部は一定方向のヘラケズリ。内面は摩滅してやや荒れる。胎土は砂粒、黒色輝粒、白色粒を多く含む。焼成は良好。色調は橙褐色を呈する。トレンチ3下層出土。

10は残存率1/8。復元口径14.5cm。体部外面は横位ヘラケズリ。胎土は赤褐色微粒を含み、焼成は良好。色調淡茶褐色。トレンチ3上層出土。

11は残存率底部1/5。復元底径7.8cm。底部糸切り後、その外側1/2と、体部下端を回転ヘラケズリし、内面には残存部内はぼ一定方向の非常に密なヘラミガヤを施して器面調整している。胎土は少量の赤褐色粒、輝粒を含み、焼成は良好。色調は橙色だが、外底は橙褐色、内底は白橙色を呈する。3面方形竅穴建物覆土下層出土。

12は残存率1/5。復元口径13.3cm、底径9.4cm、器高3.4cm。底部は平底で略一定方向ヘラケズリ。体部横位ヘラケズリは器高の1/2の範囲でなされ、口縁部は弱く外反する。内面全体が摩滅して滑らかになっている。胎土は金雲母を多く、微砂粒、黒色輝粒、赤褐色粒を含み、焼成は良好。色調は黄橙色を呈する。トレンチ3上層出土。

13は残存率1/6。復元口径13.0cm、底径8.8cm、器高3.4cm。底部は略平底。体部のケズリは器高の1/2。口縁部は弱く外反する。口縁内側の一部が摩滅し、ススが付着する。胎土は微砂粒、黒色輝粒、赤褐色粒を含み、焼成は非常に良い。色調は白橙色。トレンチ3上層出土。

14は残存率1/6。復元口径13.6cm、底径8.8cm、器高3.6cm。口径・底径比がやや大きい。底部は平底で不定方向ヘラケズリ。体部ケズリは器高の1/2で、口縁部はやや外反する。口縁内側は摩滅し、器表の荒れが目立つ。胎土は黒色輝粒、褐色粒を含む。焼成は非常に良好。色調は橙褐色。トレンチ3上層出土。

15は残存率1/5。復元口径13.6cm、底径9.2cm、器高3.7cm。底部は略平底で不定方向ヘラケズリ。体部ケズリは器高の2/3ほどを占め、口縁部はやや外反気味。口縁内側が摩滅する。胎土は砂粒、金雲母、赤褐色粒を含み、焼成は非常に良好。色調は橙褐色を呈す。トレンチ3上層出土。

16は残存率1/6。復元口径12.0cm、底径8.8cm、器高4.1cm。底部はやや丸みを帯び、体部ケズリは

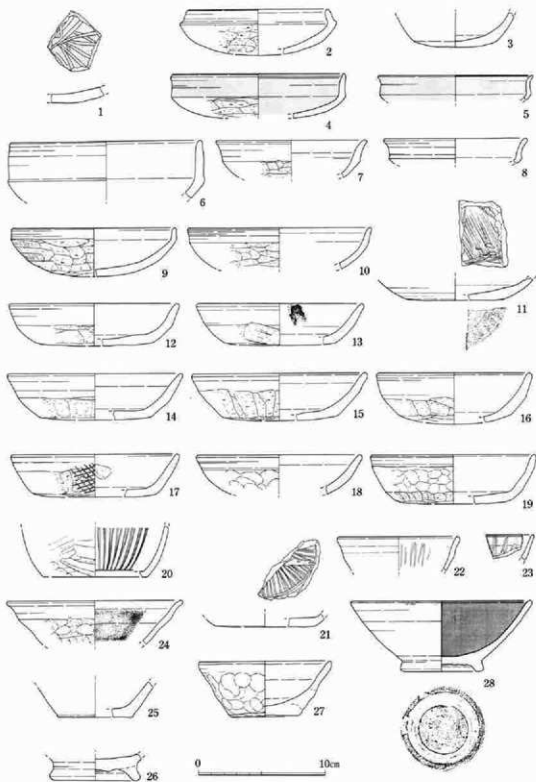


図62 中世以前の遺物—土師器坏類—

器高の1/2弱。口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。胎土は輝粒、赤褐色粒を含み、焼成は非常に良好。色調は淡黄褐色。トレンチ3上層出土。

17は残存率1/9の小片でやや無理がある。復元口径13.2cm、底径9.8cm、器高3.4cm。底部は平底で、体部ケズリは器高の2/3。稜をもたず、口縁部はそのまま直線的に開く。外面にヘラ等で斜格子の刻み目を入れており、内面にはその際の手入れと思われる指頭痕が残る。内面は全体に摩擦して滑らか。内底付近にスラしき物質が薄く付着している。胎土は砂粒、白色粒、金雲母、赤褐色粒を含む。焼成は非常に良好。色調は黄褐色。トレンチ2下層出土。

18は残存率1/8。復元口径12.8cm。体部外面は指頭調整だが、痕跡はあまり明瞭でない。口縁部は小さく外傾し、内側に弱い稜を形成する。胎土は砂粒、輝粒、黒色輝粒、白針、赤褐色粒を含む。焼成は良好。色調は淡橙褐～茶灰色を呈する。トレンチ3上層出土。

19は残存率1/5。復元口径12.9cm、底径8.0cm、器高4.0cm。底部は平底で一定方向ヘラケズリ。体部は全体に内彎気味で、下端に1段の横位ヘラケズリがなされるが、以上には指頭痕が残る。口縁部は幾分外反する。胎土は微砂粒、輝粒、黒色輝粒、赤褐色粒を含み、焼成は非常に良好。色調は黄褐色。トレンチ3上層出土。

20は残存率体部中位以下1/6。復元底径8.4cm。外面はヘラケズリの後にやや粗くヘラミガキされ、内面はヨコナデの後に放射状暗文が施される。胎土は金雲母、赤褐色粒を含み、焼成は非常に良好。色調は茶褐色。トレンチ3上層出土。

21は残存率底部1/3。復元底径7.9cm。外底はヘラミガキ、内底には放射状暗文が施される。胎土は赤褐色粒を含むが緻密。焼成は非常に良好。器表は明茶褐色だが、胎芯は茶灰色を呈する。トレンチ3西方1m程の所(図61 22'層相当)出土。

22は残存率口縁部1/8。復元にやや不安があるが、口径は9.5cm程となる。体部はやや丸みをもって立ち上がり、口縁部は肥厚、外反する。器表が荒れて不詳だが、内外面ヨコナデ、内面には放射状暗文が微かに見える。胎土は微砂粒、輝粒、赤褐色粒を含む。焼成は良。色調は全体に淡灰褐色だが、新しい破断面は橙褐色を呈する。トレンチ1岩盤直上出土。

23は口縁部小片。器厚は口唇に向かってやや減ずる。内外面ヨコナデ。内面に放射状暗文。胎土は赤褐色粒、輝粒をごく少量含む。焼成は非常に良い。器表は茶褐色だが、外面はやや黒変し、胎芯は灰褐色を呈する。25とともに1区3面3面柱穴出土。

24は残存率1/6。復元口径13.7cm。器肉が薄く、体部は直線的に開き、口縁部は外反する。体部外面は横位ヘラケズリだが、中位に指頭痕が削り残されている。内面の口縁以下は黒褐色を呈するが、スではなく、墨液などを溜めたものかとも思われる。胎土は砂粒、金雲母、赤褐色粒を含み、焼成は良。色調は橙褐色。トレンチ3上層出土。

25は残存率底部1/8。復元底径5.8cm。外底回転糸切りで、最後に「ロクロ」から起こした時の工具痕らしきものも見られる。内外面は丁寧なヨコナデ。外面に若干スが付着する。胎土は砂粒、輝粒、黒色輝粒、赤褐色粒を多く含むもので、甕類の胎土に近い。焼成は良好。色調は淡橙灰色。

23と同じ1区3面柱穴出土。

26は高台付坏もしくは碗。残存率底部2/3。復元高台径6.4cm。高台はハの字状に開き、端部は丸く収められる。内面はやや摩滅する。胎土は砂粒、金雲母を多く、白色粒、赤褐色粒を含む。焼成は良。色調は橙褐色を呈する。3面土壌20出土。

27は残存率1/3。復元口径10.3cm、底径5.2cm、器高4.5cm。円盤上に粘土紐巻き上げの痕跡が比較的明瞭である。底部は厚手で平底だが表面が荒れており、調整痕は観察できない。体部は逆ハの字に真っすぐ開く。外面には粗い指頭痕がそのまま残り、口縁部は雑にヨコナデされ歪んでいる。内面はヨコナデだが、内底にヘラナデらしき痕跡も僅かに見られる。胎土は砂粒、黒色輝粒、白針、白色粒、赤褐色粒を多く含む。焼成がやや甘く、体部は茶褐色だが、底部は淡橙色を呈する。2区3面柱穴出土。

28は内面黒色土器碗。完存する高台部及び残存率1/4の口縁部の二片（接合しない）から合成復元した。復元口径14.2cm、高台径6.2cm、器高5.6cm。高台は比較的シャープな矩形を呈してしっかりしており、高台内中央には回転糸切り痕が撫で消されずに丸く残る。体部は緩やかに内彎しながら外に開き、口端部は丸い。碗としてはやや浅い作りである。外面には弱い「ロクロ目」が残る。内面は黒色処理された後、非常によく磨かれているが、上半にはやや粗く横位の細かいミガキ痕が見られる。胎土は砂粒、黒色輝粒、白針、赤褐色粒を少量含む。焼成は良、色調は淡橙褐色。1区3面柱穴出土。

土師器壺・甕類（図63）

1は壺口縁部小片。若干内彎気味に立ち上がり、端部がやや凹む。外側に幅3cm程の粘土帯を貼り付けて複合口縁にしている。外面は、粘土帯部分が横位ハケ目、以下が縦位ハケ目調整で若干のミガキがかかる。内面は丁寧なヘラミガキ。胎土は砂粒、白針をやや多く、金雲母、黒色輝粒、白色粒、赤褐色粒を少量含む粗土。焼成は良。色調は内面が茶褐色、外面は褐色を呈する。トレンチ3上層出土。

2は甕口縁部小片。くの字に屈曲した頸部から、薄くなりながらやや外反気味に開き、口唇は角張って端面に沈線が入る。内面は横位、外面は口唇直下が横、以下が縦位の粗いハケ目調整。胎土は砂粒、白針、黒色輝粒、赤褐色粒を含み、焼成は良好。色調は暗橙褐色を呈する。トレンチ3中層出土。

3は台付甕脚部片。内外面ともハケ目調整、内底部分に指ナデの痕跡が僅かに見られる。胎土は黒色輝粒やや多く、白針を少量含む。焼成は普通。色調は、外面から内底が灰褐色、内面が明橙褐色を呈す。トレンチ2下層出土。

4は残存率口縁部1/12。やや無理があるが、復元口径24.7cmほどになる。外面はヨコナデ、内面はヘラミガキされ、全面に赤彩が施されている。胎土は砂粒、金雲母、白針を含み、焼成は良好。色調は素地が橙褐色、彩色は赤褐色を呈する。トレンチ3下層出土。

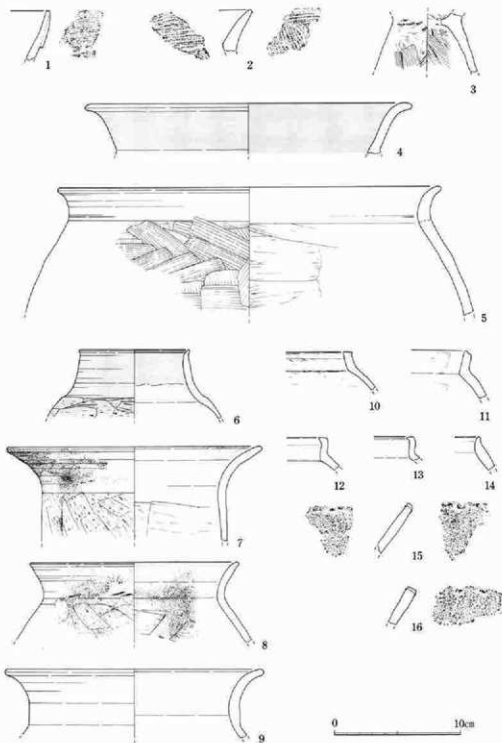


図63 中世以前の遺物—土師器壺・甕類—

5は残存率上半部1/10。やや無理のある復元だが、口径29.8cmほどの球胴型の甕であろう。肩はナデ肩で、口縁部は短く、外反する。体部外面はハケ目、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデ調整。胎土は黒褐色で丸みを帯びた粒径1〜3cmの小石を多量、砂粒、白色粒、輝粒をやや含む。焼成は普通。色調は橙褐色を呈する。トレンチ3下層出土。

6は壺であろう。残存率口縁部1/4。復元口径8.6cm。球形と思われる胴部から口縁部が内傾気味に立ち上がり、口唇は内側に1条の沈線が走り、小さく外反する。胴部外面は横位ヘラケズリ、口縁部外面から内面にかけては強いヨコナデ。外面から口縁部内側にかけて赤彩される。胎土は砂粒、白色粒、赤褐色粒と少量の白針、輝粒を含む。焼成は非常に良い。色調は素地が灰褐色、彩色は赤褐色を呈する。胎土・調整など、「比企型」杯と酷似するものである。トレンチ3下層出土。

7は長胴甕。残存率口縁部1/3弱。復元口径19.8cm。胴部は殆ど膨らみをもたない円筒型と思われる、外面は斜位ヘラケズリ、内面はヘラナデ。口縁部内外はヨコナデで、大きく外反する。胎土は砂粒、黒色輝粒、赤褐色粒を多く含む。焼成は良好。色調は淡褐色だが、外面口縁付近の一部がススけて黒くなる。トレンチ1岩盤直上出土。

8は残存率口縁部1/4。復元口径16.2cm。胴部外面は斜位ヘラケズリ、内面はヘラナデ、口縁内外はヨコナデ。胎土は白色粒、黒色輝粒を少量含む。焼成は良好。色調は胎芯が茶灰色だが、表面は内外とも灰褐色にススけている。トレンチ3上層出土。

9は残存率口縁部1/12。復元口径は20.1cmだが、やや不安。内外面ともヨコナデで、緩やかに外反する。胎土は砂粒、金雲母、黒色輝粒、白色泥粒を多く、白針、赤褐色粒をやや含む。焼成は良好。色調は淡橙〜黄褐色を呈する。トレンチ2上層出土。

10〜16は壺口縁部小片。

10は口縁内傾。内外面横・斜位ナデ。口唇が水平にヘラ切りされるが、外側に突出している。胎土は砂粒、輝粒、黒色輝粒を非常に多く、粘土粒をやや含む。外面の一部が剝離しているが、それほど強い火を受けた様子は見られない。色調は外面が淡褐色、内面が茶灰色、胎芯が灰黒色を呈する。1区3面柱穴出土。

11は口縁外傾。外面ヨコナデ、内面横位ヘラナデ。口唇は斜めにヘラ切りされるが、内面のナデによって端部が小さく突起する。胎土は砂粒、白針、赤褐色粒、黒色輝粒、白色粒を多く含む粗土。焼成は良。色調は褐色だが、外面は黒褐色にススける。1区3面柱穴出土。

12は若干外傾。内外面ヨコナデ。口唇を内側に突出させ、端部を水平にヘラ切りしている。胎土は黒色輝粒を非常に多く、輝粒、赤褐色粒、砂粒を少量含む。焼成は普通。色調は外面が淡橙褐色、内面が灰褐色を呈する。11と同じ1区3面柱穴出土。

13はほぼ直立。内外面ヨコナデ。口唇形態は同前。胎土は砂粒、黒色輝粒を非常に多く含む。二次焼成による変質は殆ど窺えない。色調は赤橙〜黄褐色を呈する。2区3面柱穴出土。

14は口唇がヨコナデによって小さく上方につまみ上げられ、ヘラによる調整はなされない。胎土は砂粒、黒色輝粒を非常に多く、赤褐色粒を少量含む。焼成は良。色調は表面灰黒色、胎芯灰色を

呈する。3面土滴26出土。

15・16は甕類の口縁部。同一個体の可能性もある。小片のため傾きも定かではないが、直線的に伸び、口唇部は角張る。口唇には1.5～2.0cm間隔で丸棒(径4mm程)による「刻み」が入る。内外面ともナデ調整だが、強い火を受けて脆く、器表が荒れて一部剝離している。胎土は砂粒、黒色輝粒を非常に多く、白色粒、小石を少量含む。色調は外面が灰色、内面が赤褐色を呈す。製塩等を用いられたものとも考えられる。15はトレンチ3西方1m程の所(図61 22層相当)から、16はトレンチ3上層から出土。

須恵器(図64)

1は坏身。残存率1/4。復元口径8.0cmと小振りである。受部はごく小さく口縁部はやや角度をもって内傾する。胎土は輝粒を含むが細密。焼成は良好。色調は灰色を呈する。2区3面柱穴出土。

2は坏。残存率1/4。復元口径14.4cm、底径10.3cm、器高3.5cm。体部はハの字型に直線的に開き、口縁部は若干外反する。外底は回転ヘラケズリで、スノコ状の圧痕も見られる。体部内外面はヨコナデ調整。表面に鉄分の噴出かと思われる微黒斑が見られ、外面一部には灰白色の降灰が斑らにかかる。また、内底はやや摩耗する。胎土は微砂粒をごく少量含むが堅緻。焼成は良好。色調は、器表が暗灰色、胎芯が暗赤褐色を呈する。トレンチ2上・下各層出土の3片が接合。

3は坏。残存率体部1/8。復元口径11.0cm。内外面ヨコナデ調整。内面には口縁付近を除いてスズ状の黒色物質がやや厚く付着している。胎土は微砂粒を少々含むが堅い。焼成は良好。色調は暗灰色を呈する。トレンチ2下層出土。

4は坏。残存率底部1/4。復元底径6.1cm。底部はやや上げ底。外底は右回転糸切り。他はヨコナデで、内底がやや摩滅する。胎土は白色粒、砂粒をやや多く含む。焼成は非常に良い。色調は器表が暗青灰色、胎芯が暗赤褐色を呈す。1区3面柱穴出土。

5は碗。残存率1/10。復元口径13.9cm、底径9.4cm、器高5.8cm。径の大きい平底の底部から急角度で体部が立ち上がり、口縁部は心持ち外反気味になる。深い器形である。外底は回転ヘラケズリ、それ以外はヨコナデで、内面口縁下に弱い沈線が1条巡る。口唇と内底外周には焼成時の着着物と自然釉がやや厚くかかっている。胎土は若干の砂粒、白色粒を含むが堅緻で、焼成は良好。色調は器表が暗青灰色、胎芯が暗赤褐色を呈する。トレンチ3上層出土。

6は坏蓋。残存率天井部中位以下1/10。復元口径15.8cm。天井部から緩やかに上反、端部は幾分外反気味で断面三角形に尖る。残存部は総てヨコナデ調整だが、端部の起こしにヘラが鋭く入り込んでいる。胎土は白色粒、白針、輝粒をやや多く含む。焼成は良好。色調は灰色だが、端部外面は重ね焼きにより暗灰色を呈する。1区3面柱穴出土。

7も坏蓋。残存率天井部上半1/6。外面上半は回転ヘラケズリ、他はヨコナデ。胎土は白色粒、白針をやや多く、小石、輝粒を少量含む。焼成良好。色調は若干茶色味を帯びた灰色。6とは同一個体ではない。トレンチ2上層出土。

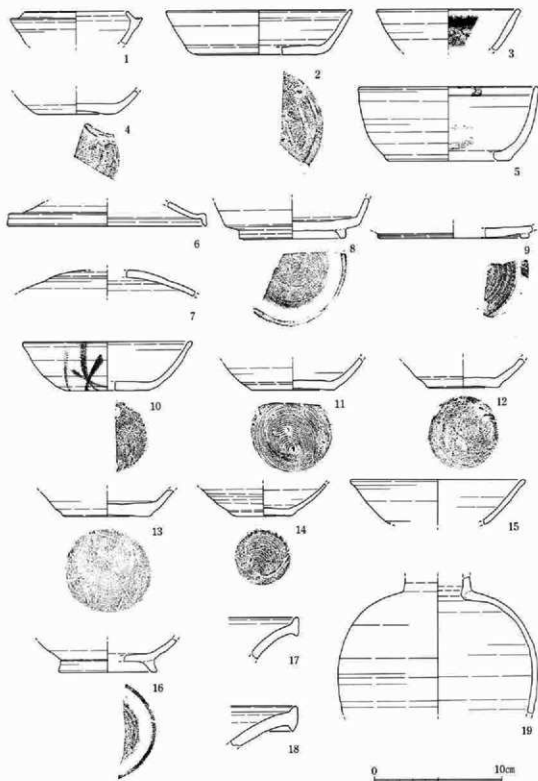


図64 中世以前の遺物—須恵器—

8は高台付杯。残存率体部中位以下1/2。復元高台径8.5cm。底部は平底でやや厚く、体部は強く屈曲して直線的に立ち上がる。高台は底部やや中央に付き、断面矩形となる。外底は回転ヘラケズリで、高台基部内側はナデ、他はヨコナデ調整。内底は若干摩滅する。胎土は砂粒、白色粒を含んで堅く、焼成は良好。色調は暗灰色。攪乱出土。

9も高台付杯。残存率底部1/8。復元高台径12.0cm。底部が僅かに丸みをもち、高台と共に接地する形になる。高台は低く底部外縁に付き、断面台形を呈する。外底は回転ヘラケズリ、高台基部内側はナデ、内底はヨコナデで良く摩滅する。胎土は白色粒、輝粒を少量含み、焼成は良好。色調は灰色。3面出土。

10は杯。残存率1/3。復元口径13.2cm、底径6.6cm、器高4.4cm。外底は右回転糸切り。他はヨコナデで、内底は若干摩滅する。胎土は白針を非常に多く、砂粒、黒色輝粒、白色粒を少々含む。焼成は良。色調は若干茶色がかかった灰色。外面に「火ダスキ」が見られる。3面上出土。

11は杯。残存率底部3/4。復元底径6.5cm。外底は右回転糸切り。他はヨコナデで、内底はやや摩滅する。胎土は白針を多く、砂粒、白色粒、輝粒をやや含む。焼成は良好。色調は若干茶色がかかった灰色。トレンチ2上層出土。

12は杯。体部中位以下残存。底径5.8cm。底部は平底で右回転糸切り。他はヨコナデで、内底中央が若干摩滅する。胎土は砂粒、輝粒、白色粒を含む。焼成は良好。色調は暗灰色。トレンチ1岩盤直上出土。

13は杯。底部残存。底径7.0cm。底部は厚手でやや突出する。外底は右回転糸切り、他はヨコナデ。外底外周及び内底は摩滅する。胎土は砂粒、白色粒をやや多く含む。焼成は良好。色調は灰色だが、一部淡灰褐色を呈する。トレンチ1岩盤直上出土。

14は杯。体部中位以下残存。底径4.2cm。やや突出する矮小な底部から、薄手の体部が緩やかに開く。外底は右回転糸切り。他はヨコナデで、体部外面には細かなクロ目が残る。胎土は砂粒、輝粒、粒径1～3mmの白色粒をやや多く含む。焼成は普通。色調は暗青灰色。2区3面柱穴出土。

15は杯。残存率体部1/8。復元口径13.5cm。内外面ともヨコナデ。胎土は砂粒、白色粒、輝粒、黒色輝粒を含み、焼成は甘く軟質。色調は灰白色を呈する。トレンチ1岩盤直上出土。

16は高台付碗と思われる。残存率底部1/3。復元高台径7.8cm。高台は断面ほぼ矩形で外反気味に開く。外底は糸切り、高台基部内側はナデ、他はヨコナデ調整。内面はやや摩滅する。胎土は砂粒、白色粒を含み、やや締まりに欠ける。焼成は良好だが還元しきらず、外面は灰黒色、高台内及び内面は灰色を呈する。トレンチ1岩盤直上出土。

17は甕。口縁部小片。胎土は非常に堅緻。焼成は良好。色調は器表が暗灰色、胎芯が暗赤褐色。上面に明灰白色の自然釉が厚くかかる。トレンチ3上層出土。

18は甕。口縁部小片。胎土は粒径1～2mmの白色粒をやや多く、砂粒、輝粒を少々含むが堅緻。焼成は良好。色調は器表暗灰色、胎芯暗赤褐色。上面に暗灰白色の降灰が甕らにかかる。3面出土。

19は長頸瓶。残存率胴部上半1/4。復元口頸部径5.4cm、胴部径15.8cm。胴部は殆ど球形で器肉

が薄い。口頸部は2段構成による接合。胎土は白色粒、砂粒を若干含むが均質。焼成は良好。色調は暗灰～灰褐色。胴部上半に灰緑色の降灰が斑らにかかる。トレンチ3上層出土。

灰釉陶器・墨書土器（図65）

1～5は灰釉陶器。

1は碗。残存率底部1/4。復元高台径8.5cm。高台は所謂三日月高台で、底部やや中央寄りに付く。外底は回転ヘラケズリ。内底は良く摩耗する。釉はハケ塗りで、外面高台付近まで掛けられ、内底外周にやや溜まる。胎土は砂粒、輝粒を含み、黒色微斑が若干見られる。焼成は良好。色調は、素地が明灰色、釉が灰白～灰緑色を呈する。2区3面柱穴出土。

2は碗。残存率底部1/4。復元高台径8.3cm。高台は三日月型。外底は回転ヘラケズリ。内底は良く摩耗。釉はハケ塗り、体部外面下端及び内底外縁まで掛けられる。胎土は砂粒、黒色微斑、輝

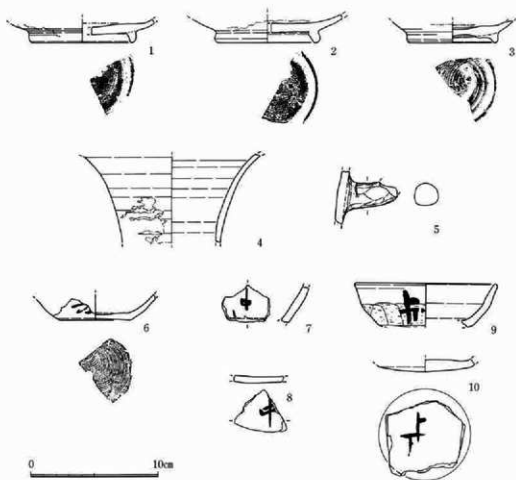


図65 中世以前の遺物－灰釉陶器・墨書土器－

粒を含む。焼成は良好。色調は素地が明灰色、釉が灰白色。3面出土。

3は碗。残存率底部1/4。復元高台径7.2cm。高台はやや潰れて三角形になり、底部際にやや粗雑に貼り付けられる。外底には回転糸切り痕が残る。内底は非常に良く摩耗して滑らか。釉は殆ど残存せず不詳だが、浸け掛けによると思われる。体部外面下端に釉擦の線が見え、内底外周に少量溜まる。胎土は輝粒、黒色微斑を若干含むが緻密。焼成は良好。色調は、素地が灰色、釉が灰白～灰緑色を呈する。1区3面柱穴出土。

4は長頸瓶であろう。残存率頸部1/4。復元頸部下端径7.8cm、上端径14.0cm。頸部が太く、緩やかに大きく外反して広口になるものである。内外面ヨコナデで、クロロ目が良く残る。釉は一部を除いて殆ど剝離している。胎土は砂粒、白色粒、黒色微斑を含む。焼成は良好。色調は、素地が明灰色、釉は灰白～灰緑色を呈する。2区3面柱穴出土。

5は環状把手の基部と思われる。把手部径1.8～1.9cm。僅かに残る胴部には曲率がなく、把手がほぼ垂直に貼り付けられて伸び、屈曲部分で欠損している。把手は手づくねの粘土紐で断面不整形、指頭痕が残る。釉は外面はほぼ全面に掛かる。胎土は砂粒、白色粒を少量含む。焼成は良好。色調は、素地が明灰色、釉が灰緑色を呈する。2区3面柱穴出土。類例が少なく器形は不明だが、環状把手付きの長頸瓶が考えられる。4と同じ柱穴から出土しており同一個体の可能性もあろう。

6～10は墨書土器。

6は須恵器杯。残存率体部中位以下1/4。復元底径5.6cm。外底は右回転糸切り。他はヨコナデ。胎土に微砂粒、白色粒、小石、赤褐色粒を含む。焼成は酸化焰だが良好。色調は体部が淡茶灰色、底部が淡橙灰色を呈する。墨書は体部外面下半に見られるが、欠損して不詳。あるいは「万」と読めるか。トレンチ3上層出土。

7は土師器杯。体部下小片。外面は横位ヘラケズリだが、指頭痕が若干残る。内面ヨコナデ。胎土は微砂粒、輝粒を少量含む。焼成は良。色調は内面が淡茶灰色、外面が淡橙色。墨書は内面2カ所に見られ、一つは天地逆に「中」と書くが、もう一つは不詳。やや稚拙な手である。トレンチ3上層出土。

8は土師器杯。底部小片。外面は一定方向ヘラケズリ、内面はナデ。胎土は砂粒、輝粒、黒色輝粒、赤褐色粒を含む。焼成は良好。色調は橙褐色。外面に「中」と墨書する。トレンチ3上層出土。

9は土師器杯。残存率1/4。復元口径11.0cm、底径7.4cm。体部のケズリは器高の1/2程で1段。口縁部は僅かに外反する。胎土は砂粒、金雲母、黒色輝粒を含む。焼成は良好。色調は橙褐色を呈する。墨書は体部外面に見られるが、一部を欠く上、墨痕も薄く不明瞭。「上」「下」2文字を組み合わせたようにも見える。トレンチ1出土。

10は土師器杯。底部残存。復元底径7.4cm。外底は略一定方向ヘラケズリ。内底はナデで良く摩耗する。胎土は砂粒、輝粒、白色粒、赤褐色粒を含む。焼成は良好。色調は黄橙色。墨書は外底中央付近になされる。墨痕は不明瞭だが、やはり「上」「下」の組み合わせか。トレンチ2中層出土。

出土遺物の年代など

本遺跡から出土した中世以前の遺物の大半は、波蝕台岩盤上に形成された、砂丘後背湿地堆積層に包含されるものであり、且つ狭小なトレンチ内の限定的な資料であるため、遺存・出土状況は必ずしも良好ではない。しかしながら、そこにも中世以前の海浜における人間活動の痕跡を窺い知ることができよう。

弥生時代後期～古墳時代前期に属するものとしては、複合口縁の甕（図63-1）や、台付甕（図63-3）、ヘラミガキ・赤彩される甕（図63-4）等が挙げられるが、僅少である。該期の遺物は本遺跡付近（長谷周辺）に定量分布しているが、明確な遺構は認められず、海浜における生活臭は希薄である。

古墳時代後期の遺物も依然少ない。土師器では、房総の系譜を引く須恵器杯身模倣の黒彩杯（図62-1）が、6世紀末～7世紀中葉にかけて搬入されたものと思われる（註1）。「比企型」杯（図62-4・5）は7世紀の範疇に入る。「比企型」杯と酷似した要素をもつ壺（図63-6）も同様であろう。須恵器杯蓋模倣杯（図62-7・8）、半球形の杯（図62-9）、ヘラケズリ整形の甕（図63-7・8）等は、該期から次代にかけての製品である。須恵器では、受部をもつ矮小化した杯身（図64-1）が7世紀中葉、岩崎17号窯式に相当する。

奈良時代に属するものは多い。まず土師器では、所謂「相模型」杯（図62-12～17）は、綾瀬市宮久保遺跡、秦野市草山遺跡における分析を援用すれば、8世紀後半に相当する（註2）。「南武藏型」と言われる杯（図62-18・19）もほぼ同時期であろう。須恵器では、東海系の杯（図64-2）、高台付杯（図64-8）等が8世紀中頃である。尚、周辺の調査地点をはじめ、鎌倉市内で比較的频率に出土する所謂盤状杯は1片も含まれていなかった（註3）。

平安時代になると、土師器は希薄で様相が不明なものとなる。「甲斐型」杯（図62-20～23）の内、底径が大きく、内底の暗文が見られる20・21は、前代の8世紀後半から9世紀初頭頃のものと思われるが、22・23はやや下るものかも知れない（註4）。「相模型」の粗雑化したものと考えられる杯（図62-24）は10世紀中頃、高台付杯（図62-26）はそれよりやや下るか、体部外面に指頭痕を残す粗製の杯（図62-27）は、11世紀前半辺りの年代観が与えられそうである（註5）。内面黒色土器碗（図62-28）はシャープな高台の作りなど他に例を知らないものであるが、27と同様の時期かと考えられる。「類製塩土器」とされている甕（図63-10～14）は、器厚やや厚く作りのしっかりしたものとそうでないものとは年代的にも差があると考えられるが、概ね9～10世紀の所産であろう（註6）。須恵器では、口頸部2段構成の長頸瓶（図64-19）が8世紀末～9世紀前半（折戸10号～井ヶ谷78号窯式）に相当するか。杯は、底部回転糸切り無調整の製品（図64-10～14）が主体を占める。10・11は胎土に白色針状物質を多く含むもので、北武蔵（南比企窯）の産であろう。中でも10は渡辺一氏の編年Ⅶ期に該当すると見られ、概ね9世紀後半と推定される（註7）。14は底部矮小化が著しく、10世紀代に下るものと思われる。高台付碗（16）も同様であろう。共に御殿山5号窯式辺りの製品か。灰釉陶器は、破片総計10点と僅かである。碗では、図65-1・2が、灰釉ハ

ケ塗り・底部回転ヘラケズリ調整であり、黒笹90号窯式、凡そ9世紀後半に該当し、図65-3は、灰釉掛け掛け・底部回転糸切り無調整であることから、折戸53号窯式、10世紀前半と考えられる(註8)。測図不能な他の小片(碗・皿)も、殆どは前者に属する。長頸瓶(図65-4)も、口頸部が太く外反気味であり、碗の年代と大きく乖離するものではなかろう。環状把手(図65-5)については、類例が少なく不詳だが、9世紀代には有環瓶が多く焼造されると言われている(註9)。

墨書土器は、各トレンチから計5点が出土している。内容的には、いずれも大きさ等を表す文字である点が注意される。年代を知る根拠は希薄だが、図65-9はやや小振りの「相模型」坏で、9世紀代の所産であろう。図65-6の須恵器は下って10世紀代に入るものと思われる。鎌倉市内における古代墨書土器の出土例はそう多くなく、海岸地帯を中心に4遺跡で知られるのみであり(註10)、本遺跡の5点の集中的な出土は特異とも言える。因みに、鎌倉郡衙と目される古代官衙遺構の検出された今小路西遺跡では、墨書土器は1片も発見されていない(註11)。

註

- (1) 長谷川厚『相模地域の鬼高式土器』『考古学ジャーナル』342 特集 鬼高式土器の諸問題 ニューサイエンス社 1992
- (2) 國平健三・長谷川厚『宮久保遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター 1990
大上周三・長谷川厚『草山遺跡Ⅲ』神奈川県立埋蔵文化財センター 1990
しかし、復元法量・器形からの推測であり、断定できない。むしろ、9世紀代のものと考えられる北武蔵産須恵器が定量搬入されている事から見て、これらの中により下るものも含まれている。
- (3) 鎌倉出土の盤状坏については、菊川英政氏が簡潔にまとめられている。
菊川「第3節 中世以前の遺構と遺物」 齊木秀雄他『長谷小路南遺跡』同発掘調査団 1992
- (4) 瀬田正明「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器—その編年と年代—』甲斐型土器研究グループ第1回研究集会資料 山梨県考古学協会 1992
- (5) 水口由紀子「考古遺物からみた中世成立期の様相」『文化財の保護』第21号 特集 東京の中世考古学 東京都教育委員会 1989
今小路西遺跡で、体部にケズリの入った、本例より若干通りそうな製品が出土している。
河野真知郎『今小路西遺跡(御成小学校内)第5次発掘調査概報』同発掘調査団・鎌倉市教育委員会 1993
- (6) 「類製埴土器」とは、三浦市浜諸磯遺跡の調査における命名であるが、それが製埴を主たる用途としたものか、未詳である。葉山町一色海岸より3kmほど内陸の台地上に立地する開門遺跡では、平安期の住居址から出土しており、一般的な煮湯容器として使用されていた。鎌倉市内でも近年出土例が報告されるようになり、海浜の遺跡で広く分布していることが明らかになってきている。概ね厚手で口唇部整形のしっかりしたものが古手のようである。

岡本勇・中村勉・諸橋千鶴子『浜路磯道跡』同調査団 1991

北原實徳他『開門道跡』同調査団 1994

原廣志他『由比ガ浜中世集団墓地道跡 由比ガ浜二丁目1034番1外地点』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9 鎌倉市教育委員会 1993

- (7) 渡辺一「南比企窯跡群の須恵器の年代—鳩山窯跡の年代を中心に—」『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会 1990

- (8) 井上喜久男『尾張陶磁』ニューサイエンス社 1992

- (9) 橋崎彰一『白雲』日本陶磁全集6 中央公論社 1976

- (10) 長谷小路南道跡（前掲註3）、若宮大路周辺道跡群（菊川英政「若宮大路周辺道跡群 小町二丁目12番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』8 鎌倉市教育委員会 1992）、由比ガ浜中世集団墓地道跡（由比ガ浜四丁目1134番地点 青果市場 大河内勉氏の御教示）、長谷小路周辺道跡（由比ガ浜三丁目194番40地点 大河内勉氏の御教示）の4地点。いずれも概ね平安期に属するものである。

- (11) もっとも、今小路西道跡の官衙遺構は、8世紀代には正庁域であり、9世紀代に一時断絶、10世紀に至って倉庫（正倉？）域に変容する。

河野眞知郎他『今小路西道跡（御成小学校内）発掘調査報告書』同発掘調査団・鎌倉市教育委員会 1990

宮田真他『今小路西道跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地・御成町625番2地点）』同発掘調査団・鎌倉市教育委員会 1993

河野 前掲註5

〈参考文献〉（註に掲げたものを除く）

西井清治「生産地の様相と編年 多摩・比企」『季刊考古学』第42号 特集須恵器の編年とその時代 雄山閣出版 1993

後藤建一「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県窯業道跡（静岡県内窯業道跡分布調査報告書）』本文編 静岡県教育委員会 1989

『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸窯検討のための「会津シンポジウム」資料 大戸古窯跡群検討会 1992

「シンポジウム 古代末期～中世における在地系土器の諸問題」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会 1986

「シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題—相模国と周辺地域の諸相—」『神奈川考古』第14号 神奈川考古同人会 1983

末筆ながら、本館を執筆するにあたり、以下の方々から多大なる御教示・御指導を賜りました。深謝の意を表します（敬称略）。

大塚真弘 大河内 勉 菊川英政 高村公之 中三川 昇 長谷川 厚 服部実喜

第五章 まとめ

今回の調査は160㎡とごく限られた調査面積ではあったが、中世基盤層を含め3時期の生活面が確認され、600を超える柱穴の他、方形竪穴建物1棟、木組遺構2基、土壇27基、溝状遺構1条が検出された。これら検出された遺構の年代観は確認した層位や出土遺物などから探ることになるが、土壇や柱穴など各遺構からの遺物の出土状況は必ずしも良好なものとはいえず各遺構ごとの年代観は明らかでない点も多い。各面ごとに出土した遺物をみると、3面（中世基盤層）の舶載陶磁器は青磁榑描文碗が1点出土しているが青磁蓮弁文碗、白磁口元皿がほとんどを占めている。またかわらけは小片も含め全て轆轤成形の製品であり、岩盤まで掘り下げたトレンチからもいわゆる同安窯系の劃花文の製品や手捏ね成形のかわらけは1点も出土していない。常滑の甕はやや縁部部の幅が広い製品が多い。2面は舶載陶磁器等も含め概ね3面と同じ傾向を示しているが、かわらけの法量は明らかに大、中、小に分かれ、薄手の製品がみられるようになるが器高は低いものが多い。常滑の甕の縁部は幅が広い。1面は広い範囲にわたって攪乱されており出土遺物も少なく判然としないが2面と同じような傾向を示している。概ね各面の年代観は1面が14世紀中～後半、2面が14世紀前半、3面が14世紀初頭と考えられ、この間断なく生活が営まれていたであろう。

検出した遺構のうち、柱穴については全体の3割程の柱穴に何らかの規則性や共通性を見出し、大小20棟に及び据立柱建物を復元した。しかしながらこれらの建物は調査面積が狭いこともあって

2 面	建物1	東西4間(2.00m) × 南北4間(1.95m)	N-10.5-E
	建物2	東西4間(2.00m) × 南北3間(2.00m)	N-11.0-E
	建物3	東西2間(2.00m) × 南北2間(1.90m)	N-13.5-E
	建物4	東西1間(2.00m) × 南北2間(1.90m)	N-14.5-E
3 面	建物5	東西2間(2.00m) × 南北2間(2.00m)	N-12.0-E
	建物6	東西2間(2.00m) × 南北3間(2.00m)	N-11.5-E
	建物7	東西2間(2.00m) × 南北5間(1.95m)	N-10.0-E
	建物8	東西2間(2.00m) × 南北4間(2.00m)	N-10.0-E
	建物9	東西2間(2.00m) × 南北3間(2.00m)	N-10.3-E
	建物10	東西3間(2.00m) × 南北3間(2.00m)	N-13.0-E
	建物11	東西2間(2.00m) × 南北3間(2.00m)	N-11.0-E
	建物12	東西3間(2.00m) × 南北3間(2.00m)	N-8.5-E
	建物13	東西3間(2.00m) × 南北4間(2.00m)	N-11.5-E
	建物14	東西1間(2.00m) × 南北5間(2.00m)	N-10.0-E
	建物15	東西1間(2.00m) × 南北3間(2.00m)	N-11.0-E
	建物16	東西1間(2.00m) × 南北2間(1.85m)	N-10.0-E
	建物17	東西2間(2.00m) × 南北2間(2.00m)	N-7.5-E
	建物18	東西2間(2.00m) × 南北1間(2.00m)	N-6.5-E
	建物19	東西1間(2.00m) × 南北2間(1.95m)	N-7.5-E
	建物20	東西2間(2.00m) × 南北1間(2.00m)	N-7.5-E

表29 建物一覧表

建物全体の規模を特定するにはいたらなかった。復元した建物の確認規模は表29、柱穴の切り合い等による建物の新旧関係は図66に示した。また図67に建物の配置図を示した。3面の建物は煩雑さをさけるため方向性や新旧関係などから大きく3つに分けているが、直接切り合いの確認できない柱穴や建物もあり必ずしも図が建物の変遷を示しているとは限らない。

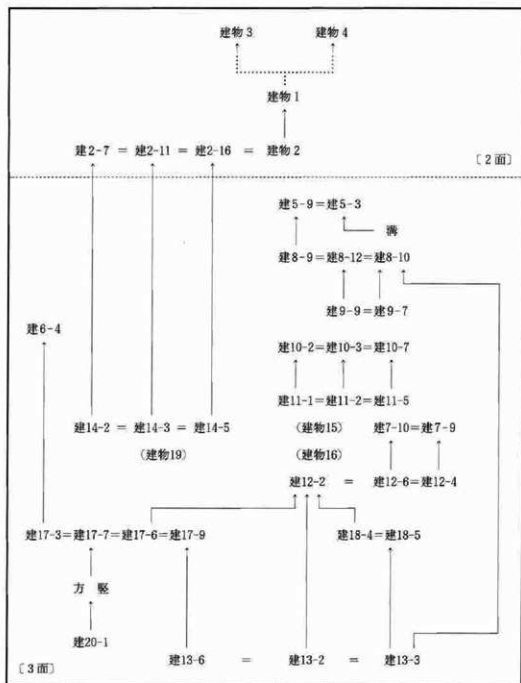
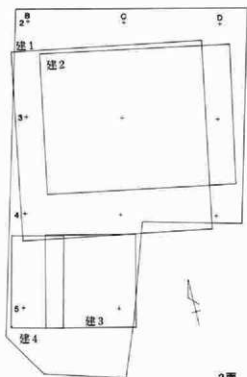
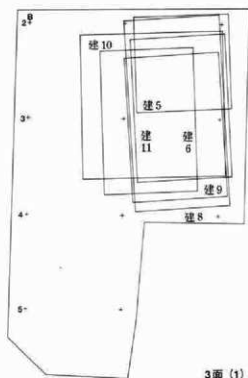


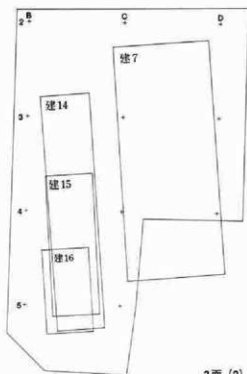
図66 建物変遷図



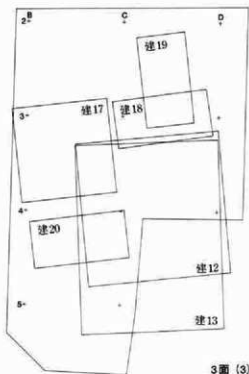
2面



3面 (1)



3面 (2)



3面 (3)

图67 建物配置图

復元した建物のうち規模の大きな建物を見ると、2面の建物1・2、3面の建物12・13及び東西方向の規模は不明であるが建物7・14などが上げられよう。2面の建物2は土丹（破碎泥岩）を用いたかなり大規模な地業が行われており、その範囲は建物の範囲のみに止まらず調査区全域にわたって確認され、さらに調査区外の広い範囲に広がっているようである。また柱穴等の土層断面の観察では、この地業が建物2の造営と同時にしくはきわめて近い時期に行われ、建物2から建物1への改築時においても土丹地業面を意識してほぼ同規模の建物へと建て替えている。この際にも部分的に土丹地業層の積み増しが行われているようである。建物1・2とも柱間間隔は2m程であるが柱並びは整然としており、土丹地業層も堅固でかなりしっかりした建物であったと考えられる。

3面の建物12、13は方向性にやや違いがみられるが、ほぼ同じ規模で同じ位置に建てられている。建物13は3面で確認された建物のなかでも柱穴の掘り方が明らかに礎板の規模も大きくかなりしっかりした建物と考えられ、柱穴の切り合いなどから3面のなかでも初期の頃の建物と考えられる。建物12は建物13とほぼ同じ位置に検出されたが、柱穴の切り合いが多く疑問の残る建物の一つである。建物13の建て替えとも考えられるが柱穴の切り合い関係を見ると建物13-6及び13-3の柱穴を切る建物17、18が存在し、その後建物12が建てられたものと考えられる。建物7と14はいずれも南北5間分が確認されたが東西方向は調査区外へ続いている可能性があり建物全体の規模は不明である。2棟は1m程離れてほぼ平行して建てられており、同時期に存在していた可能性が考えられよう。また建物15、16は確認された範囲も狭く、他の建物の柱穴と切り合い関係が確認できないため建物の規模や時期は判然としないが建物14と同じ様な建物の可能性が考えられる。

1区東半で確認された建物5・6・8・9・10・11は調査区の北側及び東側にさらに続いている可能性も考えられるが、同じ様な場所に繰り返し建てられている。建物10・11を除いた礎板の検出レベルは比較的浅く、建物5-1・2・3、建物8-3の柱穴は2面土丹地業層直下の粘土層あたりから掘り込まれているのが確認されており3面の建物のなかでも2面に近い時期の建物であろう。

建物17・18・19・20は確認した限りでは小屋程度の小さな建物であるがほぼ平行するように復元され、相互の新旧関係ははっきりしないが同時期に存在していた可能性が考えられる。

建物の変遷を大まかにまとめてみると、3面の初期に規模の大きな建物13が建てられ、次いで規模の小さな建物17・18・19・20がほぼ同時期に存在し、さらに建物13と同規模の建物12が建てられ、その後やはり規模の大きな建物7・14（15・16も含まれる可能性がある）が平行して建てられている。3面の終末に近くなると建物11・10及び建物9・8・5・6が同じ様な位置に繰り返し建て直されていると考えられる。その後2面の土丹を用いた堅固な地業が行われるとともに規模の大きな建物2及び1が建てられている。

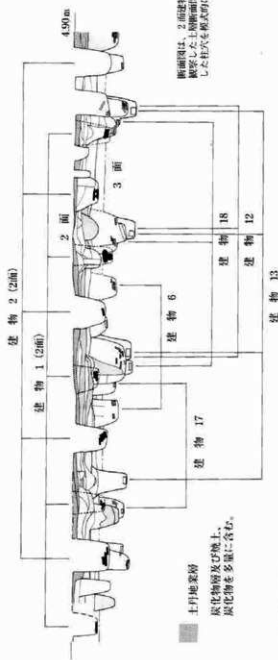
2区で検出された方形堅穴建物は遺構の一部が確認されたにすぎず全容は不明である。深さや確認した規模から建物の張り出し部に相当するものと考えられ主体部は調査区の西側にあると考えられる。掘立柱建物と明確な切り合いは少なくその時期は判然としないが、建物20と建物17の間の時期に存在していたと考えられる。

+ C-2

+ C-3



図68 柱穴土層断面模式図



建物の変遷について述べてきたがいずれの建物も柱間間隔が概ね2m程で7尺(2.1~2.15m)の規模を想定しうる建物は確認されず、また塀や櫓列、溝といった建物に伴う区画や地割りを示すような遺構は確認されなかった。2面上及び2~3面間の整地層などに炭化物が薄く堆積し、礎板のなかにも一部炭化した材が認められるなど火災による建て替えも考えられるが、建物は頻繁に建て替えられており建物の存続期間はかなり短いと考えなければならないであろう。

出土した遺物は市街地の調査で出土する遺物とほとんど変わりなく調査地点の性格を示すような遺物は認められない。また周辺の調査も少なく本調査地点の遺構の性格を中世都市としての鎌倉の中でどのように位置づけるか即断は難しいが、調査地点4では本調査地点とはほぼ同時期と思われる5間×4間の掘立柱建物や井戸、小規模な溝による区画が検出され、また調査地点2では土丹を用いた地表面などが検出されている。5間近い規模の建物が数度にわたって建て替えられていること、かなり広範囲にわたって土丹を用いた堅固な地盤がなされていることなどを考えると屋敷地の一角と思われる要素が多いが、方形堅穴建物の存在や頻繁に建物が建て替えられていることなどから町屋的な部分も否定しきれないところもある。今回の狭い調査範囲の結果だけで調査地点周辺の性格を特定することはできないが、いずれにしても本調査地点の大きな特徴は大小の建物が100年に満たない間に頻繁に建て替えられ、しかも方形堅穴建物がある時期建てられていることであろう。

本調査地点は長谷小路(現在の国道134号線)に面し、甘縄神社の現参道の西に位置していることから道路やこれに伴う溝といった遺構を想定したがこれらについては全く資料は得られなかった。逆に2面の土丹地表面層は国道や参道の方にさらに広がっているようであり近くに道路や溝などの存在は想像しにくい結果であった。

重複した多くの柱穴から復元した建物は1間×2間の小さな仮小屋的な建物から4間×4間もしくはこれ以上の母屋に四敵する建物などを想定しているが、筆者自身復元に対して疑問が払拭できない点も多くあることは事実である。掘立柱建物を考える上で柱間間隔や配置の規則性は重要な要件であるが、調査範囲が狭く建物を想定する上で必要不可欠な空間的広がりが見えず、建物の限界が特定できない以上想像の域を越えられないことは仕方あるまい。そうしたなかで柱穴から検出した礎板の接合関係による検討は(市内の数カ所の調査で試みられているが)直接関連性の把握しにくい柱穴の同時性や平面的広がりを考えるうえで有効な手段であろう。

調査時の湧水や悪天候などの物理的条件の他、覆土の認識や認識の甘さなど調査担当者及び調査員の経験不足により本来の資料的価値の減少など多々反省する点が多いと考えている。今回の調査結果は検証不足の点もあるが、今後の周辺の調査や市内各地の調査結果とも合わせ調査地点周辺の性格などより具体的な復元ができるよう努めていきたい。

写真図版



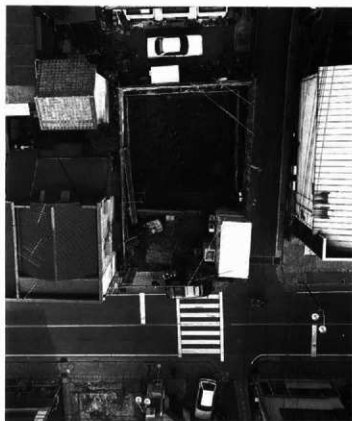
調査地点近景（南より・魚眼レンズ使用）
正面丘陵中腹が甘繩神社



A. 調査地点遠景

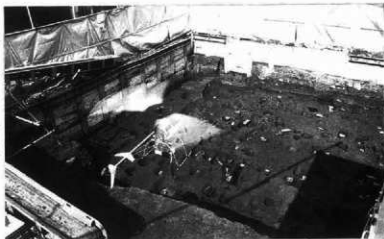
縮瀬川河口上空から調査地点を望む
写真左が縮瀬川、右が美奈ノ瀬川

B. 調査地点全景（1区3画調査時）



調査地点右側が甘嶋神社参道
下側が国道104号線（長谷小路）

A、ランコンヘリによる撮影風景



B、調査地点上空より市街地を望む





A. 1区1面全景（南より）



B. 2区1面全景（東より）

A. 礎石検出状況 (1区・1面)



B. 常滑焼出土状況 (1区・1面)



C. かわらけ出土状況 (1区・1面)



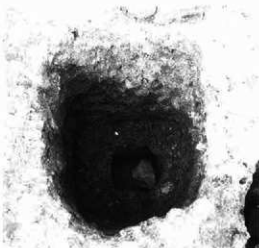
D. かわらけ出土状況 (2区・1面)



A. 1区2面全景（南より）



B. 2区2面全景（東より）



A. 建物1 柱穴15検出状況



B. 建物1 柱穴10検出状況



C. 建物1 柱穴3土層断面

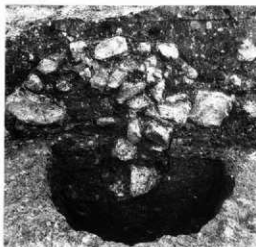


D. 建物1 柱穴10土層断面



E. 建物1 柱穴5（写真右側）土層断面

2面土丹地裏層直下から掘られている
柱穴（写真左側・建物としては復元さ
れなかった）の様子がよくわかる



A. 建物2柱穴13土層断面



B. 建物2柱穴2礎板検出状況



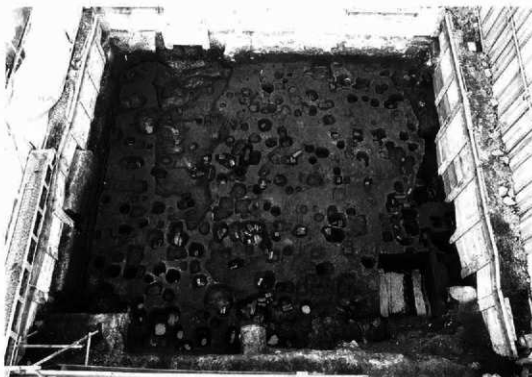
C. 建物2柱穴11～13間土層断面（写真中央が柱穴12）



D. 建物2柱穴4土層断面



E. 土壇9土層断面



A. 1区3面全景（南より）



B. 1区3面全景（東より）



A. 柱穴検出状況（2区）



B. 土塊21（北より）



C. 2区3面全景（東より）



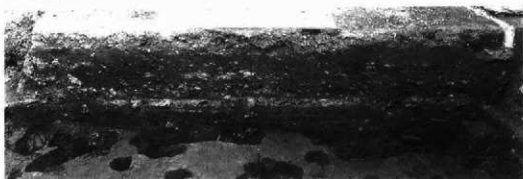
A. 礎板検出状況（C-4グリット付近）



B. 柱穴土層断面



C. 柱穴土層断面



D. 2区東壁土層断面



A. 方形竪穴建物（西より）

B. 方形竪穴建物土層断面



C. 方形竪穴建物横木部分



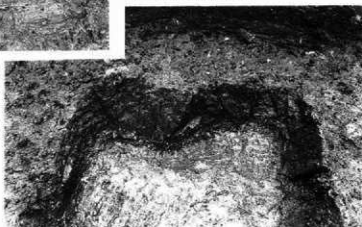
A. 方形竪穴建物横木部分

C. 木組遺構 I (南より)



B. 方形竪穴建物木組部分

D. 木組遺構西面





A. トレンチ1北壁

B. トレンチ2 (南より)



C. トレンチ2・3 (南より)

D. トレンチ2東壁



A. トレンチ3 (西より)

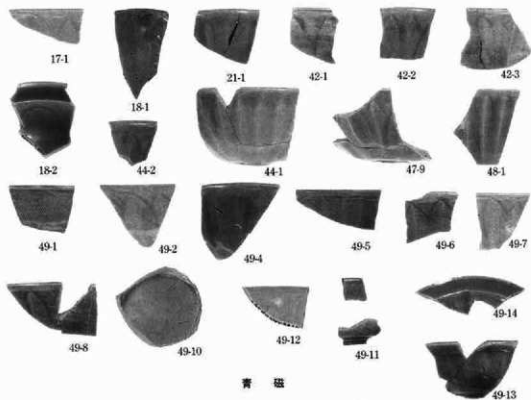


B. トレンチ3 東壁

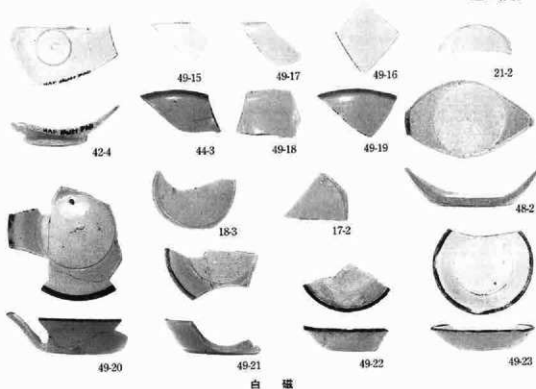


C. トレンチ3 北壁

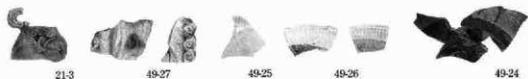




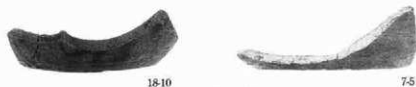
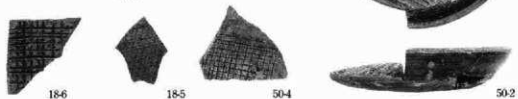
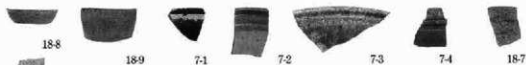
青 磁



白 磁



青白磁



瀬戸



山茶碗

白かわらけ

黒縁皿



銅釜

瓦器

伊勢系土鍋

吉備系



18-4

魚 住



50-7



50-8



50-7



50-9



50-5



50-6

山 茶 碗



21-21



50-16



50-18



50-17



18-16



42-6



50-21



50-20



50-19

常 滑 (壺)



18-17



21-22



50-23



50-22



18-24



18-25

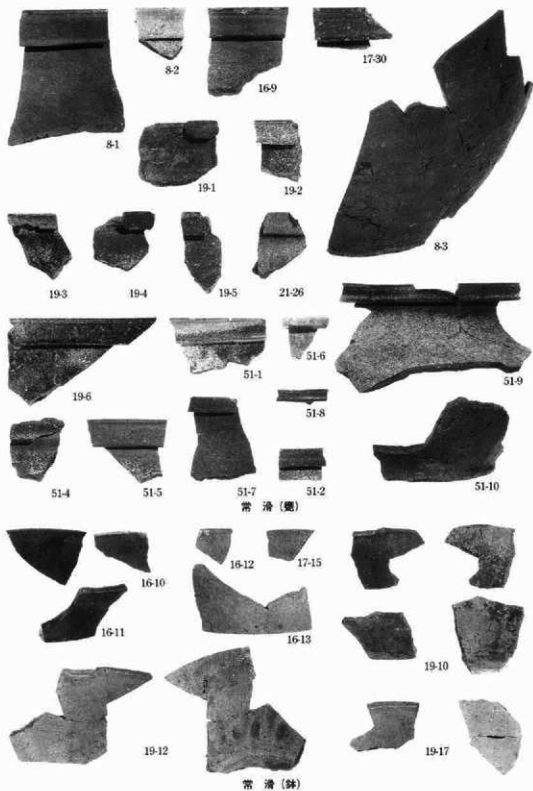


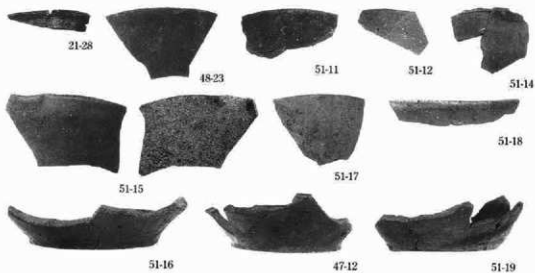
50-15

と り べ

磨滅陶片

羽 口

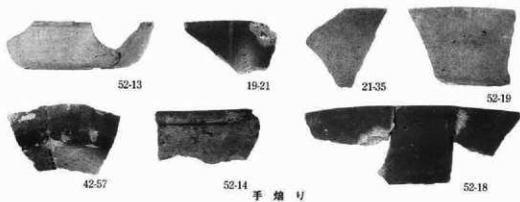




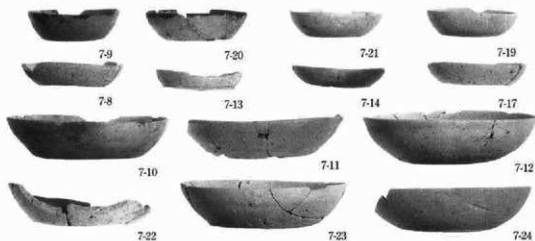
常滑(鉢)



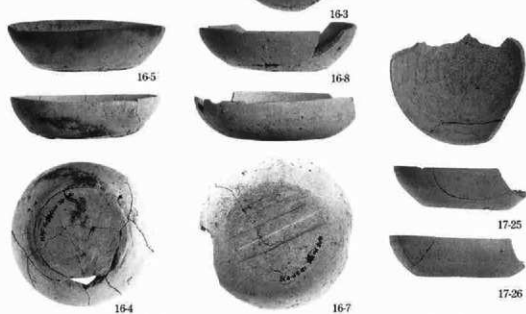
山茶碗窯系鉢



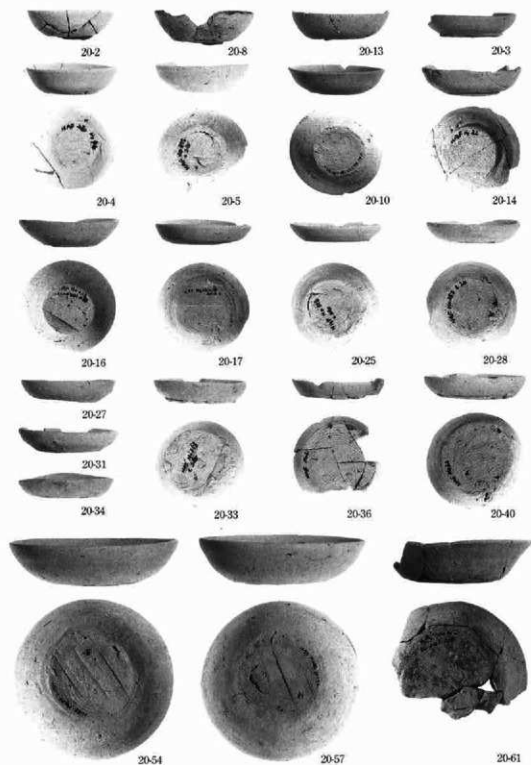
手焼可



1 面



土 壤 8

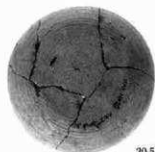




20-43



20-49



20-51



20-42



20-44



20-46



20-47



20-50



20-53



20-58



20-60

2 面



21-6



21-9



21-12



21-8



21-14



21-16



21-17



21-18

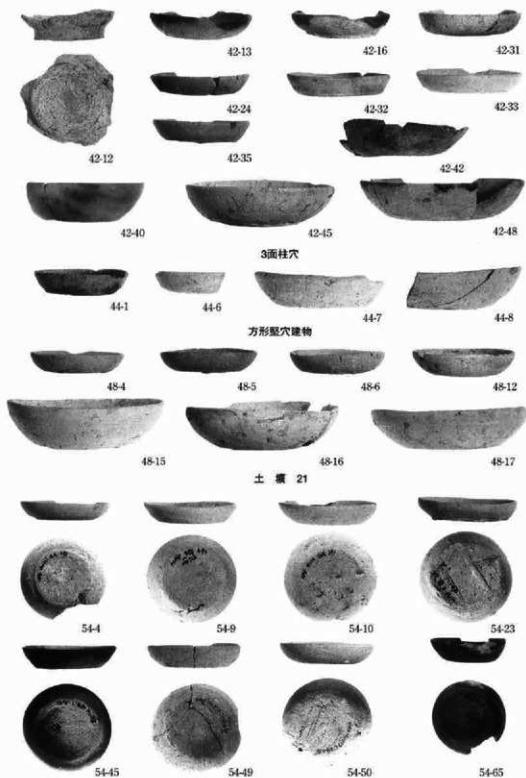


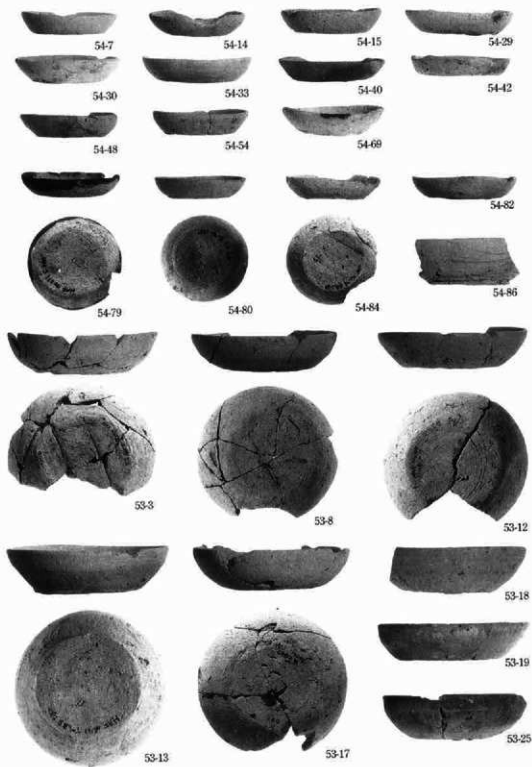
21-19



21-20

2面土丹地属







42-7

42-8

44-9

50-24

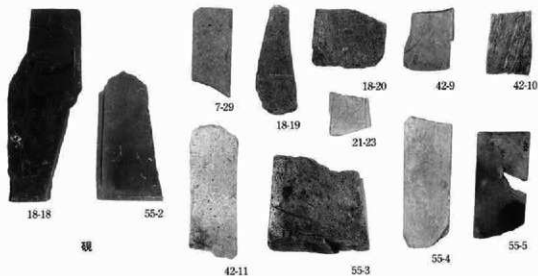
50-25

50-26

55-6

土 錘

土丹製品



18-18

55-2

7-29

18-19

18-20

42-9

42-10

21-23

42-11

55-3

55-4

55-5

硯

砥 石



7-28



18-21

18-22



21-24



55-1

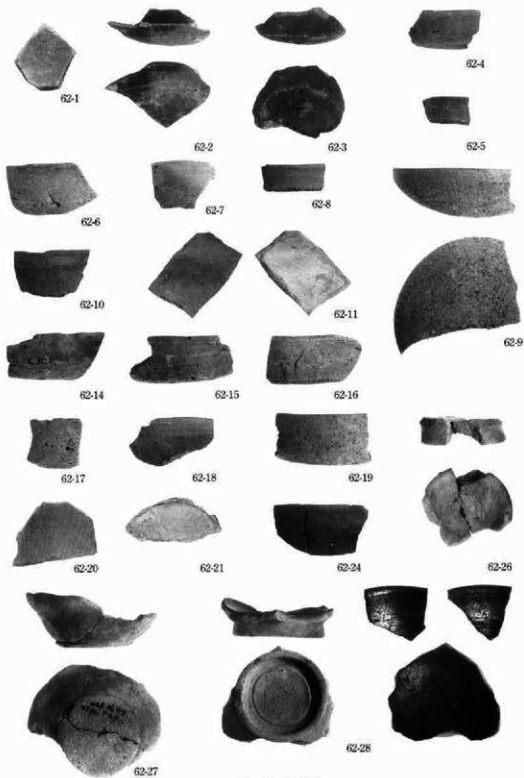


17-18

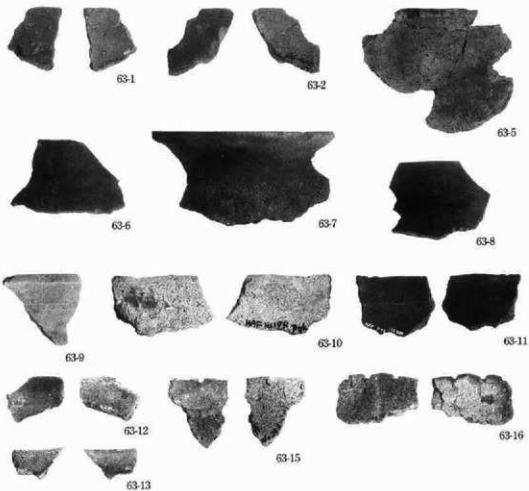


18-23

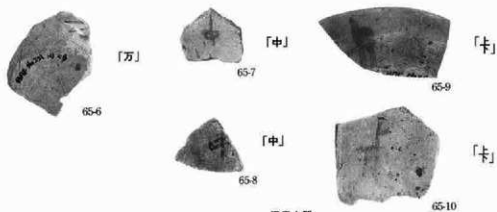
滑石製品



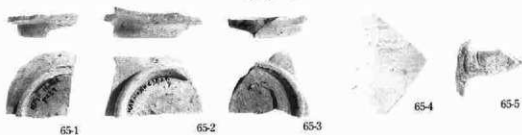
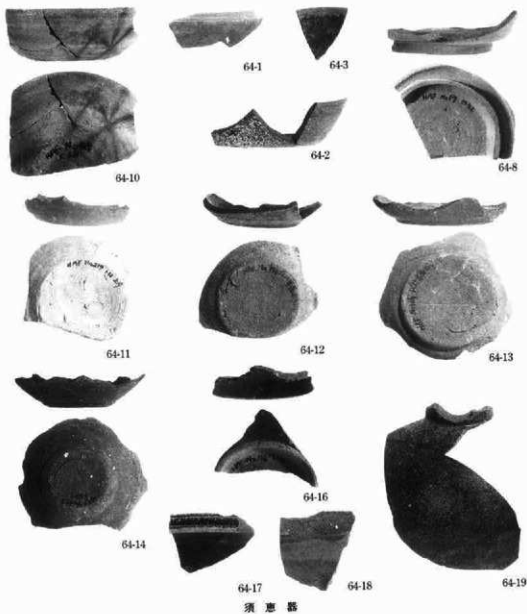
土師器(坏)



土 筋 器 (査・要)



墨書土器



ふりがな		あまなわじんじやいせきぐんはくつちょうさほうこくしよ						
書名		甘縄神社遺跡群発掘調査報告書						
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名		木村美代治 佐藤仁彦						
編集機関		甘縄神社遺跡群発掘調査団						
所在地		〒247 神奈川県鎌倉市台五丁目12番10 TEL 0467-45-0186						
発行年月日		西暦 1995年7月						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経		調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °	調査期間	m ²	
あまなわじんじや 甘縄神社 遺跡群	かながわけん 神奈川県 鎌倉市長谷 一丁目271番10	204	177			19921207 ～ 19930331	160	鎌倉消防署 長谷出張所 改築に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
甘縄神社遺跡群	都市	鎌倉時代末 ～室町時代		掘立柱建物 方形竪穴建物 土塙 木組遺構 溝状遺構		舶載陶磁器 国産陶磁器 木製品		
	散布	古墳時代 ～平安時代				土師器 須恵器 灰釉陶器		

神奈川県・鎌倉市
甘縄神社遺跡群発掘調査報告書
— 鎌倉市長谷一丁目271番10 —

発行日 平成7(1995)年7月
編 集 甘縄神社遺跡群発掘調査団
発 行 鎌 倉 市 教 育 委 員 会
印 刷 朝日オフセット印刷株式会社